純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅴ

目　　次

1．『良質な原理の復活』……2
2．『個人奉仕と団体奉仕』その１ ……3
3．『個人奉仕と団体奉仕』その２ ……4
4．『個人奉仕と団体奉仕』その３ ……5
5．『個人奉仕と団体奉仕』その４ ……6
6．『個人奉仕と団体奉仕』その５ ……7
7．『個人奉仕と団体奉仕』その６ ……8
8．『団体奉仕と政治問題』その１ ……9
9．『団体奉仕と政治問題』その２ ……10
10．『団体奉仕と政治問題』その３ ……11
11．『国際奉仕』その１ ……12
12．『国際奉仕』その２ ……13
13．『国際奉仕』その３ ……14
14．『国際奉仕』その４ ……15
15．『国際奉仕』その５ ……16
16．『国際奉仕』その６ ……17
17．『国際奉仕』その７ ……18
18．『会員増強について』その１ ……19
19．『会員増強について』その２ ……20
20．『クラブ財政と会員増強は無関係』……21
21．『例会出席の意味』……22
22．『ロータリアンとは』……23
附．ＲＩ会長代理挨拶並びにＲＩ現況報告……24

序に代えて

今から５年前の７月に当クラブの時のロータリー情報委員長竹中秀夫会員の発案によりまして、ロータリー３分間情報を『純ちゃんのコーナー』と名付けて発足致しました。それから早くも今年で５年の歳月を閲することになります。まさに「光陰矢の如し」であります。その間、クラブの皆々様の温かい友情と寛容のお心により、浅学非才をも顧みず、何とか雑駁な知識をもって説き続けてまいりましたが、顧みて、誠に内心忸怩たる思いでございます。

元来、ロータリーというものは、色々な側面を持っていますから、色々な視点から分析しなければなりません。先ず、ロータリーは過去100年の歴史をもっていますから歴史の視点があります。そして、ロータリーは一つの思想でありますから思想の視点から分析しなければなりません。そして、ロータリーは巨大な組織であります。したがって、組織の視点からも分析しなければなりません。そして最後に、ロータリーは実践しなければなりません。したがって、実践の視点からも分析をしなければなりません。

このように、ロータリーを説くには、本来、体系的な分析と知識が必要なのであります。しかし、これを例会毎の３分間で説き明かすことは不可能であります。そこで、当初から全くの行きあたりばったり、思いつくままに話す格好になってしまったのでございます。ただ、思いつくままに話したといっても、私は、あくまでもロータリーの原理に則って話してきたつもりでございます。

なお、昨年度は、年間22回しか話すことが出来ませんでしたので、全体としての内容がやや乏しくなりました。

そこで、22回分の話に加えて、今年１月31日～２月１日に東京のホテルニューオータニで開催されましたＲＩ第2580地区（東京都・沖縄県）年次大会にＲＩ会長代理として出席致しました時の「ＲＩ会長代理挨拶並びにＲＩの現況報告」の一文を巻末に付け加えさせていただきました。誠に拙いものではございますが、併せて御高覧賜りますれば幸甚に存じます。

終わりに、この一年間、私の拙い話を辛抱して聴いて下さったクラブの皆様の友情と寛容に心から感謝致しますと共に、この小文集の発刊に御尽力いただいた竹中秀夫会員・中島勝美会員初めクラブ事務局の人達に心からなる感謝を捧げ擱筆致したく存じます。

2006年８月　　深川純一

1．『良質な原理の復活』

ロータリー運動は、恰も時計の振り子のようなものであります。ロータリーの振り子は、時代の変遷に従って、ある時は右へ振れ、ある時は左へ振れて来ました。しかし、振り子は、何時かは、また元の中心へ戻るものであります。

ところで、ロータリーの原理の核である**一業一会員制の原則**は、ロータリー創立以来95年経って2001年の規定審議会において廃止になりました。これは、一つの時代のエポックとして、ロータリーの振り子が振り切ったことを意味します。

では、次は何時元の中心へ戻るのか。95年のスパンで戻るのか。それは判りません。

しかし、廃止になった一業一会員制の原則は、**ロータリーの本質**に根ざした原則であります。したがって、これは良質な原理であります。

世の中の現象は時々刻々として変化します。したがって、一業一会員制の原則も現象としては、一時的には消滅しました。しかし、一時的に、現象としては消滅しましたが、**良質な原理**としては存在しているのであります。

したがって、**良質な原理**はいずれ時代を超越して必ず復活するものなのであります。
例えば、紀元前３世紀から紀元後３世紀にかけて隆々と栄えた**古代ローマ帝国**は、紀元後３世紀に滅亡しました。しかし、ローマ帝国は、滅亡の直前に**ローマ法**という素晴らしい法典を作り上げていたのであります。

そして、その法律に内在する**所有権の原理**は、現代の日本の**民法206条**にそのままの形で受け継がれているのであります。即ち、民法206条は、所有権を定義して、『所有権とは、自分の物を自由に使用、収益、処分することの出来る権能を謂う』と規定しています。

実は、ローマ帝国が滅亡したことによってローマ法という法典はなくなりましたが、その法律に内在する所有権の原理は、**1700年の歳月を超えて**、今の私達の民法にそのままの形で復活しているのであります。

したがって、ポール・ハリスが開発した**一業一会員制の原則**も、その原理が良質であるが故に、何時かまたロータリーの世界に**復活**するものと思うのであります。

昨年度の国際ロータリーの**テーマ**は、ロータリー創立100周年に当たって、**『ロータリーを祝おう』**というものでありました。その趣旨は、単にお祭り騒ぎをするのではなく、過ぎ去りし100年を**回顧**し、そして**反省**し、よりよきロータリーを築き上げる**覚悟**を新たにするものでなければならないと思うのであります。そうでなければ、ロータリーは、**21世紀に崩壊**してしまうだろうと思うのであります。

2．『個人奉仕と団体奉仕』その１

ロータリーの奉仕を考えるときに、個人奉仕と団体奉仕とは何処が違うのか、という両者の特徴を明らかにしておかなければならないと思います。**先ず、第１に、個人奉仕は、クラブ財源の制約を受けません**。個人奉仕は、全て手弁当・ポケットマネーで奉仕するのであります。ニコニコ箱の財源は殆ど役に立ちません。何故かと言うと、これではコミュニティニーズの全てに手当が出来ないからであります。

ロータリアンの個人奉仕は、元来、ボランタリーアクティビティであります。これが、社会的信用の高かった所以であります。ロータリアンは、金を出すべき時には思い切って出します。財源的には、個人で奉仕するからやり易いのであり、大きなことが出来るのであります。クラブの団体奉仕のニコニコ箱では、殆ど何も出来ません。

因みに、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生は、兵庫県の播磨地方に重度身体障害者の施設を設立して欲しいという要請を受けられました。そこで、先生は、先ず、企業や団体を廻って**約６千万円の寄付金**を集められました。そして、それを基にして国から**２億５千万円の助成金**を引き出され、更に、それを担保として福祉振興財団から**２億５千万円の融資**を受けられ、**合計５億６千万円**の資金をもって、姫路の播磨の里に重度身体障害者施設『はりま自立の家』を建設されたのであります。

そして、その３年後、今度は、阪神地方の重度身体障害者の親の要請があり、先生は、前回と同じようにして**約７億２千万円**の資金を集めて、『はんしん自立の家』を建設されました。

更に、数年後、兵庫県の宍粟郡に知的障害者施設建設のニーズが起こり、先生は、今度は**約７億６千万円**の資金を集めて『しそう自立の家』を建設されたのであります。

要するに、今井先生は、一人で**20億円以上**の資金を集めて**個人奉仕を実践**されたのであります。このようなことはクラブの団体奉仕では絶対に出来ないことなのであります。クラブでは、精々ニコニコ箱の数百万円が限度であります。個人奉仕の方が団体奉仕よりも遙かに大きなことができるのであります。したがって、『一人では何も出来ない。しかし、一人が始めなければ何も出来ない。その一人になろう』という言葉がありますが、これは、明らかに団体奉仕を志向するものであります。したがって、個人奉仕では何ともならないからクラブで団体奉仕をしよう、クラブでも何ともならないから地区レベルで団体奉仕をしようという気持が少しでもある間は、未だロータリーが身についたとは言えないと思うのであります。**ロータリーの本体は個人奉仕**であります。したがって、ロータリアンであれば、**個人奉仕の絶対性を信奉**すべきであります。

3．『個人奉仕と団体奉仕』その２

前回は、**個人奉仕はクラブ財源の制約を受けない**ことを申し上げました。そこで

第２に、個人奉仕は、テリトリーの制約を受けません。個人奉仕は、ロータリアンの現在地が奉仕の実践の場でありますから、世界中何処でも実践出来るのであります。

これに対し、団体奉仕は、テリトリーの制約を受けますから、テリトリーの外で実践することは出来ません。テリトリーの外で団体奉仕を実践する時は、そのクラブとジョイントプログラムを組まなければならず、その時はガバナーの承認を得なければなりません。これは、ＲＩの情報媒介機能を使わなければならないので、面倒であります。

では、その時どうするかと言うと、個人奉仕でやればよいのであります。

殊に、クラブの事業計画に組み込まれた個人奉仕は、テリトリーを多少は超えても差し支えありません。もし、他クラブから文句を言われても、あれは個人奉仕であると言い逃れが出来ます。しかも、個人奉仕としてクラブの事業計画には組み込まれているのであります。このように、個人奉仕は、非常に柔軟であります。

因みに、前回申し述べました今井元ＲＩ理事の個人奉仕による身体障害者福祉施設は、何れも今井先生の所属しておられる神戸西ロータリークラブの**テリトリー外**であります。

第３に、個人奉仕は、政治活動が自由であります。個人奉仕であれば、請願書の提出、陳情、国庫助成金獲得運動その他の行動が自由自在に出来るのであります。

因みに、今井元ＲＩ理事の個人奉仕による『ひょうご障害福祉事業協会』は、何億円という国庫助成金によって建築され、運営されているものであります。

これに対して、団体奉仕は、標準クラブ定款第12条「**政治禁の原則**」によって禁止されています。したがって、クラブの団体奉仕としては、一銭の国庫助成金も受けることは出来ないのであります。

第４に、個人奉仕は、他団体との連携が自由であります。

これは個人奉仕だからこそ自由に出来るのであります。団体奉仕の場合には、団体の目的が漠然となるようなジョイントプログラムは、組むことができません。

なお、団体奉仕でライオンズクラブと提携することは、原理的には可能であります。しかし、現実の問題としては、ライオンズクラブの方が乗ってこないだろうと思われます。個人奉仕であれば、ライオンズクラブとの提携も自由自在に出来るのであります。

以上のように見てきますと、どの点をとっても、個人奉仕の方が融通無碍で、やり易いのであります。ただ、ロータリアンにそれをやる気がないというだけのことであります。したがって、ロータリーでは、個人奉仕が様にならないのであります。

4．『個人奉仕と団体奉仕』その3

個人奉仕と団体奉仕に関連して**ロータリーの奉仕の核心**にある問題点を指摘しておきます。

1978～79年度の国際ロータリー会長**クレム・レヌーフ**は、**3Hプログラム**を提唱しました。3Hとは、Health Hanger Humanity**の略語**であります。彼は、このプログラムを提唱して全世界のロータリアンに呼びかけました。

『ロータリアンが個人奉仕で百丁の鉄砲をポンポン撃っても大したことは出来ないだろう。しかし、この百丁の鉄砲を　国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、遙かに大きな効果が得られるだろう。したがって、全世界のロータリアンよ、このプログラムに寄付をしてください』と提唱したのであります。

この提唱は、**ロータリーの原理に反する**こと明らかであります。何故かと言いますと、個人奉仕を鉄砲に例えること自体も間違っていますが、仮に、それを前提としても、ロータリーは、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を未だかってもったことがないのであります。これは、明らかにライオンズクラブの団体奉仕の発想であります。

ロータリーの考え方は、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、一丁の鉄砲を一門の大砲に育てていく発想であります。したがって、百丁の鉄砲であれば、百門の大砲に育てていくのがロータリーの基本的な考え方なのであります。

このように、ロータリーの奉仕は、所謂、**育てる奉仕**なのであります。百人の個人奉仕を一つの団体奉仕に煮詰めるのではなく、一人一人のロータリアンをそれぞれ百門の大砲のような立派な人間に育てていくのであります。

では、一体何処で育てるのか。言わずと知れたこと、それを育てるところがロータリークラブなのであります。これがロータリーの**基本原理**であります。

1974～75年度の国際ロータリー会長**ウイリアム・ロビンス**William R.Robinsは、『ロータリークラブの価値は、そのクラブが地域社会に対して、どのような貢献をしたかによって決まるのではなく、そのクラブがどのような立派な人間を育てたかによって決まるのである』と言っているのであります。

ロータリーは、ライオンズのWe serve になったのではありません。百丁の鉄砲の例で言えば、一つのWe serve ではなくて、百のI serveの集合であります。ライオンズとは、奉仕についての発想の基盤が全く違うのであります。ライオンズの奉仕は団体奉仕、ロータリーの奉仕は基本的に個人奉仕であります。私達は、個人奉仕の絶対性を信奉しなければならないと思うのあります。

5．『個人奉仕と団体奉仕』その4

個人奉仕についても団体奉仕についても、**一点注意**すべきことは、一般的に言って、**『恵む奉仕』『与える奉仕』は奉仕性が弱い**ということであります。即ち、

1907年、初期のシカゴのロータリアン達は『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』という発想に取り付かれて行動を起こしたわけでありますが、世のため人のためにということは、一体何をすればよいのか。

当時は何らの**先例**もありませんでした。そこで、素朴で善意なロータリアン達が考えたことは、世の中には恵まれない人達や社会の歪みに落ち込んで救済を求めている不幸な人達がいるから、それらの人達が欲しがる物を与えることが世のため人のための『奉仕』になるのではないかと考えたのであります。これを**『恵む奉仕』**と言います。

この**『恵む奉仕』**は、ロータリアンとしては、どうしても実践しなければならないことであり、避けて通ることの出来ないことではありますが、これを金銭の投下によって行う場合は、**奉仕性が非常に弱い**ということを注意しておかなければなりません。

したがって、その実践のやり方については、色々と考えなければなりません。単に金を与えればよいというものではありません。思いやりをもって地域のニーズに合わせて、しかも、受益者に**自立心を育てる**ようにしなければならないのであります。

第1回ロータリー世界理解賞を受けられた岩村昇先生の話を紹介しておきます。

岩村先生は、バングラディッシュに戦争が起きた時、草の根の人達と共にバングラディッシュに行って、難民のための『給食センター』を作りました。

ところが、世界中から援助を貰いすぎたために、上は大臣から、下は給仕に至るまで、貰い得の乞食根性になってしまって評判が悪くなり、援助が止められてしまいました。

その結果どうなったかと言いますと、給食センターが出来た村の子供達は、ドラム缶の粉ミルクが来なくなったので、飢えて死んで行ったのであります。

これに反して、辺鄙な村であったために『給食センター』が出来なかったところは、もともと自給自足でやっていたので生き延びることが出来たのであります。なまじっか給食センターが出来たばかりに飢え死にした結果になったのであります。

私達は、皆、自分の人生は自分で責任がもてるように、神様から秘められた可能性即ち、Talentを与えられているのであります。**タレント**Talentの本来の意味は**天分**であります。それを開発するのは、先ず、それぞれが自分の人生は自分で責任を持てるように、そのような心を育てなければなりません。即ち、**『自立心の育成』**であります。これが社会奉仕、更に世界社会奉仕の基本なのであります。

6．『個人奉仕と団体奉仕』その５

前回は、第１回ロータリー世界理解賞を受けられた岩村昇先生の話を紹介しましたが、「自立心の育成」について、もう一つ先生の話を紹介しておきます。

カンボジア難民キャンプの後をどうするか、という国連の会議があったときに、カンボジアの母親が言いました。

『確かに、緊急の時には世界中からの援助物資が有り難かったのです。給食センターに空きっ腹で行けば、当てがい扶持がもらえましたし、裸で震えている身体で行けば、日本から来た古着をお仕着せしていただきました。

しかし、緊急時が去った今になっては、それだけでは駄目だということが判りました。何故かと言うと、家の娘は、もう７歳にもなったのに台所の手伝いが全然出来ません。

カンボジアの村が平和であった時には、娘は、５歳、６歳、７歳と、母親の台所姿を後ろから見て、７歳にもなれば台所の手伝いが出来るのが普通でした。

しかし、今、平和になったカンボジアの村へ帰って、台所を作り、村を起こそうという時になって、母親から娘に伝えなければならない生活の知恵の鎖が断ち切れてしまっています。

今から必要なのは、自分の人生を自分で作っていく自立の方法です』と。

要するに、困っている人達を救済する社会奉仕について重要なことは、ただ単に物や金を恵む奉仕は奉仕性が弱いのでありまして、物や金を恵むという段階で止まっていては駄目であり、それと同時に自立の道を教えなければならないのであります。

結論としては、『恵む奉仕』『与える奉仕』は、ロータリーとしては避けて通れないものでありますが、それを実践するについては、単に金を出すだけにとどまらず、相手の身になって、相手から謙虚にニーズを学ぶ気持がなければなりません。そして、相手に自立心を育てることが肝要なのであります。

したがって、例えば、身体障害者に対する奉仕についても、弱いものを締め出さずに労り合うことは、私達が社会の一員として為すべき当然の義務であり、責任であります。

したがって、ハンディキャップをもった身障者に対するボランティアー活動が特別な行為として存在し続ける限りは、身障者もやはり人間の中で特別な存在であり続けることになるのであります。共に生きる人間として、支え合って生きていくための援助の手段や方法を、相手の身になって提供していくことがロータリアンに課せられた使命であると思うのであります。その心が育たない限り、如何に制度や施設が整備され、発展しても、福祉社会は到来しないのであります。

7．『個人奉仕と団体奉仕』その6

前回に引き続いて、岩村昇先生の話をもう一つ紹介しておきます。

それは、ネパールの草の根の人達自身のボランティアー活動によって、自分達を貧困から解放し、飢えから解放するという自立のボランティアー活動がネパールの村で起こったという話であります。それは、桜井さんという日本人女性の栄養士がボランティアーとして播いた種が芽生えた物語であります。即ち、

ネパールでは、折角、ＢＣＧを打っても、体内に、免疫を作る材料になる蛋白質が足りないために免疫が出来ず、結核に侵されて命を落としてしまいます。

しかも、ヒンドゥ教徒は牛肉が宗教上のタブーであり、回教徒は豚肉がタブーであります。そこで、岩村昇先生は、ネパールで誰でも食べられる大豆の蛋白質を何とか採り入れたいと桜井さんに頼みました。

ところが、ネパールのように９ヶ月も雨が降らない乾燥地帯では、味噌も醤油も作れません。そこで、桜井さんは色々苦心の結果、キナ粉の活用を思いつきました。

ネパールでは、昔から、トウモロコシを火で焙り、石臼で挽くトウモロコシコガシという食習慣があり、これとよく似た大豆蛋白のキナ粉は、抵抗なくネパールの人達に受け入れられたのであります。

桜井さんは、女性として、女性の悩みがよく判ります。栄養失調の赤ちゃんを連れたお母さん達と一緒に、掘っ立て小屋に栄養教室を作りました。いつの間にかこの草葺小屋が**リハビリテイション・センター** Rehabilitation center という英語で有名になりました。

鉄筋のビルディングでなく、草の根のお母さん達の台所と全く同じ草葺小屋であったことが普及した第一の原因でありました。何故なら、センターで習ったことが、自分の家の台所でも出来るからであります。センターで身につけたことは、生活の現場で明日からでも直ちに実践出来なければ何にもならないのであります。

桜井さんが、ソッと手を貸したことによって、草の根のお母さん達は、自分で作ったトウモロコシコガシ、小麦コガシ、大豆コガシ（キナ粉）の三種混合栄養食で子供達を栄養失調から守ったのであります。

そして、そのお母さん達の中からボランティアーが生まれました。ボランティアーがボランティアーを生んだのであります。ロータリーの奉仕は、この最初の知恵を出すことであります。そして、先ず、自らボランティアーとなることであります。身体が動かなければ知恵を出すべきであります。これがロータリーの個人奉仕であります。

8.『団体奉仕と政治問題』その1

団体奉仕は、標準クラブ定款第12条によって、政治性の強い事柄については実践することが出来ないことになっています。

これに対して、個人奉仕は、政治行為が自由であります。ロータリアンが個人奉仕で運営している施設に政党から寄付金を貰うことは一向に差し支えないのであります。

ところが、団体奉仕は、政治的な色彩の強いテーマを実践することは出来ません。

では、**団体奉仕と政治性の問題をどのように考えればよいのか**、と言いますと、団体奉仕の中で、政治性の含まれないものは存在しない、と理解すればよいのであります。

例えば、ロータリークラブが老人ホームに寄付します。政治性がないように見えます。しかし、共産党の立場からすると、これら福祉のニーズは全て国家財源によって賄われるべきものであります。日本国は、私有財産の絶対性を前提に組み立てられた社会でありますから、その社会的弱者の救済は、富める人の慈悲心で救済することになりますが、共産主義社会になれば、慈悲心など不要であります。これらのことは全て国家財源で決着がつくのであります。したがって、共産党を支持してほしい。老人ホームに寄付金を持っていくことは止めてくれ、ということになれば、これは政治問題であります。

そこで、団体的な社会奉仕は、悉く政治性を帯びるということになると、ロータリーの団体奉仕は、政治性を帯びるが故に、企画、立案、実施出来ないことになります。

ロータリーは、この問題に苦しんで、1915年頃までには、これについての原理を立てているのであります。即ち、問題の中に含まれる政治性には、全て濃淡があります。

そこで、ロータリーは、政治性が一定程度以下に弱いものを、ロータリーの立場から政治性がないと認定するのであります。これは、一刀両断の理論であって、ロータリーが一方的に認定するのであります。即ち、政治性が一定程度以下に希薄なものは、ロータリーの立場から政治性がないと考えるのであります。

したがって、共産主義者から政治性があると言われても、奉仕の実践をするロータリーの立場からすると、理想社会のことを論じても仕方がないのであって、現に社会があり、その中で私達は、弱者救済の問題例えば老人問題を抱えているのでありますから、ロータリーは、運動の主体として、主体的な判断に基づいて、この程度の問題は政治性がないと認定するのであります。したがって、何らロータリーの政治からの中立性を犯すものではない、と考えればよいのであります。

すると、ロータリアンは、大悟徹底して、一定の分野においては、団体的な社会奉仕を自信をもって企画、立案、実施することが出来るわけであります。

9.『団体奉仕と政治問題』その2

前回は、団体奉仕における**政治性の濃淡**に就いて申し述べました。そこで、従来、ロータリーが、団体奉仕の分野で、政治性が希薄なるが故に政治性がないと認定してきた分野は一体何か、と言いますと、Guy Gundakerの【ロータリー通解】には、その適用例が明快に示されています。即ち、環境衛生問題、老人対策問題、青少年育成問題、交通安全問題等は**政治性が希薄**であるとされているのであります。

ただ、これらの中でも、政治性の問題は**流動的**でありまして、時には政治性が高まるものもありますから、政治性のチェックについては、特に注意しなければなりません。

例えば、**公害問題**であります。

Guy Gundakerの本には、公害対策問題は、政治性がないと記されています。確かに、20世紀初頭の社会では殆ど政治性がなかったと言えます。公害問題が政治性を持つようになったそもそもの発端は、**レイチェル・カースン**の物語でありました。

レイチェル・カースンは、マサチューセッツ州の魚類野生生物局に勤務していた女性生物学者で、生涯を独身で過ごした人でありましたが、彼女は猫をこよなく愛していました。彼女がタイプライターを打っている傍らには、いつも猫がいました。彼女は、そのような生活を無上の喜びとして優れた作品を沢山発表して行ったのであります。

その中に『**沈黙の春**』"Silent spring"という作品がありましたが、この作品が、現在の公害問題の出発点となったのであります。

実は、この作品を書いた動機が、彼女がこよなく愛した猫でありました。或る時、彼女は、世の中の猫達が変な死に方をしたり、狂ったようにおかしくなって死んでいくのに気がつきました。何故だろうと彼女がその原因を調べたところ、それは、**農薬による土壌の汚染**が原因であることが判りました。彼女は、この状態を放置すると愛する猫の命だけの問題ではなく人間の命の問題にもなり、ひいてはこの世に生きとし生けるもの全ての命の問題にもなるのだと思って、『**沈黙の春**』"Silent spring"という本を書いて世の中に警告を発したのであります。

農薬によって土壌が汚染されれば、猫のみならず鳥も人間も死に絶えて、春になっても鳥も囀らない沈黙の死の世界になってしまう、というのであります。

勿論、このような本が出版されれば、農薬を作っている会社は困りますから、彼女に対して色々な迫害を加えました。しかし、彼女は、それに屈せず、農薬使用の禁止、公害の予防を提唱し続けた結果、やがて、それが市民運動となり、現在の諸々の公害対策にまで発展したのであります。正に政治性の問題は流動的なのであります。

10.『団体奉仕と政治問題』その3

今、地球の環境保全の問題は、京都議定書に象徴されるように公害の分野に止まらず、色々な分野にわたり、グローバルに論議されています。技術革新の現代においては、科学万能の考え方が効率のみを重んじるあまり、自然の摂理に反して地球環境を破壊しています。私達人間は、自然に対し、常に謙虚でなければならないと思うのであります。

そして、その反省と共に、レイチェル・カースンのように、個人の力がやがて全体を動かすこともまた忘れてはならないと思うのであります。

今日の社会では、公害対策問題は極めて政治性が強いので、屡々、住民の政治課題となります。したがって、ロータリーがこの種類の問題と取り組む場合に、団体的な社会奉仕の実践が行える範囲というものは、極めて難しい課題を含んでいるのであります。

では、具体的にはどのような形で実践出来るのか、と言いますと、先ず第一に、職業奉仕の分野であります。社会奉仕では実践出来ません。それぞれのロータリアンが、自分の企業、自分の同業者に問いかけて、同業組合を動かすのであります。そして、自分の企業管理の過程を通じて、出来るだけ公害源をなくすように努力するのであります。

ロータリーは、科学を裁き、文明を裁くことは出来ませんから、今までの過去のところは一切問いません。過去の科学や文明に支えられて、現在の社会が発展して来ているのでありますから、今になって、お前の会社は公害で地域社会を汚染している、と責められる筋合いのことではないのであります。ロータリーは、科学を裁くことは出来ないのであります。一定の科学の上に乗っかって、現在の社会が営まれているという事実を承認しなければならないのであります。

ただ、私達は、現在及び未来に生きているが故に、その結果論から判断して、ロータリーは、一定の足りないところを是正していくという機能を果たすわけであります。

公害企業と関係のないロータリアンが、【ロータリーの友】あたりで、『ロータリアンが公害を出すとは何事であるか』とか『過去に亘って贖罪せよ』などと言ってはならないのであります。兎にも角にも公害源は出てしまっているのであり、今まではそこまで関心が届かなかったのでありますから、そこを問うてはならないのであります。

ただ、公害が発生した以上は、出来るだけ早い機会に同業者に呼びかけて、自分の企業も公害をなくすように努力する、これが職業奉仕の実践なのであります。

第2に、何はともあれ公害源から被害者が出てしまった時は、速やかに被害者の救済を事後的に行うべきであります。以上の二つ以外は、奉仕の実践プログラムを組むことは絶対に出来ないのであります。以上で『政治問題』は終わっておきます。

11.『国際奉仕』その１

20世紀初頭のロータリアンは、ロータリーの奉仕について、原理的に二つの世界に分けて考えていました。これを**奉仕の２分類法**と言います。即ち、

一つは、クラブ例会で奉仕の心を作る世界であり、他の一つは、例会以外のところで行動を起こす世界、即ち、実践を行うべき世界であります。

したがって、この時点では、今日で言うところの社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕などという区別は無く、全ての奉仕の実践を一括して単に**奉仕、即ち**、Community serviceと称していたのであります。

実は、奉仕の実践を社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、そしてクラブ奉仕と四つに割る所謂**奉仕の４分類法**が出来上がったのは、1927年のことでありました。

ところが、あらゆる原則には**例外**がありまして、**国際奉仕**だけは、奉仕の２分類法のただ一つの**例外**として、第１次世界大戦後の1919年に国際大会の決議をもってその概念が確立されたのであります。これは、当時の２分類法の世界で、一つのハプニングとして生まれ出た概念でありました。

そこで、先ず、**国際奉仕論の論点は一体何か**、について論点を整理しておきます。

１．第１の論点は、世界中には、**国家**と呼ばれる最高、絶対且つ無責任の団体が乱立し、 利害の対立するときは、力の行使をもってこれを解決しようとます。これが戦争であります。このような国家間の利害の対立の中で、**個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践類型を国際奉仕**というのであります。

２．第２に、国家間の利害の対立を越えて、戦争では決着のつかない新しい問題即ち、**南北問題**が出て来ました。ロータリーは、この問題に対するロータリアンの個人の善意の働きかけの分野を1962年、**世界社会奉仕**WCSと呼んだのであります。

３．第３に、ロータリーは、国際奉仕のニーズを解決する**方便**の問題として、**ロータリー財団**という制度を作り上げました。これは、ロータリーの原理としては問題のあるところでありますが、しかし、今日、ロータリー財団は、立派な仕事をしているので、 私達の腹構えを作るためにも理解を深めなければならない分野であります。

４．最後に第４の論点として、クラブが**事業計画**として企画立案実施する国際奉仕及び世界社会奉仕のプログラムとロータリーの本願である**個人奉仕**の問題があります。

最後の４．は実践総論のテーマでありますから、国際奉仕論プロパーの問題としては議論しないことに致します。以上が**国際奉仕論**の論点であります。

12.『国際奉仕』その２

前回は、国際奉仕の話をするについて、先ず、その三つの論点を指摘しておきました。さて、ロータリーの生まれる前、1648年にウエストファリヤ条約をもって近代国家が成立しました。そして、ロータリーは、1907年、世のため人のための奉仕活動を始めましたが、その時既に、近代国家は、成立していて戦争を始めていたのであります。世界史的な視野で見れば、その後も現在に至るまで、戦争は絶えることがありません。

ところで、**世界大戦**は、国家と国家の戦争であり、一方、**ロータリー**は、個人と個人の善意を結ぶ運動であります。しかし、個人は、皆**国籍**を持っています。したがって、徴兵制度によって戦争に行かなければなりません。

そこで、ロータリアンは、戦争に行って、他の国のロータリアンを殺すことをもって正義の実現と考えられるか、という問題があります。個人の善意を提唱する問題と国家間の利害の対立する問題とが交錯した時、国益の異なる二つの国に所属する**ロータリアンの友情**というものは、非常に**複雑な多層的な判断**を強いられることになります。

第２次世界大戦の始まる前に、日本のロータリアンがポール・ハリスに『アメリカが日本に対して冷たいので何とかして欲しい』と**直訴**に及んだところ、ポール・ハリスが渋い顔をして、『ロータリーというものは、国と国との諍いには干渉しないのが建前だからね』と言って口がへの字に曲がったと言われています。

そこで、『ポール・ハリスは日本のロータリアンに対して冷たい』という報告が入っているのであります。

しかし、この問題は、このように理解してはならないのでありまして、国家と国家との利害関係の対立の問題と、個人と個人の善意を広めて行こうというロータリー運動の本願の立場とは、その国益が対立するときには多層的な複雑な問題を起こさざるを得ないということを心得ておかなければならないのであります。

これは、かなり難しい問題でありますが、アメリカ政府と日本国政府との間に起こってくる紛争にロータリークラブ群が巻き込まれるようなことがあっても、本来、個人の善意を中心に物事を考えて行くべきロータリー運動としては、政府間の問題については、ポール・ハリスが解決出来る筋合いのことではないのであります。

したがって、ポール・ハリスが冷たい、などということは、筋違いのことでありまして、日本の戦前のロータリアンの場合にあっても、国際奉仕についての理解が足りないばかりにそのような印象論となって出たのではないかと思うのであります。

13.『国際奉仕』その３

戦争が勃発した場合には、**ロータリークラブはどのように対処すべきか**？賛成すればよいのか、反対すればよいのか？と言うと、それは、個別具体的には、**無関係**でなければなりません。何故なら、**標準クラブ定款第12条の「政治禁」の原則**によって、クラブは**一切の公共問題から中立**でなければならないからであります。

では、**一人々々のロータリアンはどのように対処すればよいのか**？

ロータリアンは、政治的なイデオロギーから自由でありますから、戦争に賛成のロータリアンがあってもよいし、反対のロータリアンがあってもよい。条件付き賛成や条件付き反対があってもよいのであります。このように、色々な立場をとることは、それぞれのロータリアンの**思想・良心の自由**に属することでありまして、ロータリークラブは、これに対して何も関係がないと考えればよいのであります。

そこで、兎に角、戦争が起こってしまった場合に、『私は戦争に賛成だから、敵のロータリアンも殺すよ。奉仕はしないよ。』というのではいけないので、**戦争の勃発**そのものには、ロータリークラブは元来何の関係もありませんが、戦争という**異常状態**を奉仕の実践の場として考えなければならない、という考え方が出てくるわけであります。

ロータリアンは、**クラブ例会**を出た瞬間から、ありとあらゆる社会状況を奉仕の実践の場として捉えなければならないのでありますが、その**社会状況**には、**正常**な場合もあれば、**異常**な場合もあります。したがって、戦争という**異常事態**が起こった場合には、それを奉仕の実践の場と捉えなければならないのであります。

この様な考え方が、ごく自然に国際奉仕の実践に入っていくことの出来た大きな原因であったと理解出来るのであります。

ロータリーは、**戦争の勃発**については直接の責任はありません。しかし、戦争状態が起こった以上は、それを奉仕の実践の場と考えよう、ということなのであります。

ところで、**第１次世界大戦当時、アメリカの初期ロータリークラブ群は、どのような実践・行動をしたのでしょうか**？

ロータリー運動は、戦争という**社会の異常状態**の中で、**個人の善意**の支配する分野を確立しようとするものとして、非常に熱の入った運動をしたのであります。

1．**出征軍人の慰問、激励（弱者救済の思想）**
2．**人種差別の排除（倫理運動の思想）**端的に言うと**反村八分運動**をしたのであります。
3．**傷病兵の慰問、激励（弱者救済の思想）**

以上が、第１次大戦当時のアメリカのクラブ群の実践活動でありました。

14.『国際奉仕』その4

前回に述べた第1次大戦時のアメリカのロータリークラブ群の実践活動の中で特筆すべきは、**人種差別の排除**即ち、端的に言うと**反村八分運動（倫理運動）**であります。

アメリカは人種の坩堝でありますから、アメリカがドイツに宣戦を布告すると、ドイツ系アメリカ人が大変不利益な取扱を受けたのでありますが、ロータリアンは、自分の動ける範囲で動いたのであります。即ち、**反村八分運動**をしたのであります。

しかし、話は変わりますが、**第2次世界大戦の時**は、アメリカのロータリアンの力が弱っていたために、日系アメリカ人に対する迫害がひどかったのであります。したがって、日系アメリカ人はアメリカに対して非常な怨念をもちました。例えば、

或るアメリカの日系一世は、白人を絶対に信用しないのであります。彼は、中々腕のある植木屋でありますが、白人に対する料金と東洋人に対する料金と二つの料金表を持っていて、白人に対する料金はべらぼうに高いのであります。

『それは日本の武士道からしてフェアーでないよ』と言いますと、『何を言っているんだい貴方。第2次世界大戦の時に私が白人から受けたあの苦しみ、あの苦しみに対して、白人は私に償うべきだ。その償い料が私の植木屋の料金表の中に入っているんだ』

と言って、東洋人のために仕事をする場合よりも10倍の値段をチャージして、

『嫌ならいいんですよ。この地域社会の中で、私くらい良い仕事の出来る職人はいないのだから、嫌ならよその人のところに行きなさい』と言うのであります。

彼は、『私は、白人を信じない。人類平等だとか、人を愛するとか、キリスト教精神だとか、色々なことは言う。しかし、白人と有色人種との利害が対立するとき、彼らは、訳もなく白人優位の結論を採る。これは、私の体験に照らして明らかである。したがって、私は、白人に対しては通常の料金では仕事をしない。そして、私には、彼らが私の技術なしには生きていけないだけの良質な技術がある。私が高い料金を取って何処が悪いのだ』と言います。これは、国際理解の難しさを如実に示している物語であります。

ただ、アメリカは、戦後1988年、日系人が第2次世界大戦中に被った不利益に対して国家賠償をしております。この点、アメリカはフェアーであります。即ち、

A．強制収容措置をした日系人に対し、1**人2万ドル**、合計**15億ドル**の補償をする。

B．日系人に対する処遇の歴史をアメリカ国民に教育するための**基金の設定**をする。

C．国として正式の**謝罪**を行う。『歴史は消し去れるものではない。しかし、我々が今為さねばならぬことは、懺悔の念を表明し、アメリカの価値を再確認することである。』として国家賠償をしているのであります。

15.『国際奉仕』その5

国際奉仕という概念は、ロータリーの世界にどのような経緯で生まれてきたのか。

第1次世界大戦当時のロータリアンが国際奉仕の実践活動をしていながら頭の中で整理の出来なかった問題は、奉仕の実践活動とクラブのテリトリーとの関係でありました。

テリトリーというのは、クラブの**活動限界**であって、**団体奉仕**はその中でしか実践出来ません。しかし、ロータリーの奉仕は、**個人奉仕**が本体でありますから、テリトリーに拘束されることはありません。その人の現在地が奉仕の実践の場でありますから、個人奉仕は何処ででも自由闊達に実践出来るのであります。

ところが、当時のロータリアンは、この点の原理的な分析が出来ていませんでしたので、クラブの活動限界をロータリアン個人の活動限界と**混同**していたのであります。

例えば、フランスでの傷病兵の慰問・激励は奉仕の実践になるのでありますが、しかし、これをアメリカのロータリアンが行おうということになりますと、それは、自分の国から遙かに遠い外国で効果が上がる奉仕の実践活動にならざるを得ませんので、この種類の奉仕の実践活動をロータリーの奉仕と見てよいのか、という疑問が起こりました。

元来、ロータリーの奉仕というのは、ごく常識的に考えれば、自分達が住んでいる**地域社会**の中における奉仕でありますから、これが外国で起こるということになると、果たしてこれがロータリーの奉仕の**適正な実践になり得るのだろうか**、という疑問が当時のロータリアンの頭の中にあったのであります。

そこで、1919年、世界大戦直後の**ソルトレイクシティの国際大会**で、この種類の奉仕の実践をロータリーの正当な奉仕として**確認する決議**を取り付けたのであります。これがロータリーにおける国際奉仕という概念が認められた最初の出来事でありました。

では、**1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議の特徴は何か**と言いますと、国際奉仕というのは、ロータリーが個人の善意をもって戦争という異常状態を少しずつ消していくものである、というのが1919年の国際大会の決議であります。

したがって、この決議は、戦争が起こると国際奉仕の実践の機会が与えられる。これをロータリーの正当な奉仕類型として認めようという考え方であります。

そこで、戦争が起こらないと国際奉仕の実践は出来ないのか、という原理的反省が出てきます。戦争が起こって国際奉仕の実践があるという原因結果論の考え方ではなくて、**個人の善意の支配する分野**を少しずつ広げていくというロータリー運動の立場からすると、戦争の有無は、付随的な事柄ではないのか、**国際奉仕の本質そのものは一体何か**、ということを分析しておかなければなりません。

16.『国際奉仕』その6

国際社会も含めて**社会の異常状態**には、貧困、災害、戦争等様々なものがあります。その異常状態を**個人の善意**をもって少しずつ消していく作業をロータリーの奉仕の実践というのであります。そうだとすれば、戦争の有る無しに関わりなく国際奉仕の実践は有り得るのではないか？また、災害や貧困の問題についても国際奉仕の実践はあり得るのではないか？**国際奉仕の本質は一体何か**、を把握しなければなりません。

そこで、ロータリーは、**沈思黙考**します。国を越えた良質な人達の関係、まずはロータリアン相互の関係、次にロータリアン以外の人達との関係で善意と善意とを繋いで行くというロータリー運動の中で、**ロータリー**は、国籍、文化伝統そして人間の皮膚の色が異なっても、その皮膚の内側に流れている血は共通に赤いということを認識すれば、国際的な善意を広げていく過程において戦争を予防出来ると考えたのであります。

しかし、果たしてそうなるのでありましょうか？これについては、**ロータリーの国家観**がその前提問題にあるのであります。

では、**ロータリーの国家観とは、一体どのようなものか。**

ロータリーの根本原理は、個人と個人が心を通わせること（**親睦**）であります。この個人と個人の心の連結概念をロータリーは**善意**というのであります。この**善意**（**親睦**）の功徳をロータリーは家庭、地域社会、職業社会そして国際社会へと広げていきます。

そして、国際社会では、先ず一人一人のロータリアンが善意を自覚し、善意によって外国の人達に働きかけます。このようにして、国際社会の人間が全て善意によって結びつけられたならば戦争は起こらない、とロータリーは考えたのであります。これは、**国家というものを人民・国民の集合（総体）**とみる限り正しいのであります。

しかし、国家とは、**人民が集まった集合体（総体）**だけではありません。人民が集まっただけでは、それは**烏合の衆**にすぎません。これを国家という統一体にするためには**主権とか統治権というプラスアルファー**がなければなりません。

では、**このプラスアルファーは一体何処にあるのか？** ロータリーは『**プラスアルファーは、国民一人一人の心の中に宿る**』『**国家とは、所詮、国民のことである**』という立場をとるのであります。したがって、一人一人の国民が、自分の理性の命ずるところに従って自分の**徳性を磨く**と、その**徳性の総和**は、必ず国の政治に反映し、**国家の徳性**が上がってくる。**国家の徳性**が上がってくると、国と国との戦争を予防出来るではないか、とロータリーは考えるのであります。これがロータリーの国家観であり、『**ロータリーは、一人一人のロータリアンの心の中に宿る**』と考えるのであります。

17.『国際奉仕』その7

前々回に申し述べましたように、1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議は、戦争が起こると国際奉仕の実践の機会が与えられるから、これをロータリーの正統な奉仕類型として認めようという考え方でありました。そうすると、戦争が起こらないと国際奉仕の実践は出来ないのか、という原理的反省が出てきました。

そこで、ロータリーは**沈思黙考**した結果、ロータリー運動というものは、戦争の有無に関わらず、地球上の全ての人達を個人の善意をもって繋いでいくところにロータリー運動の本願がある、という認識が出来上がったのであります。

そこで、ロータリーは、1921年、個人の善意の世界に立って、地球上の全ての人達を善意で繋いでいく運動としてロータリー運動を捉えようと考えました。

戦争の有無に関わらず、一人一人のロータリアンが人と人とを善意で結ぶという考え方で、国際社会の全ての人達とお付き合いをしたときに、ロータリー運動にもし力があれば、国際的な理解と親善と平和を保障することが出来る、と考えたのであります。

この考え方からすると、**1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議**は、誠に現象的で本質を見ない考え方であり、次元が低いと言わざるを得ないのであります。

戦争に関係なく、ロータリアン一人一人の心を良質化していくという作業が国際的に進められた場合には、戦争の防止と世界人類の恒久的平和という大願目が達成されるだろうという自覚が生まれて、1921年、**スコットランドのエディンバラの国際大会の決議**によって、このことが正式な文章になるに至ったのであります。そして、その文章は、そのままの形で、**ロータリーの綱領の第4**に記されているのであります。即ち、

『奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職種に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること』。目下これに代わる文章はないのであります。

実は、このエディンバラの国際大会は、初期のロータリーが、**原理的に絶頂期**を迎えるようになった時に開催されたものであります。そして、この国際大会において、国際奉仕についての原理に則った定義が始めて与えられたということは、大変意義深いものがあるのであります。

この国際奉仕の決議は、まさに**初期ロータリーの原理の集大成のハイライトの一つ**として宣言せられるに至ったのでありまして、これが、**今日の国際奉仕の意味する全てのもの**であることを理解しなければならないのであります。これは**永遠不変の原理の宣言**でありまして、どんなに時代が変わろうとも、国際**奉仕の実践としては、個人の善意と善意を結ぶこと以外のものはないと言わなければならない**のであります。

18.『会員増強について』その１

先日のクラブフォーラムにおいて、会員増強の意見として、どのような人を当クラブに入会させるかについての情報は、入会後間もない新入会員の方が情報を熟知しているので、この人達に推薦させた方が会員増強の効果が上がるのではないか、との発言がありました。しかし、これは、ロータリーの伝統的な考え方としては、絶対に採ることの出来ない考え方であります。何故かと言いますと、例えば、伝統に輝く或るクラブでは、入会後10年未満の会員には、新会員を推薦することを認めないのであります。それは入会後日も浅い会員は、未だロータリーをよく理解していないので、このような会員に新会員を推薦させるとロータリーの解っていない会員が入会するからであります。

昔のロータリークラブが如何に会員増強に慎重であったかという例を挙げておきます。昔、私の友人が戦前に創立された伝統のあるクラブに入会することになり、推薦者から入会前のロータリー教育を受けることになりました。

推薦者が朝９時に私の会社に来なさいというので、彼が朝９時に推薦者の会社へ行ったところ、推薦者は、ロータリーの歴史、思想、原理そして実践などについて夕方４時まで延々と説き聞かせたそうであります。彼は、閉口してしまいましたが、そのまま黙って帰るのも悪いと思い、一つ質問をしました。すると、推薦者は、「貴方は未だ何も解っていない。もう一度明朝９時に来なさい」ということになって、また翌日、朝９時から午後４時まで講義を聴かされてやっと入会することが出来たと言っておりました。

会員一人を入会させるために何故ここまで厳しくするのか。

それは、例え１人でもロータリーに適しない人が入会すると、何億円にも代え難いほど大切な「**クラブの親睦**」が壊されてしまうからであります。「**自分達のクラブは自分達で作り上げていく**」これを**クラブ自治権**と言いますが、まさに**クラブ自治権を確立する**ために、会員選考を厳しくするのであります。

会員を入会前に**徹底的に教育**して、この人ならば自分達の仲間にしても、他の会員に迷惑をかけないだろうということを確信してから入会させるのであります。このように考えますと、新会員を推薦する会員の責任は重大であります。もし、誤ってロータリーに適しない人が入会してしまうと、推薦者は誰だ、ということになって責任を追及されることになるのであります。

このように会員の選考を厳格にすることによって、**良質なロータリアン**ばかりが集まることになり、ロータリーの**本当の親睦**、いわゆる「**精神的親睦**」が出来上がるのであり、**クラブ自治権**が確立されるのであります。

昨今これほど厳しく会員を選考するクラブは見あたらなくなりました。むしろ、ガバナーの会員増強の声に押されて、誰彼かまわず、お願い申して入会させてしまおうという風潮があります。このように**会員の質**を無視すると、クラブの**親睦の質**が落ち、奉仕の実効性が弱くなって**ロータリーが衰退**するのであります。

19.『会員増強について』その２

会員増強について、会員の質を重視すべきか、量の増大を重視すべきかの議論は、誠に古くて新しい問題であります。結論として言えば、私は、質を重視すべきであると考えています。何故ならば、会員の質を無視すると、ロータリーは崩壊すると考えるからであります。

昔、神戸クラブの直木太一郎パストガバナーが『**今しばし拡大をやめて、今居るロータリアンの原石を磨く時ではないか**』と警告されたこの言葉は今でも金言であります。

戦前に創立された或るクラブでは、ロータリアンの質を高めるために、新しい会員を入会させるに際し、クラブ理事会その他の会員選考手続のあとで、会長・幹事及びロータリー情報委員長が新会員候補者夫妻と食事を共にする機会を設けています。これは、新会員をクラブに迎え入れるに際して、新会員が自分達のクラブの仲間として相応しい人かどうかを審査する意味を持っています。一人でも自分達の仲間として相応しくない人、ロータリアンとして相応しくない人が入会すると、何億円出しても購い得ないほど大切な**クラブの親睦**が壊れてしまうからであります。即ち、自分達のクラブは自分達で守る、というクラブ自治権を確立するために会員の選考を厳格にしているのであります。

したがって、**会員の増強**は、絶対に安易にするべきものではないのであります。

この意味において、クラブというものは本来**閉鎖的なもの**であります。そして、ロータリーは、**一業一会員制の原則**によって異質なものを排除し、**良質な人達**だけが集まることによって**良質な親睦**を醸成し、その親睦のエネルギーによって**良質な奉仕**を実践しようとするものなのであります。

このように、クラブというものは、本来、会員だけの親睦の場であります。会員の奥様と雖もみだりに入れるべきではありません。但し、メイクアップのビジターだけは、必ず受け入れなければなりません。これが**ロータリークラブの基本原理**であります。

古きよき時代のロータリークラブでは、会員の質を高めるために色々と工夫をしています。例えば、或るクラブでは、例会場正面にグリーンのテーブルクロスのかかっているテーブルが二つあります。そのテーブルには、入会後６ヶ月未満の新会員が座ることになっているのであります。そして、パストガバナー、元会長、情報委員長等ロータリー経験の深い人達が一緒に座って、毎週口コミでロータリアン教育をしていくのであります。これも、クラブ自治権のもとに、自分達の仲間の質を高めるためにロータリアン教育に力をいれているのであります。このようにしてクラブ自治権を確立することが第一義であり、**会員の増強**には、あくまでも慎重でなければならないのであります。

20.『クラブ財政と会員増強は無関係』

先日のクラブフォーラムでクラブ会費の問題が取り上げられましたが、その論点の一つは、クラブ経費が不足する、即ち、クラブの財政が赤字になるので会員を増強しようという点でありました。

しかし、クラブ経費の不足、即ち、クラブの財政が赤字になる場合、それを補うにはクラブの会費を増額する以外に方法はないのでありまして、クラブの経費不足とクラブの会員増強とは何らの関係もないのであります。したがって、クラブ経費の不足を補うために会員を増やすという論理は、全く筋が通らないと思うのであります。

元来、**ロータリークラブの会費**というものは、クラブの1年間の必要経費を会員数の頭数で割って、各会員が均分平等に負担するというものでありまして、クラブ会長だからといって会費が高いわけではなく、新入会員の会費が安いのでもありません。会費は、全ての会員が同じ金額を均分平等に負担するのであります。

このようにクラブの財産権を皆で共有しているが故に、発言権も平等となるのであります。したがって、30年在籍のパストガバナーも、昨日入会したばかりの新入会員もロータリーの世界では平等対等なのであります。

ただ一点注意すべきは、平等対等の世界にあっても「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるように年長者に対する礼を失してはなりません。

このように、均分平等な**クラブの会費**によって、クラブの財政が成り立っているのでありますから、もし、クラブの会費収入だけでは、1年間の必要経費が不足するというのであれば、会費を値上げする以外に方法はないのであります。

ロータリークラブは、営利団体ではありませんから、会費収入以外に利益を計上することは出来ないのであります。即ち、会費収入と必要経費の支出とが収支相償うのが原則でありますから、必要経費は、その会計年度1年間で使い切るのが原則であります。

必要経費を会員数の頭数で割ったものが会費でありますから、仮に会員増強によって頭数が増えたとしても、その会員分の必要経費が増えるだけであって、会員が増えたことによってクラブの財政が豊かになる筋合いのものではありません。したがって、クラブの財政が赤字になるのであれば会費を値上げする以外に方法はないのでありまして、クラブ財政の赤字と会員増強とは何の関係もないことなのであります。

会員増強の課題は、あくまでも良質な会員を選考することであり、会員の数だけを増やすことではありません。みだりに会員を増やすと、良質でない会員が入会する可能性があり、ロータリーが衰退することになるのであります。

21.『例会出席の意味』

スイスの片田舎で、お婆さんが笊の中に羊の毛を入れて、それを綺麗な小川の流れに浸して洗っていました。そこへ牧師さんが通りかかりました。

『お婆さん。貴女は、毎週日曜日に教会に来て私の説教を聞いているから、さぞかし、よい話を沢山覚えただろうね。』と聞きました。

『ところが牧師さん。幾らよい話を聞いても、すぐ忘れてしまいますから、何も覚えていませんよ。でも、私は、それでよいと思いますよ。牧師さん。この笊の中を見てください。笊の中には、ドンドン水が入って来ますが、すぐ笊の外へ流れ去ります。しかし、そのために笊の中の羊の毛は、こんなに綺麗になっているではありませんか。私も牧師さんの話を聞いては忘れ、聞いては忘れてしまいますが、それで私の心も少しは綺麗になっていると思いますよ。』(斉木亀次郎氏 1967.10.29.RI.368地区協議会講演)

この話は、一体何を意味するのかと言いますと、聞いては忘れ、聞いては忘れながら、水で洗われる笊の中の羊の毛のように、自分自身が磨かれていく、心が磨かれていくことを意味しているのであります。

したがって、私達は、忘れることを怖れてはなりません。出来るだけ沢山の人の話を聞き、沢山の本を読み、そして、聞いては忘れ、読んでは忘れてしまうものでありますが、しかし、何回も何回も、聞き忘れ、読み忘れながら、次第に自分自身が磨かれて、次第に**ロータリーが身に付いていく、奉仕の心が身に付いていく**のであります。

これが「**知恵**」というものであります。単なる「**知識**」ではないのであります。

したがって、ロータリーは、毎週**例会**に出席せよというのであります。ロータリーが**寄付団体**であれば、毎週例会に出る必要はありません。例会は月に1回でもよい。2ヶ月に1回でもよい。極端なことを言えば、例会に出席しなくても寄付さえしておればよいのでありますが、ロータリーは寄付団体ではありません。**倫理団体**であります。

したがって、**クリスチャンが毎週日曜日に教会に行って、神に祈り、心を洗うのと同じように、ロータリアンも必ず毎週一回の例会に出席して、お互いに心を磨き合うのであります。これがロータリーの基本原理であります。**

それは何故かと言いますと、ロータリー運動が倫理運動だからであります。世のため人のために倫理を提唱していくためには、**先ず、ロータリアン自身の心を磨かなければ、ロータリアン自身の倫理を高めなければ、世の中に倫理を提唱することはできません。**

したがって、ロータリーは、**毎週例会に出席せよ**というのであります。ロータリアンは、毎週の例会でお互いに心を磨き合い、お互いを高め合うのであります。

22.『ロータリアンとは』

昔、西宮クラブに入会して僅か6年目にして当地区のガバナーになられた今田恵パストガバナーは、ロータリアンとは、**第1に、正業をもった職業人**であること。**第2に、成人の男子**であること。そして今ひとつ大切なことは**第3に、ユーモアを語り、ユーモアを解する人**であること。と説いておられます。

ロータリアンの条件としては、なかなか洒落た定義だと思います。この三つの条件のうち、成人の男子であること、という条件は、1986年、女性会員の誕生によってなくなりましたので、現在では、ユーモアを語り、ユーモアを解する人であること、というのがロータリアンとして大切な条件となっています。

元来、ロータリークラブは**社交クラブ**でありますから、先ず、基本的に楽しくなければなりません。したがって、ロータリアンが**ユーモアを解する**ことは、非常に大切なことなのであります。ユーモアのつもりが駄洒落となったり、人の揚げ足をとったりするようでは困るのであります。

ところが、最近のロータリーは、口を開けば、会員増強とか寄付の要請ばかりでユーモラスでなくなって来ました。これではロータリーライフを満喫することは出来ません。

では、ロータリアンとは、本来、どのような人であるべきでしょうか。

1923年の国際ロータリー会長ガイ・ガンディカー Guy Gundaker は、1916年の著書「**ロータリー通解**」において、「**ロータリークラブの会員を真のロータリアンに改善すること**」という1章を設けていますが、その冒頭において『ロータリーは上辺だけの人間を作るものではなく、人間の体質改善を行うものである。**ロータリーの内部で体験を積むにつれて、人はロータリアンになる**』と述べています。ロータリークラブに入会しただけでは、それはロータリークラブの会員ではあっても、未だロータリアンとは言えないというのであります。

これは、とりもなおさず、単なるロータリークラブの会員とロータリアンと呼ぶべき会員とを峻別していることを意味します。厳しい言葉であります。

更に、彼は、『**ロータリアン達は物思う人でなければならない**。ロータリアン達は、深い思索に立って多面的なロータリーを追求し、そして、ロータリアン以外の人達には見えない事柄を見透さなければならない。』とも述べています

昔、『**ロータリアンの中にもっとロータリーを**』というターゲットが掲げられたことがありましたが、私達は、Guy Gundakerの謂う「**真のロータリアン**」になるために、己の足らざるところを謙虚に反省しなければならないと思うのであります。

（ＲＩ第2580地区大会記録より）

ＲＩ会長代理挨拶並びにＲＩ現況報告

2006.2.1
深川　純一

ＲＩ第2680地区の深川でございます。この度、カール・ヴィルヘルム・ステンハマー会長の代理として、歴史と伝統に輝く御当地2580地区の地区大会に参加させて頂くことになりました。

古宮誠一ガバナー初め板橋敏雄元ＲＩ理事ご夫妻、田中作次元ＲＩ理事、そして、地区内外のガバナー、パストガバナー、ガバナーエレクト、ガバナーノミニーその他沢山のロータリアンのご臨席のもとでお話申し上げることは、誠に光栄でありますと共に、身の引き締まる思いでございます。御覧の通りの若輩でございますので、どうかよろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

さて、御当地、東京というところは、ロータリーの歴代指導者を輩出しておられるところであります。先ず第一に、日本ロータリーの創始者米山梅吉先生、日本の第４代ガバナー朝吹常吉パストガバナー、Extention King ロータリー拡大の神様と言われた柏原孫左右衛門パストガバナー、職業奉仕の権化といわれた神守源一郎パストガバナー、その他、東京と聞いただけで、様々な人達を想い起こすことが出来るのでありまして、誠に枚挙にいとまがないほどであります。したがって、私達ロータリアンは、これら歴代の先輩達の知恵に謙虚に学ばなければならないと思うのであります。

実は、今日は、今から約52分間の時間をいただいておりますが、若干時間をオーバーするかも知れませんので、その点、お許しをいただきたいと思います。

さて、ステンハマー会長の代理としての私の重要な任務の一つは、ステンハマー会長のお心を皆様方にお伝えすることであります。

ただ、ステンハマー会長のお心を伝える前に、当地区におけるただ一人のＲＩの役員である古宮ガバナーのお考えも少し申し述べたいと思います。

私は、古宮ガバナーのガバナー月信を第８号まで全て拝見し、熟読玩味致しました。そしてある種の感動を覚えました。

古宮ガバナーは、誠に判りやすい言葉で、諄々と説き来たり、説き去る、その真摯な態度に、私は限りなき共感を覚えたのであります。これも、昨年暮に親しくお目にかかったとき、静かなお話振りと体温を感じさせるような暖かいお人柄のためかとも思うのであります。

就中、今年度のＲＩのテーマであります"Service above self"「超我の奉仕」の解説や職業奉仕についての造詣の深さに心から敬意を表する次第であります。

殊に、職業奉仕については、神守源一郎パストガバナーや佐藤千寿パストガバナーの言葉を引用され、誠に判りやすく解説されているのであります。

実は、一昨日、古宮ガバナーの月信第８号を頂きました。皆さん、このガバナー月信第８号は、是非読んで頂きたいと思います。

古宮ガバナーが、月信の巻頭言で、諄々とロータリーの基本原理を説いておられます。実に、簡潔にして要領を得た論説であります。

そして、その次の第３ページに、当代随一

の論客、佐藤千寿パストガバナーが、今から32年前のご自分のガバナー時代の『ガバナー告示』を引用されて、素晴らしい論説を述べておられますが、それを読んで驚きました。佐藤先生が32年前に警告されたことが、そのまま今の世の中に当てはまるのであります。

佐藤先生のガバナーとしてのターゲットは『生きる喜びを発見しよう』というものでありました。そして、冒頭から次のように述べておられます。即ち、

『顧みて戦後30年。未だ曾ってない永い平和の中に、言論、集会あらゆる意味の自由を謳歌し、想像を絶する経済成長を遂げながら、果たして人は、生きる喜びに朝夕を迎えているでしょうか。

「人生の目的は何か。それは、大臣になることでも、大将になることでもない。 朝、目が覚めた時、あゝ、今日も生きている、……と胸を拡げて、精一杯生きている喜びを噛みしめることの出来る生活、そういう生き方をすることだ」

曾って、少年の日、私はある日、何気なく手にした書物の中で、或る文士の凡そこのような意味の言葉を発見し、はげしい心の昂りを覚えました。

由来、これは、私の人生の指針となったのではありますが、人間にとって仕合わせとは、そういう生き方をすることにほかなりません。

然らば、今日の我々の生活の実態はどうでしょうか。物質的には、我々は幾十倍も豊かになりました。然し、我々は幾十倍も仕合わせになったでしょうか。

否。むしろ、物質の豊かさに反比例して、精神は貧しく、そして、荒廃し、暗い、冷たい虚無の風におののいては、刹那の享楽に一時を逃避しているのではありませんか。』

と呼びかけておられます。

また、佐藤先生は、William C.Carter元ＲＩ会長の言葉を引用されて、

『カーター会長は、「生活の質」という問題をテーマにしましたが、我々の生活の質は、果たしてどうなったでしょうか。

皆さん、この30年に及ぶ永い自由と平和と繁栄の果てに、今、全ての人の胸の中を吹き抜ける、空しい、不気味な、冷たい風……これは一体どうしたことなのか。』

とも呼びかけておられます。

これが実は、今から32年前の論説であります。これは、今の世の中にそのまま当てはまります。私は、この卓見に驚愕の念を禁じ得ませんでした。

さて、話を戻します。

古宮ガバナーは、この地区大会を「**簡素にして充実した大会**」にしたいと言っておられます。誠にもっともなことでありまして、これは、古宮ガバナーの謙虚にして暖かいお人柄の現れであります。

ところで、最近の地区大会はどうでしょうか。徒らに金を遣い、徒らに派手になっている地区大会もなきにしもあらずであります。今回の地区大会は、必ずや、「**簡素にして充実した地区大会**」として有終の美を飾られることを祈っております。

さて、ステンハマー会長の横顔だとか会長の今年度の方針等は、既に、ロータリーの友７月号に於いて詳細に紹介されていますので割愛致しまして、ここでは、会長が触れておられないことで、しかも、会長が重要視されていることについてお話を申し上げたいと思

います。

ところで、今年度、ステンハマー会長の提唱するＲＩのテーマは"Service above self"であります。これは、現在、日本語訳では「超我の奉仕」と訳されていますが、"Service above self"という言葉が生まれ出る前に、1911年の第２回全米ロータリークラブ連合会大会において、ミネアポリスロータリークラブの初代会長Benjamin Franklin Collinsが提唱した"Service,Not self"という標語がありました。

このような**歴史的因縁**を考えますと、"Service above self"は、「超我の奉仕」と訳すよりは、私はむしろ、日本ロータリーの創立者米山梅吉先生が訳された「**サービス第一、自己第二**」という翻訳の方が適切ではないかと思うのであります。何故かと申しますと、「超我の奉仕」という言葉には、むしろ"Service,Not self"に近いニュアンスがあるからであります。

ところで、Benjamin Franklin Collinsが"Service,Not self"という言葉をどのような心で遣ったかにつきましては、もとよりそれはBenjamin Franklin Collinsのみの知るところであります。

しかし、**英米法学者**の説くところによりますと、"Service,Not self"という言葉は、**英語系国民の慣例**に従って解釈しますと、"Not self"**即ち、自己犠牲の奉仕**を説くものであって、その根底に流れる思想は、中世神学の思想以外の何ものでもない優れて宗教的な思想なのであります。

しかし、その後、1920年頃、自己犠牲は行き過ぎではないか。我々には厳然として自我Selfがあるではないか。それを否定するのはおかしいのではないか。

ロータリーは宗教ではない。自己犠牲などと宗教的なことを言って貰っては困る。という反省の中から、誰言うとなく、selfのabove上にServiceを考えよう、即ち、"Service above self"に変わって行ったのであります。

一説によれば、それを提唱したのは、ロータリーの哲人Ａ．Ｆ．シェルドンであるとも言われています。

したがって、もともと、"Service above self"という言葉には、その思想の底流として、自己犠牲の意味があることを忘れてはならないと思うのであります。

したがって、"Service above self"の前の標語が"Service,Not self"であったことから言えば，"Service above self"の訳語は、「超我の奉仕」と訳すよりは、米山さんの翻訳「奉仕第一、自己第二」の方が訳語のニュアンスとしては適切ではないかと思うのであります。このことについては、古宮ガバナーも同じ解釈のようであります。

これが、文化概念としてのロータリーの解釈であります。ロータリーは、文化概念であって、数理の概念ではないのであります。

しかし、"Service,Not self"の思想がロータリーの思想の世界からなくなったのではありません。ロータリーの思想の世界では、"Service,Not self"の思想と"Service above self"の思想とは、共に排斥し合うことなく併存しているのであります。これが、ロータリーの思想の世界の特色であります。

1959～60年度のＲＩ会長ハロルドＴ・トーマスが「**ロータリーモザイク**」という本を書きました。モザイクとはガラスの破片であります。赤や黄や青や緑の美しいガラスの破片が集まって、美しいモザイク模様を作ってい

るのと同じように、ロータリーの思想の世界も、様々な思想がお互いに排斥することなく共存して、美しいモザイク模様を形作っているとハロルド・トーマスは見たのであります。これが、この本を「**ロータリーモザイク**」と名付けた由来であります。

したがって、ロータリーの歴史の流れのどの段階を切ってみても、その横断面には、様々な思想の混在が見られるのであります。

恰も、滔々とながれる大河の如く、様々な思想が共存しながら滔々と流れて現在に至る思想の潮流を形作っているのであります。

このように、全ての思想が互いに排斥することなく共存している世界。これは、『ロータリーは寛容の中に宿る』と悟ったポール・ハリスの『ロータリー寛容論』の思想の境地と相通ずるものなのであります。

そこで、"Service above self"「サービス第一、自己第二」は、自分のことはさて措いて、先ず第一に世のため人のためのことを考えようというのであります。したがって、この言葉を生みだした直接の動機は、職業奉仕的な思考ではありましたが、しかし、この言葉の根底に流れる思想は、職業奉仕だけではなく、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕、更には世界社会奉仕というロータリーの奉仕・Serviceの全てを包摂する思想なのであります。

したがって、「奉仕第一、自己第二」自分のことより、先ず人のことを考えよう、と言うことは、これを換言すれば「人の幸せを祈ろう」ということになるのであります。

ステンハマー会長は、国際協議会において、今年度の方針として、識字率、教育、水の保全を始め色々の提唱をしておられます。この提唱を一言で集約すれば、会長の心は、世界中の全ての人達が幸せになること、世界中の人達の幸せを祈る心なのであります。

実は、1962～63年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大な思想家、ニティッシュ・ラハリー元会長は、

『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは、永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within !』

というターゲットを打ち上げました。これをロータリアンの心構えとして集約すれば、世界中の全ての人達の幸せを祈る、ということになるのであります。

さて、1月はロータリー理解推進月間であります。ステンハマー会長は、ロータリーの活動を理解することは大切なことだと提唱しておられます。

そこで、ロータリーを理解するためにどうしても心に留めておかなければならないことは、ロータリー運動は、実は**倫理運動**である、ということであります。

ロータリークラブは、**寄付団体**ではございません。**慈善団体**でもございません。**ボランティア団体**でもございません。ロータリークラブは、**社交クラブ**としてロータリアンに奉仕の心を育て、世の中に倫理を提唱していくべき使命をもった団体なのであります。

比喩的な話を致しますと、例えば、街角に**タバコの吸い殻**が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかし、ロータリーは、そこにロータリーの本願はないよ、と言います。タバコの吸い殻を拾うことは避けて

通ることができないにも拘らず、それを拾うことにロータリーの本願はない、と言うと、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーの本願は、そもそもタバコの吸い殻を捨てない**人を育てる**ところに本願があると言うのであります。**人を育てる**こと、**道徳を守る人間を作る**こと、その事によって世のため人のために動いて行こう、とロータリーは言うのであります。

見方を変えれば、それがまさにロータリーが**倫理運動**だと言うことを意味するのであります。

この点を捉えて、ある学者は、『**ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である**』と断言しているのであります。この倫理運動であるという**視点**を見失いますと、ロータリーというものが判らなくなるのであります。

では、ロータリーが**倫理運動**であるということが、一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款**第4条の『ロータリーの綱領』**を見ますと、ロータリーがまさに倫理運動である、ということが一目瞭然に諒解できるだろうと思うのであります。

ロータリーは、倫理運動でありますから、昔から、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーというものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい**知恵**を残してくれているのであります。まさにこれは、先輩達の尊い**知恵の結晶**なのであります。

ところで、昨年の国際協議会で、ＲＩＢＩ副会長の**マイク・ウエブ**氏は、ステンハマー会長から依頼されて、「**倫理と指導者**」というテーマでその考察の幾つかを話しておられます。

このことは、ステンハマー会長が、2003－04年度の会長**ビチャイ・ラタクル元会長**と同じくロータリーの**職業倫理**に強い関心を持っておられることを示しているのであります。

マイク・ウエブ副会長は、『ロータリーというこの素晴らしい運動には、今様々な変化が起こっている。ロータリーは、地域社会や世界全体の考え方や習慣の変化を大きく反映させてきた。しかし、ロータリー創立当初の理念は、未だ真実であり、特に、倫理についてのロータリーの**綱領の第2**「事業及び専門職務の道徳的水準を高めること」という言葉は、今も真実である』と言っておられます。

また、『英語では、倫理と指導者は、非常に似た二つの言葉によって、表裏一体に絡み合っています。それは、PrincipleとPrincipalです』

そして、『倫理 Principle は羅針盤のようなものです。それは、何時も向かうべき方向を示しています。その読み方さえ知っていれば、私達は迷ったり、混乱したりすることはありません』と言っておられます。

『ロータリアンが倫理的に行動することの責任は、一体誰にあるのでしょうか。それは、私達全員であり、単に地区ガバナーやクラブ会長にあるのではありません。ロータリアンの一人ひとりが、各自の行動に責任があるのです』

『ロータリアンには、自分の行動の最終責任があります。倫理的に行動するか否かを決めるのは、ロータリアン自身です。自己反省は、倫理の非常に重要な構成要素です。』

『ロータリアンは、私生活や職場、そして

ロータリーの活動において、倫理的に行動することの必要性を説かなければなりません。ロータリアンは、人生のあらゆる側面において確固とした倫理的行動の提唱者でなければなりません』

とも言っておられるのであります。

しかし、現実の私達の職業社会はどうでしょうか。ロータリーが倫理運動であることが全く機能していないかに見受けられるのであります。

重ねて申し上げます。ロータリーは倫理運動であります。そして、この運動体を形成しているものは、皆、職業人であります。したがって、ロータリー運動の中核には職業倫理があるのであります。

このように、ロータリアンは職業人として職業社会に倫理を提唱し、実践していくべき使命を持っているのであります。したがって、ロータリアンが職業倫理を身につけることは、ロータリアンであるための絶対条件なのであります。そして、ロータリアンがその職業倫理を職業社会に提唱し、実践していくことは、ロータリー運動の中核的要素なのであります。

ところが、最近の私達の職業社会の現状を見ますと、ロータリーが倫理運動であることが殆ど機能していないかのように見受けられるのであります。即ち、

最近、企業の不祥事が頻発しています。その結果、例え優良な企業であっても、マスコミの厳しい批判に曝されて、一瞬にして企業の信用を失墜して消滅する事例があります。例えば、

1．牛肉の産地・品質の偽装という不当な原産国表示をした**雪印食品**は、偽装表示が発覚してからわずか1ヶ月後に会社の解散を決定しております。そして、親会社である**雪印乳業**も「雪印」というブランドを放棄せざるを得なくなりました。

2．また、家畜伝染病予防法違反の**浅田農産**は、鳥インフルエンザの発生を隠蔽したことが発覚してから僅か3ヶ月後に廃業を決定しています。

3．最も新しいところでは、**姉歯一級建築士**の構造計算改竄による耐震強度偽装事件があります。

その他、職業倫理に違反した事件は、誠に枚挙に暇がないのであります。

これらの現象は、特に1990年代のバブル崩壊後、従来の高度経済成長の矛盾から生じた現象であり、経営者や従業員の**職業倫理の衰退**が原因であると考えられるのであります。

ところで、昨今、これらの事例を集約して、**コンプライアンス、法令遵守**ということが提唱されています。

しかし、法令を守るということは、人間として当たり前のことでありまして、法令というものは、人間として守るべき倫理の最低基準を示すものに過ぎません。したがって、法令を守っておればよいというレベルの問題ではないのであります。

実は、ロータリーの提唱する職業倫理は、このようなレベルの低いものではありません。法令遵守よりも遙かにレベルの高い倫理基準を提唱するものなのであります。

「**ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり**」と言われるように、ロータリーは、20世紀初頭以来、職業奉仕の実践について、誠に**高潔な職業倫理**を提唱してきたのであります。

そして、この倫理的行動の究極にあるもの

は、**宗教の世界**であり、先程申し上げました**自己犠牲の世界**であります。そして、**自己犠牲**という言葉の根底に流れる思想は『**愛**』であります。このことは、ポール・ハリスはじめ1923年のRI会長ガイ・ガンディカー Guy Gundaker、1912年の 国際ロータリークラブ連合会初代会長グレンC ・ミードGlenn C.Meedほかロータリーの殆どの指導者の説くところであります。そして、この『**愛**』の発現形態は、『**人々の幸せを祈ること**』なのであります。

このように致しまして、ロータリー運動というものは、倫理運動であります。
そこで、ロータリーが**倫理運動**であるならば、ロータリアンは、世のため人のために**奉仕を実践**をする際にどのような**心構え**が必要かということについて一つの**物語**を紹介しておきます。

この話は、今、日本カソリック学校協会の会長をしておられると思いますが、以前は、岡山ノートルダム清心女子大学の学長をしておられました渡辺和子先生に聞いた話であります。渡辺和子先生は、私が所属しているRI**第2680地区**のＲＹＬＡに来て、若者達に親しく話して下さいました。

あと１ヶ月余りで**2．26事件**の起きた日が参ります。**昭和11年２月26日**、陸軍の青年将校達が反乱を起こした日であります。この時、反乱軍に殺された人に、教育総監渡辺錠太郎大将がいました。渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがいました。それが渡辺和子先生であります。

ところで、反乱軍が渡辺邸に侵入してきたとき、渡辺大将は、お嬢さんの渡辺和子先生と書斎におられたのですが、反乱軍が書斎に入ってきたとき、渡辺大将は、咄嗟にお嬢さんを机の下に隠しました。そこへ、反乱軍が入って来て、渡辺大将に43発の軽機関銃の銃弾を浴びせ、銃剣で滅多突きにして殺してしまったのであります。

和子先生は、１メートルと離れていない目の前で、お父様を殺されてしまったのでありますが、このことが動機となって、カソリックの信仰に入られたのかと思っていましたが、先生のお話を聞くとそうではないと言っておられました。

実は、**30歳**になると、もう修道女にはなれないのでありますが、先生は、**29歳**になるまで外資系の会社で、部下をもつエリートな立場におられたのであります。

しかし、感ずるところがあって、**29歳**にしてカソリックの信仰の道に入られました。

そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約130人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。その時、先輩のシスターが先生に、『シスター、貴女は、今、何を考えていますか』とお尋ねになりました。

先生は、『何も考えていません』とお答えになりました。すると、その先輩のシスターは、厳しい顔になって、『貴女は、**時間を無駄**にしています』と言われました。先生は自分の耳を疑ったそうであります。『何故？』

すると、その先輩は、『同じく、お皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「**お幸せに！**」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とフォークとナイフを並べるということは、時間を無駄にしています』と諭されたそうであ

ります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に**効率的に仕事**をするか、ということを教えられてきましたが、**時間に愛を込める、仕事に愛を込める**ということは、初めて教わりました。

時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、**目に見えない大切なものが込められるか**、込められないかによって、**世の中は大きく変わる**ということ、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという**信仰**であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が**救われた**ということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、**雑用**だと思っていた仕事が実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用になるということを教えられました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。**かかった時間も変わらない**。しかし、**仕事の量**は同じでも、**仕事の質**が変わっている、ということは、**その人自身が変わった**ということです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私達の全ての行動に愛を込めるということは、言い換えれば、**倫理的な生活**をしなさい、ということであります。これは**人を育てる基本前提**であります。

このように、**心の問題を重視**するのがロータリーの奉仕なのであります。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリーの奉仕の基本的な考え方を示しているのであります。**仕事に愛を込める、時間に愛を込める**、そのことなくして**倫理的な人間を育てる**ことは出来ないと思うのであります。

イギリスでは、『ロータリーは、**人間の魂の在り方の問題**である』とも言われているように、ロータリーの奉仕は、**心の問題を重視**する優れて**精神的な奉仕**なのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、「幸せを祈るという**目に見えない大切なものが籠められるか籠められないか**によって、世の中は大きく変わる」と言われました。

このことについて、私の考えを少し**補足**しておきます。

これは、私達一人一人の**心の問題**であります。**一人一人の心の中にあるもの**によって世の中が大きく変わっていくのであります。

例えば、**1989年にソビエト連邦が崩壊**しました。あの原因は何かと言うと、ソビエトの**国民一人ひとりの心の中にあった小さな小さな不満**であります。まさに、心の中にあった小さな小さな不満が積もり積もって、モスクワにおける**民衆の暴動**に際して一気に爆発し、遂にソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させてしまったのであります。

このように、国民一人ひとりの**心の中にあるものが世の中を大きく変えていく**のであります。渡辺先生が、お皿を並べるというつまらない行為に、「幸せを祈るという**目に見えない大切なもの**が籠められるか、籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われたことと全く同じことなのであります。

要するに、私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。

このことのロータリー的な意味を若干補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、ターゲットを出して来ました。私の好きなターゲットは、1960-61年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン（J.Edd McLaughlin）の”You are ROTARY”というターゲットであります。即ち、

”You are ROTARY”貴方がロータリーですよ。ロータリーというのは、国際ロータリーのことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れて英米法的な発想なのであります。アメリカ・イギリスの法律、即ち、英米法的なものの考え方によれば、国家というものは、政府でもない、国会でもない、国民一人ひとりの心の中に宿るものだと考えるのであります。即ち、

英米法の考え方では、国家とは国民の総体であると考えます。しかし、国民が一億人集まっても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、主権や統治権などのプラスアルファーがなければなりません。

ヨーロッパ大陸法の考え方によれば、国家は、領土、国民及び統治組織によって成り立つと考えるのでありますが、英米法は、国家とは領土と国民だけで成り立つと考えるのであります。

では、この主権や統治組織等のプラスアルファーは一体何処にあるのか、と言いますと、英米法は、一億人の国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。日本国憲法の国民主権とか主権在民とかいう思想も、その根底には、この考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生が早くからこの考え方を採っておられました。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだと言う立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じであって、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、業界や地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、世界中が明るくなるとマクローリン会長は説くのであります。

このように、徳性を磨く、心を磨く、ということは、先程の渡辺和子先生の話にもありましたように、私達一人一人がお互いに幸せを祈り合うことなのであります。

そして、私達ロータリアンが、そして、世界中の人達がお互いに徳性を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界を実現することがロータリーの夢なのであります。だからこそロータリーは、倫理を提唱するのであります。

ロータリーは、まさに倫理運動でありますから、昔から、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーというものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであります。まさにこれは、先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。

したがって、ロータリアンは、20世紀初頭の先輩達に敬意を表して、**その知恵に学ばなければ**ならないと思うのであります。

RIの現況報告

ところで、このステンハマー会長のテーマは、ロータリーの現況を踏まえてのものでありますから、論旨の展開の関係上、ここでＲＩの現況を簡単に報告しておきます。

以下の統計資料は、ＲＩから発表されたものであります。**数字の報告**は、面白くないかも知れませんが、暫くご辛抱下さいますようお願いいたします。

1．2005年６月30日現在の**会員数**を世界中で見ますと、168カ国に32,507クラブがあり、**会員数**が1,223,297名であります。

日本国内には2,328クラブ、但し、年度末近くの2005年６月29日に２クラブが脱会しているため、実際には2005年６月30日現在のクラブ数は 2,326クラブ、**会員数** 103,276名であります。

2．2004年６月30日現在の会員数は、世界レベルでは31,936クラブ、 **会員数**1,219,532名であります。

日本国内には2,327クラブ、但し、年度末の2004年６月30日に１クラブが加盟し、実際には2004年６月30日現在のクラブ数は2,328クラブ、 **会員数** 106,201名であります。

3．そこで、年度末における2005年と2004年の**比較**をしておきます。

世界レベルでは、クラブ数は571クラブ増えており、**会員数**も4,765名増えています。

日本はどうかというと、クラブ数は１クラブ増えましたが、**会員数**は2,925名減少しています。

次に、2005年９月30日現在のローターアクト、インターアクト及びロータリー地域社会共同体関係については、

1．**ローターアクトクラブ**は、158の国及び地理的地域に8,099クラブあり、推定会員数は、186,277名であります。

2．**インターアクトクラブ**は、119の国及び地理的地域に10,402クラブ、推定会員数239,246名であります。

3．**ロータリー地域社会共同体**は、71の国及び地理的地域に5, 992団体, 推定会員数137,816名であります。

最近の脱会クラブとしては、第２次世界大戦時を除いて、ＲＩの加盟から離脱するクラブは、2000年６月29日までありませんでしたが、この日に１クラブが脱会し、その後、2002－03年度に２クラブ、2003－04年度に１クラブ、2004－05年度に５クラブ、そして今年度2005－06年度に既に３クラブが国際ロータリーから離脱しています。

クラブの合併としては、**2004年規定審議会**でクラブの合併に関する制定案が採択され、複数のクラブが合併できるようになりました。

これを受けて、2005年６月に既存の２クラブが１クラブになる合併申請が２件あり、承認されています。

次に、**日本における最近のロータリー拡大の状況**を申し上げておきます。

2001－02年度は11クラブ
2002－03年度は９クラブ
2003－04年度は７クラブ

2004－05年度は５クラブ

2005－06年度は２クラブの拡大がありましたが、この状況を見ますと、漸減の傾向を見取ることが出来ると思うのであります。

それから、**2007－08年度ＲＩ会長指名委員会について御報告申し上げます。**

昨年９月に開催されました2007－08年度ＲＩ会長指名委員会におきましてドナルド・オズバーンDonald E.Osburn氏が指名されたのでありますが、その後、ＲＩ細則で禁止されている活動に違反する活動が判明しましたので、11月に開催されたＲＩ理事会で審議の上、この指名委員会の指名を破棄し、再度12月５日に前回の指名委員会委員以外の委員で指名委員会を開催し、その結果、カナダのウイルフリッド・ウイルキンソンWilfrid J.Wilkinson氏（RotaryClub of Trenton,Canada）が指名されました。

ウイルキンソンWilfrid J.Wilkinson氏は、公認会計士ウイルキンソン・アンド・カンパニーの共同創設者であります。2001年に退職して以来、全国法廷会計士協会のカナダ担当コーディネーター及びカナダ・クインテバレースクールの常任理事を務めてこられました。

また、Wilfrid J.Wilkinson氏は、1962年にロータリアンとなり、現在、ポリオ・プラス全国提唱顧問、ポリオ・プラス・パートナーグループの委員として活躍中であります。以下、詳細は省略します

なお、昨年11月のRI理事会決定事項の内、若干のものを紹介しておきます。

１．先ず、RI理事会は、中華人民共和国に対するロータリー拡大の門戸を開きました。RI会長は、公式な認可を得るため、現在、中国政府との連絡をとり、中国における拡大活動に指標を示しています。

また、第3450地区と協力して将来のロータリークラブ指導者の研修に当たる特別代表を任命することになります。

２．次に、ロータリー財団管理委員について、ＲＩ理事会は、今年７月１日から就任する４名のロータリー財団管理委員の指名に対して、ビル・ボイド会長エレクトに感謝の意を表明しました。この４人の内には、日本から田中作次元ＲＩ理事が入っておられます。

３．最後に、国際大会に付いて、ＲＩ理事会は、2007年国際大会の開催受入地でありますアメリカ・ルイジアナ州ニューオーリンズがハリケーン「カトリーナ」の災害の結果、開催地を他の都市に振り替える必要があるとして、アメリカ・ユタ州ソルトレイク・シティが、暫定的に2007年度の国際大会の開催地に選定されました。

なお、ＲＩ理事会は、ニューオーリンズを暫定的に2011年度国際大会開催　地として選定しました。

以上、会員の数の問題を長々と申し述べましたが、ステンハマー会長は、国際協議会において、『会員増強は継続性の一環である』と述べておられます。

確かに会員増強・ロータリーの拡大は、国際ロータリーの直接関心事であります。

しかし、私個人としては、会員の数の問題には余り関心はありません。問題は、会員の質であります。クラブがどのような人を育てたか、それが問題なのであります。今日ご在席の佐藤千壽パストガバナーがガバナーの時の国際ロータリー会長は、ウイリアム・ロビ

ンスW,Robbins会長でありますが、このロビンス会長は、

「ロータリークラブの価値というのは、そのクラブが地域社会に対してどのようなプロジェクトをしたのかということは問題ではない。最も大事なことは、そのクラブがどのような人間を育てたかということに尽きる」

と言っておられます。

この視点から申しますと、私は、30年前のロータリーを思い起こすべきであろうと思うのであります。当時のロータリーは、数は少のうございました。しかし、職業人として高潔な倫理が確立していました。ロータリアンとしての**誇り**を漲らせていたと思います。

ところが、今はどうでしょうか。職業人の倫理は一体どうなったのでしょうか。ロータリアンとしての誇りはあるのでしょうか。先程申し上げましたように、一般社会の職業倫理の頽廃は、誠に目に余るものがあります。これに対する対策はあるのでしょうか。

問題は、**ロータリークラブを強化すること**であります。各クラブがロータリアンを徹底的に教育することであります。そのことによってロータリアンの質を高めることが、倫理を高め、クラブの質を高めることになるのであります。

キップリングという作者が動物の小説を書きました。『**ジャングルの法則**』というのであります。その一節に、狼の群れについての文章があります。それは、

「**群れの力は狼である。そして、狼の力は群れである**」と言っています。

つまり、１匹の力の強いことがその群れの力を強くするのであります。その群れを構成する１匹々々が狼という強い動物だからこそ、群れ全体が強くなるのであります。

ロータリーも、ロータリークラブを構成する一人々々のロータリアンが強くなって、初めてクラブが強くなります。そして、クラブの集合体である　国際ロータリーもまた強くなるのであります。

そして、**ロータリアンを強くする**ということは、ロータリアンの肉体を強くすることではございません。ロータリアンの**内なる心**を強くすることなのであります。**高潔な倫理**をもった人、**誇り高き人**を育てることなのであります。

先程申し上げましたように、イギリスでは、「ロータリーは、人間の魂の在り方の問題である」と言われておりますように、ロータリアン一人々々の内なる心を強くすることがロータリーを強化することになるのであります。

そして、そのことが**ロータリーの公共的イメージ**も高めることになるのであります。

以上、長々と申し述べて参りました。要するに、ステンハマー会長の期待は、

「全ての人の幸せを願う、そのようなロータリアンとしての思いの深さを忘れることなく、職業社会、地域社会そして世界社会に対して、今何が必要なのか、そのニーズに対してどのような奉仕の実践が必要なのか、その問題点をはっきりと自覚して行動してほしい。」ということであろうかと思うのであります。

したがって、ステンハマー会長のテーマ"Service above self"という言葉は、まさにそのことに万感の思いを込めた提唱であると私は理解しているのであります。

大変長くなりました。ステンハマー会長のお心を伝えることと、それにＲＩの現況報告を添えまして私の話を終わりたいと思います。ご静聴有り難うございました。

あとがき

「良質な原理の復活」から始まり「ロータリアンとは？」で終了するまで実に22週にわたり、今年度も「純ちゃんコーナー」を、聞き続けることが出来ました。伊丹ロータリークラブの全ての例会に出席した者だけが味わえる充足感に充たされた至福のひとときであります。

最初に、過去５年の永きにわたり、淡々とした語り口の中に実に内容のある３分間を、我々会員に与えていただきました深川純一会員の哲学と献身的な努力に、心より敬意を申し上げます。

そして、今年度もその記録を、「純ちゃんコーナー」PartⅤとして、活字にいたします。PartⅠからPartⅣまでの輝かしい足跡に、更に新たなる足跡を重ねることが出来る喜びを、又、会員としてこの時に立ち会えることを、大変誇りに思います

今、ロータリーは激動の中にあります。原点に立ち返ることの必要性を痛切に感じるときでもあります。目指すものをしっかりと確認するときでも有ります。

この小冊子を、単なる我々伊丹ロータリークラブの貴重な財産としてだけではなく、これからのロータリー活動に無くてはならない指針を示してくれるものとして、ロータリーを理解し自らを磨くためにも、全てのロータリアンに、積極的に活用されることを期待します。

最後になりましたが、重ねて深川純一会員の哲学と献身的な努力に、心より敬意を申し上げますとともに、白附義寛会長、田中義郎幹事を始め会員全ての皆様、そして発刊にご尽力いただきました事務局の方々、更には５年前にこの素晴しい「純ちゃんコーナー」を誕生させた竹中秀夫会員に深く感謝申し上げます。

2006年8月　　伊丹ロータリークラブ　ロータリー情報委員会

純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅵ

目　　次

1．『社会奉仕と職業奉仕』…… 2
2．『ロータリーの世界における情報の伝達』…… 3
3．『ロータリーの審議機関』その1…… 4
4．『ロータリーの審議機関』その2…… 5
5．『ロータリーの審議機関』その2…… 6
6．『ロータリーの審議機関』その4…… 7
7．『ロータリーの審議機関』その5…… 8
8．『ロータリーの審議機関』その6…… 9
9．『ロータリーの審議機関』その7…… 10
10.『企業内管理論』その1…… 11
11.『企業内管理論』その2…… 12
12.『企業内管理論』その3…… 13
13.『企業内管理論』その4…… 14
14.『企業内管理論』その5…… 15
15.『企業内管理論』その6…… 16
16.『企業内管理論』その7…… 17
17.『企業内管理論』その8…… 18
18.『アッセンブリーとフォーラム』その1…… 19
19.『アッセンブリーとフォーラム』その2…… 20
『ロータリーにおけるリーダーシップ』…… 21

序に代えて

拙話『純ちゃんのコーナー』に就きましては、昨年度もロータリー情報委員長大森英夫会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満6年の歳月を閲することになります。もとより私のペンの泉は、未だ涸れることはありませんが、顧みて、あのような内容でよかったのかどうか内心忸怩たる思いでございます。

元来、ロータリー情報を説くためには、ある程度纏まった時間が必要なのでありますが、それを3分間づつに区切って話すことがよいのかどうか、否、短いからこそ判りやすくてよいのだとの御意見も各地から頂いておりますが、これは今後の研究課題だと思っております。ただ、私は、ロータリーは心の問題であると考えておりますので、私の意のあるところをお汲み取り頂ければ有り難いと思います。

今、ロータリーは心の問題であると申しましたが、その意味は、ロータリーは文字に書かれたものではないと謂うことでございます。即ち、

ロータリーをよく勉強なさった人の中には、手続要覧に書かれた知識をもって、それを知らない人を責める人が居ますが、これはロータリーの心が判っていないからであります。謂わば、ロータリーが身に付いていないのであります。しかし、このような人も私達の仲間でありますから、温かく遇してあげなければなりません。これが1910年、ポール・ハリスが『ロータリーは寛容の中に宿る』と大悟したこと一つの意味でもあります。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を19回しか話すことが出来ず、その内容が非常に乏しくなりました。そこで、19回分の話に加えて、今年の7月14日に神戸国際会館において開催されました当地区情報委員会主催のセミナーで話した『ロータリーにおけるリーダーシップ』の一文を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

終わりに、この一年間、私の拙い話を辛抱強く聴いて下さったクラブの皆様方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、この小冊子の発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員、大森英夫会員はじめクラブ事務局の人達に心からなる感謝を捧げ、最後に、私の恩師の一句を記し、ペンを擱きます。有り難うございました。

秋天に人々にただ謝するのみ　　高野素十

2007年9月　　深川純一

1．『社会奉仕と職業奉仕』

商業の町といわれる大阪は、古くから「水の都」と呼ばれておりますように、大阪の町には、「浪速の八百八橋」と謂われるように、沢山の橋が架かっています。

実を言いますと、あの大阪の沢山の橋は、国家権力によって架けられたもの、即ち、お上の力によって架けられたものは一つもないのであります。すべて大阪の商人達が、自分達の地域社会は自分達で作ろうと言って、民間の力によって橋を架けていったものなのであります。まさに、大阪の町は、民の力によって発展したのであります。

したがって、渡辺橋というのは、渡辺さんという人が架けた橋であろうと思います。淀屋橋というのは、今でも淀屋橋の近くにある淀屋さんが架けた橋であり、肥後橋は、肥後の国、熊本出身の人が架けたものと思われます。このように、大阪の橋の名は、大阪商人達が自分の名か、或いは自分にゆかりのある名前を付けていったのであります。

ところが、この中に、只一つ、『心斎橋』という名の橋があります。何故このような名前を付けたのか、と申しますと、江戸時代(1724年享保9年）に、鴻池又四郎他4人が相談して『懐徳堂』という論語塾を作りました。これは大阪商人三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、船橋屋四郎右衛門、備前屋吉兵衛、鴻池又四郎の5人が儒者中井甃庵と謀って、彼らの師三宅石庵を学主に迎えたものでありました。

元来、大阪というところは、有名な緒方洪庵の『適塾』ほか私塾の多いところでありました。この懐徳堂もその一つでありまして、大阪商人達が、毎晩仕事を終えてから、その論語塾に通い、孔子の教えを学んだのであります。実は、このことが大阪商人達の商業道徳即ち、『職業倫理』の基本になっていると言われています。

そして、孔子が弟子に諭した言葉に、『仁の道は貧富に関わりなく存在する。先ず心を洗え』という言葉があります。大阪商人達が、この言葉に感動して、心を洗う、心を斎しむ（ツツシム）橋、と書いて、『心斎橋』と名付けたのであります。

要するに、大阪商人達が『懐徳堂』という論語塾で心を磨いた結果、その心が、一方では、社会奉仕的な現れとして、地域社会に橋を架けていったのであり、また一方では、職業奉仕的な現れとして、大阪商人の商業道徳『職業倫理』を確立していったのであります。このことは、橋を架けたり、職業倫理を確立するという奉仕の実践の前に、先ず懐徳堂という論語塾で心を磨く、奉仕の心を磨くことの重要性を物語るものであります。

実は、ロータリークラブは、懐徳堂のようにロータリアンが奉仕の心を磨くところなのであります。日本ロータリーの創始者米山梅吉先生が『ロータリーの例会は人生の道場である』と喝破されたことは、まさにこのことを物語るのであります。

2.『ロータリーの世界における情報の伝達』

現代社会は、情報化社会であります。では、ロータリーの世界で重要な情報がどのようにして伝達されて行くのかという基本的な情報伝達の仕組みについてお話します。

先ず、国際協議会（International Assembly）でRI会長エレクトが全世界から集まったガバナーエレクトに対して、次年度のRIテーマを始めその年度の基本的な方針を伝達します。そして、その国際協議会で教育を受けたガバナーエレクト達は、各地区に帰り、今度は、地区協議会（District Assembly）において、国際協議会で受けて来た情報を地区内のクラブ会長並びにクラブ幹事に伝達するのであります。そして、その情報について地区内で次年度の方針等を協議したクラブ会長・幹事は、今度は、各クラブに帰りまして、クラブ協議会（Club Assembly）を開いて、その情報をクラブの会員達に伝達するのであります。このようにして、最初、国際協議会で起こったロータリーの基本的な情報が、国際協議会、地区協議会、そして最後はクラブ協議会の順序で伝達されていくのであります。これが協議会、即ち、Assemblyというものの基本的な流れなのであります。

なお、最近は、地区協議会には、クラブ会長・幹事のほかに、クラブの重要な奉仕の委員長達も参加していますが、これは、クラブ会長・幹事が地区協議会で受けてきた情報をクラブ協議会において直接クラブの会員達に伝達するのが本来のあるべき姿なのでありますが、会長・幹事による情報の伝達を確実にするためにクラブの各奉仕委員長にも地区協議会に出席して貰おうという便宜的な措置でありまして、原理的には、クラブ会長・幹事だけが地区協議会に出席すべきものなのであります。何故かと言いますと、国際ロータリーの会員は各ロータリアンではなく、各クラブでありますから、各クラブの代表権者である会長・幹事と国際ロータリーの地区内におけるただ一人の役員であるガバナーとが協議するのが地区協議会だからであります。したがって、ガバナー月信の宛名人は、クラブ会長・幹事殿となっているのであります。クラブ会長・幹事以外のクラブの各委員長ほか一般のロータリアンは、国際ロータリーとは何の関係もないのであります。したがって、何の関係もない委員長などを国際ロータリーの組織である地区協議会に出席させるのは原理的にはおかしいのであります。したがって、昔は、地区協議会というのは、ガバナーとクラブ会長・幹事だけの協議の場であったのであります。

以上が、ロータリーの世界における情報伝達の基本的な流れでありますが、このほかにも付随的な情報の伝達として、ガバナー月信ほかガバナーから各クラブ、各地区への情報の伝達、各クラブ間の情報の伝達があります。更に、ガバナーから国際ロータリーへの情報の伝達があります。これら情報の伝達が奉仕の源泉となるのであります。

3．『ロータリーの審議機関』その1

ロータリークラブをどのようにして管理するのか。これは、クラブ会員相互の役割の配分の問題であります。元来、組織というものの管理原則を原理的に割ります場合に、三つの尺度を立てるということは一般に考えられることでありまして、単にロータリークラブだけではないのであります。会社の組織や国家の組織を考える場合にも、原理の大きな柱を持って割るという躾は持った方がよいのであります。

先ず第一に考えられますのは、審議系列であります。これは何をするところかと言いますと、原則の定立であります。国家で言うと、国会に当たるわけであります。

この審議系列は、自治権のある団体には必ずあります。先ず、原則を決めるのであります。皆で衆知を結集して決めるか、或いは、全体の中からごく一部の人を選び出して、その人に権限を委託して、衆知を集めて原則を決めるのであります。この機関を理事会と言います。標準クラブ定款第9条第1節に『このクラブの管理主体はこれを理事会とする』という大黒柱的な規定があります。

この審議系列というのは、ロータリアンは、クラブ内外に対する政策決定をするために合議をしますが、その合議をするグループが法的にどのような権限を持っているのかということを何時も頭の中に入れておかなければなりません。

ロータリーでは、原則としてグループ活動によって政策決定をします。ひとり単独で政策決定が出来るのは、ロータリーではガバナーだけであります。

では、その政策決定をするグループ活動の法的根拠は一体何かと言いますと、その論点は、そのグループ活動が決議機関か否かという点にあります。

特定のグループが政策決定のために会合を開くときに、その機関の性格が、決議権を行使する機関として動いているのか、或いはそうでないのか、ということをいつも頭の中に入れて考えなければなりません。

決議機関というのは、そのグループが取り決めたものがその団体（クラブ）全体を拘束するもの、即ち、団体意思を形成出来る機関のことであります。したがって、少人数のグループが取り決めたものが団体全体を拘束するためには、その要件は、極めて厳格でなければならないのであります。

では、その要件とは一体何かと言いますと、第1に、案件の事前通告であります。第2に、定足数であります。そして、第3に、議事規則であります。そして、最後に、多数決であります。この四つの要件を満たした時に、そのグループが取り決めたものがクラブ全体を拘束するのであり、これを決議というのであります。

4．『ロータリーの審議機関』その２

一般に決議機関というものは、そのグループが取り決めたものが団体全体を拘束するもの、即ち、団体意思を形成出来る機関のことであります。したがって、少人数のグループが取り決めたものが団体（クラブ）全体を拘束するためには、その要件は、極めて厳格でなければならないのであります。では、その要件とは一体何かと言いますと、

第１に、案件の事前通告であります。規則を見ますと、幹事が事前通告をするのには、５日前（定款第９条第３節）とか10日前とかを決めています。これは合議体の構成メンバーに会議の議題について予断を与えておかなければならないと言うことであります。即ち、藪から棒の議論はいけないのであります。例えば、例会で、いきなり「只今から臨時総会を開きます」などというのはいけないのであります。

第２に、定足数であります。ロータリークラブの総会や臨時総会の場合には３分の１であります。これは、ロータリーは社交クラブでありますから、争いのある場合には会員が参加したがらないことを考慮に入れたものであります。したがって、このような特別の規定がなければ、定足数は２分の１であります（例えば理事会等)。そして、定足数に満たない場合は会議が成立しませんから、仮に何かを取り決めたとしても、これは単なる申し合わせに止まり、団体全体を拘束する決議にはなりません。

第３に、議事規則が必要であります。議事規則は、沢山の人が発言するので、その発言の交通整理をしなければなりません。即ち、誰の発言を優先させ、誰の発言を後順位にするかについては、ルールを決めておかなければなりません。

議事規則は、会議の人数が大体20名を超える場合には必要であります。したがって、例えばクラブ理事会のように20名以下の場合は、議事規則は必要ありません。腹を割って話し合えばよいのであります。

一説によれば、十分な討議が出来るのに最適な人数は、16名であるという意見があります。人数が多すぎると、全ての人が意見を言うことが出来ませんし、人数が少なすぎると、意見の数も少なくなり、十分な討議が出来ないのであります。

第４に、多数決原理の適用であります。これは、原則として、定足数を充たした会議の構成メンバーの過半数で議決します。ただ、既に議決のあるものをひっくり返す時には３分の２の過半数が必要であり、更に、団体の根本を揺さぶるような改正の場合には、４分の３の過半数が必要となります。このように過半数には色々あります。

以上を要するに、多数決で決まりますと、団体意思を形成することになりますから、これを決議と言うのであります。

5．『ロータリーの審議機関』その3

ロータリーでは、殆どの場合、グループ活動によって政策決定をしますが、その時、そのグループ活動即ち、その会合が決議権をもった機関であるのか否か、つまり、そこで取り決めたものがクラブ全体を拘束するのか否かということをいつも頭に入れて規則を読まなければロータリーの組織原理を正しく理解することは出来ないのであります。

そうすると、標準クラブ定款第9条『このクラブの管理主体はこれを理事会とする』とか推奨クラブ細則第12条『一切の案件は、理事会の先議を経ることなく、直接総会（例会）において提案せられてはならない』(理事会の先議権）という規定は、一体何を意味するのか、と言うと、理事会も総会も決議機関であるということなのであります。

ただ、ここで一点注意すべきは、ロータリーは、この決議機関の意味の総会のことも単に例会と言っていることであります。即ち、例会には、決議機関として機能する場合の例会と、そうでない毎週一回の親睦のための例会とがあるのであります。

ロータリアンのグループ活動の中で、一番大事なものは毎週1回の親睦のための例会であり、この例会は、ロータリアンが他のロータリアンにお目にかかって自己研鑽を遂げるというロータリーの本願の場であります。したがって、これは、グループ活動とは言いますが、一人一人のロータリアンが自己改善のために抱えている課題というものは、各人別々であります。したがって、ここで取り決めるべきものは何もないのであります。

皆が、兎に角、自己研鑽の目的意識をもって例会に出て、歌を唄い、食事をして、卓話に耳を傾けます。そして、何某かのものを学びます。何を学ぶかは、それぞれの人の良心に任されています。したがって、この中には、団体意思を形成するものは、何もないのであります。即ち、毎週一回の通常の例会は、非決議機関であります。したがって、決議機関でなければ、例えば、定足数も必要でありませんから、地区大会に全員出席したために次回の例会は出席者が殆ど居なくても例会は成立します。

要するに、通常の例会は、非決議機関であります。例会のプログラムや講師の御礼はどうするかとかのプランニングは、全て理事会の政策決定に関わることでありまして、毎週一回の通常の例会では処理することが出来ないことなのであります。

そこで、標準クラブ定款第9条『このクラブの管理主体は、これを理事会とする』という規定によって、これら全ての政策決定は、Governing bodyである理事会に全ての権限が与えられているのであります。したがって、僅か9～10人の理事会の意思決定がクラブという団体の意思になるのであります。したがって、標準クラブ定款第9条は、大黒柱的な大変大事な規定なのであります。

6.「ロータリーの審議機関」その4

クラブ理事会は決議機関でありますから、理事会で或ることを決めますと、会長が次回の例会でこのことを報告するのであります。したがって、理事会の決定が正当かどうかについて例会で総意を諮るなどということは絶対に出来ないのであります。何故かと言いますと、通常の例会は、親睦と自己研鑽の場であって決議機関ではないからであります。したがって、例会において、理事会の決定に対して異議の申し立てをすることは、推奨クラブ細則第12条「理事会の先議権」によって禁止されているのであります。即ち、「事の如何を問わず、本クラブを拘束する決議または提案は、理事会によって審議された後でなければ、本クラブによって審議されてはならない。もし、かかる決議または提案が、クラブの会合で提起されたならば、討議に付することなく、理事会に付託しなければならない」と規定されているのであります。したがって、理事会決定に対する異議の申し立てはクラブ幹事に対して申し立てなければならないのであります。これによって臨時総会たる例会が開かれます。

ところで、このような異議の申し立てがあった場合、ロータリークラブは社交団体でありますから、会員はこのような争いごとには関与したくありません。そこで、この例会（臨時総会的意味の例会）の出席率は低下します。したがって、例えば、会員60名のクラブでは、例会の定足数は3分の1で20名、この20名全員が出席して会議体が成立したとしても、その内9～11名は理事であります。理事会は自分の決議の効力が争われていますから、理事は全員出席します。しかも、既に理事会決議により団体意志を形成していますから、これをひっくり返すには、2分の1プラス1の単純過半数ではなく、3分の2の過半数が必要でありますから、異議申立者は、絶対に勝ち目はないわけであります。したがって原理的には、臨時総会たる例会が最高決議機関ではありますが、異議申立があった場合を個別具体的に検討しますと、理事会がクラブ内部における事実上の最高決議機関として機能することになるのであります。（ルール上はそうはならない）

理事会の決定に対して異議申立てがあれば、幹事は臨時総会たる例会を開くために、5日間の期間を定めて全会員に事前通告をしなければなりません。すると、次の例会は、理事会の決定について異議の申立てがあったことの正当性を審議するための例会として開かれることになるので、これは、決議機関としての例会となるわけであります。したがって、例会には、以上のように二つの性格があることを原理的に区別しておかなければならないのであります。

7．『ロータリーの審議機関』その5

前回申し述べましたように、理事会決定に対して異議の申立がありますと、幹事は、全会員の意思をきく場としての臨時総会たる例会を開かなければなりません。そこで、幹事は、5日間の期限を定めて会員に案件の事前通告をすることになります。

すると、次の例会は、理事会の決定に対して申し立てられた異議の適法性を審議するための例会として開かれることになりますので、これは、決議権をもつ決議機関としての例会となるわけであります。即ち、「臨時総会としての性格を持つ例会」であります。

したがって、定款･細則上は、単に「例会」という言葉しか出てきませんが、実は、「例会」には二つの性格があることを原理的に区別しておかなければならないのであります。即ち、一つは、「親睦･自己研鑽のための通常の例会」であり、（これは決議権なし）

他の一つは、「臨時総会たる性格を持つ例会」であります。（これは決議権あり）

臨時総会としての例会は、決議権がありますから、定足数が必要であり、それは会員数の3分の1であります。そして、多数決原理は、2分の1プラス1の単純過半数ではなくて、3分の2の過半数が必要なのであります。

これは、既に理事会の決議によりクラブの団体意思が形成されていますので、これをひっくり返す決議には、単純過半数では不十分なのであります。

このように見て来ますと、理事会決議をひっくり返すのでありますから、原理的には、「臨時総会たる性格をもつ例会」がクラブ内部における最高決議機関ではありますが、しかし、現実に、この例会でそのような決議が出来るのか、ということをもう一度振り返ってみますと、前回申し述べましたように、「臨時総会たる例会」がこの機能を発揮する場面は先ずないと言わなければならないのであります。

もし、万一、「臨時総会たる例会」において、理事会決定に対する異議が通ることになれば、それはクラブにとっては革命的事態でありまして、理事全員は総辞職しなければならないことになります。したがって、ここは幹事の出番でありまして、異議申立者に対して、「『臨時総会たる例会』において勝ち目のない戦をするよりは、次年度理事になって、その理事会で前年の理事会決議と反対の理事会決議をした方がよい」という具合に奨めて説得し、例会に対する異議申立を撤回させるべきであります。

要するに、親睦と奉仕を中核とするロータリーの世界では、このような革命的事態を起こしてはならないし、また、現実にもあり得ないことでありまして、したがって、理事会は、事実上、クラブ内部における最高決議機関と言えるのであります。

8.『ロータリーの審議機関』その6

ロータリークラブには各種委員会があります。これは理事会の補助機関アシスタントでありますから、全て決議機関ではありません。したがって、定足数もありませんから、委員長一人でも委員会は成立します。委員会は、理事会のアシスタントでありますから、理事会から諮問された事項について、「委員長がこのように取り決めたのでよろしく」と報告すればよいのであります。

では、委員全員が欠席した時にはどうするか。理事会が取り決めれよいのであります。理事会の権限の中には、委員会を代行出来る権限を含んでいるのであります。したがって、委員全員が欠席した方が、却ってやり易いのであります。

また、委員会は、理事会から諮問せられた事項について、事実上のお手伝いをするだけのグループ活動でありますから、委員会が取り決めたことを理事会は覆すことが出来るのであります。何故ならば、理事会は、クラブにおける最高決議機関であり、一方、委員会は、何らの決議権も持っていないからであります。したがって、委員会で取り決めたものは、理事会を拘束することが出来ないのであります。

勿論、委員会が、理事会の政策決定の下準備をすることはありますが、そこで取り決めたものが直ちに理事会を拘束することが出来るのではなく、それが理事会の決議を経て、初めてクラブ全体を拘束することになるのであります。

以上は、原理論でありますが、現実のクラブ運営に際して一点注意しなければならないことは、委員会が一生懸命に考えて、例え、出来は悪かったにせよ、何らかの取り決めを理事会にもってきてくれたその努力に対して、理事会が紳士のマナーとして何処まで配慮するかという問題があります。藪から棒に、理事会には法的な権限があるからといって、その権限でもって委員会の取り決めたものを覆してやろう、などと考えると、クラブの良質な親睦が崩れ去ることは、先ず間違いないであろうと思います。

ロバート式議事規則を作ったロバート将軍が、ロバート式議事規則に通暁した人達の会議を見学した後で、ロバート将軍は、深くため息をついて、

『自分が開発した合理的な規則も、人間の一片の思いやりと良識にはかなわないな』

と言ったという有名な物語があります。

例えば、会社で謂えば、経営権を持っている役員に対する株主の思いやり。そして、株主に対する役員の感謝の気持。このような良識の裏打ちがなければ、どんなに優秀な法的制度も社会的な機能を果たすことは出来ないということを心に留めておかなければならないと思います。

9．『ロータリーの審議機関』その7

ロータリークラブ内のグループ活動としては、各種委員会のほかに、クラブ協議会（Assembly）、クラブフォーラム（Forum）そして炉辺会合（Fireside meeting）等があります。

クラブ協議会（Assembly）は、クラブの運営と活動について相談する会合でありまして、年間数回開かれるものであります。即ち、この協議会でクラブ理事会と各種委員会の方針と計画が協議されて、クラブの進むべき方向が話し合われるのであります。

クラブフォーラム（Forum）というのは、原則として、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕そして国際奉仕の四大奉仕部門について討論（Discussion）をするものであり、各部門の奉仕が具体的にどのように実践されなければならないかについて審議するものであります。

炉辺会合（Fireside meeting）は、親睦と情報提供を目的とした全く任意のグループ活動であり、最近は、家庭集会という名目でも開かれています。

このように、クラブ内のグループ活動は色々ありますが、しかし、これらは、すべて決議機関ではありません。したがって、一応の取り決めは出来ますが、この取り決めたものをもってクラブの団体意思とするためには、その取り決めたものを理事会に報告して、改めて理事会の決議を取り付けなければなりません。

このことが、国際ロータリーレベルの問題として言えば、RI会長の個人的な意見の表明に過ぎなかった会長の「ターゲット」が、国際ロータリーの理事会の決議の裏打ちによって団体意思の表明としてのRIの「テーマ」になった理由であります。

テーマは、運動の柱（これから為すべき仕事の柱）になりますから、国際ロータリー理事会の決議を経たことによって、「ターゲット」は「テーマ」になるのであります。

但し、RIの奉仕の実践に関するテーマは、拘束力を持ちません。何故ならば、決議23－34号第5項によって、国際ロータリーは、こと奉仕の実践に関する限り、各ロータリークラブに対して命令する権限を一切有しないからであります。

更に、標準クラブ定款第9条『このクラブの管理主体はこれを理事会とする』という規定によって、各クラブは、絶対的な自主独立性を保障されており、国際ロータリー理事会と雖も、各クラブの管理権（実践の管理権）を侵すことは出来ないからであります。

以上を要するに、ロータリアンがグループ活動をしているときは、決議権を行使しているかどうかを考えて、決議権を行使していない時は、一応の取り決めをしているだけであると考えればよいのであります。そして、その全ての取り決めを集約するグループが理事会であります。したがって、理事会は、事実上、オールマイティなのであります。

以上で、クラブ内部の合理的な組織管理原則の話を終わります。

10.『企業内管理論』その１

今回からは、ロータリアンが自分の企業をどのように管理すれば強靱な体質の企業を作り上げることが出来るかの原理についてお話し致します。

先ず、企業内管理の要諦は、企業を権限論的に見ないで機能論的に見ることであります。即ち、企業というものは、企業で働く人達が、それぞれ自分の役割を十分に果たすことによって円滑に運営されるのであります。したがって、その一人が欠けても、その限りにおいて企業運営の円滑さが阻害されます。この意味では、企業を構成する社長職、課長職、タイピスト職、工員職その他諸々の職務を機能論的に見る限り、それはすべて平等対等な『役割の配分』に過ぎないのであります。

そして、企業の構成員それぞれが自分の役割を十分に果たすことにより、初めて企業は発展するのであり、企業が発展することによって、その構成員たる従業員も潤うことになるのであります。したがって、『他人なくして自分なし。自分なくして他人なし』ということを前提として、先ず、従業員には良質な人を選ぶことが大切でありまして、従業員が企業経営の役割を分担しているという意識を育てることが肝要であります。

そして、如何にしてこの意識を育てるかということが企業内管理の大きな柱となるのであります。要するに、これは横型社会の原理であります。

これとは逆に、企業を権限論的に見ますと、社長は、会社の代表権限を持って職階制の最高の位置にあり、従業員は、会社との雇用契約をもって結ばれ、業務命令に服することによって上意下達の関係即ち、縦型社会になるのであります。しかし、これでは、従業員が企業経営の役割を分担しているという意識は全く育たないのであります。

次に、ロータリーは、倫理の世界でありますから、企業をめぐる全ての契約関係について、先ず、法律論的に見ないで、倫理論的に見ることが肝要であります。

そして、どうしても法律論を出さねばならない時には、倫理の裏打ちのある法律論を出すべきであります。このことは、特に人間関係（Human relation）の場面において重要でありますので、後に詳しく申し述べます。

そして、最後に、別の見方をすれば、企業は、役員と従業員という二つの人脈集団によって動いているのでありますが（Labor & Management)、この人脈集団は、お互いに強い不信感を持っています。これが企業の発展に大きな阻害要因となるのでありまして、この不信感を如何にして拭い去って行くかということが、企業内管理の今一つの大きな柱となるのであります。そこでロータリーは、この不信感除去のために幾つかの原則を立てているのであります。これについては次回から順次申し述べます。

11.『企業内管理論』その2

前回申し述べましたように、企業を構成する役員と従業員という二つの人脈集団は、お互いに強い不信感を持っているため、これが企業の発展に大きな阻害要因となるので、ロータリーは、この不信感除去のために幾つかの原則を立てているのであります。

先ず第一に『経理の公開』があります。

企業を機能的に見て、従業員が企業の役割を分担しているとの意識を育てるためには、企業の経理の公開を避けて通ることはできません。

企業の年間の売上総額、経費総額、人件費総額その他企業の財政面を構成する諸要素が明らかにされなければ、客観的な規準を立てることができませんから、企業経営のための役割を分担しているとの意識は、従業員に育つ筈がないのであります。

社長の意識の中に、『自分が資本を投下して出来上がった会社だから、この会社は自分のものである。したがって、儲かったものも全部自分のものである。しかし、社員も手足として働いてくれたから多少の給与は出しておこう』というような意識が少しでもある間は、従業員の役員に対する不信感は拭うべくもないのであります。

たしかに、当初、社長の資本の投下はあったでありましょう。しかし、社長一人で会社は運営できないのであり、従業員なくして企業の今日を迎えることはできなかった筈であります。

社長は、社長職という一つの役割を預かっているに過ぎないのであります。会計職の役割は、通常、従業員が分担しますから、例えば、社長が不当な機密費を使ったりすると、社長と従業員との信頼関係は破綻します。役員は、不正な金を受けとって何が失われるかを考えなければなりません。

第二に『公租公課』の問題があります。

ロータリーは、個人の中に国家が宿っていると考えます。これがロータリーの国家観であります。これは、ヨーロッパ大陸法に対立する英米法の国家観に基づくものであります。したがって、国家経費の負担部分は、一人ひとりの個人が負担して、初めて国家が成り立つという立場をとります。したがって、節税は自由でありますが、脱税はしてはなりません。税金は誇りをもって納めるべきであり、そのことによって、従業員の役員に対する信頼度が増すことになるのであります。

なお、節税は、会計士、税理士等専門家に任せるべきであります。何故ならば、素人が節税すると、解釈の誤りから脱税になることがあり、心ならずも名誉が傷つくことになるからであります。

12.『企業内管理論』その３

前回は、企業には役員と従業員という二つの人脈集団があり、それがお互いに強い不信感を持っているため、それを拭い去るための原則として第一に経理の公開、第二に公租公課の原則を採り上げました。そして、第三の原則として『適正賃金論』があります。

実は、中世ヨーロッパの神学者が、一定の労働の投下量を適正な賃金に換算するための原則を模索して10年間議論し、何等の結論も得なかったと謂われています。これは絶対的な適正賃金論などというものは有り得ない、ということを物語るものであります。

結局、社会の一般相場を頭に入れて、相対的に満足して行く他はありません。春闘に際して、賃金をあまりに安く叩いてしまうと、相手が裏切る権利を持つことを忘れてはなりません。従って、ロータリーの倫理運動の視点からすれば、売買契約と同じく、労働契約においても、労働と金銭（賃金）との交換と同時に、満足と感謝という目に見えないものの交換がなければならないのであります。

そこで、適正賃金を算出するためには、先ず、『経理の公開』を前提として、企業の所得というものを誰の目にも明らかにしておかなければなりません。ここから適正賃金論が出てくるのであります。そして、国家の取得分を先ず控除して、その残りを関係者にどのように配分するかの問題となるわけであります。つまり、自分達が稼いできたものの中から適正賃金を割り出す以外には手がないのでありまして、絶対的な適正賃金論などと言うものは存在しないのであります。

非常にユニークなロータリー的な適正賃金の決め方の例を紹介しておきます。

この会社では、社長の諮問機関としての給与決定委員会が毎年度、社員の給与体系を作り、社長に答申する形式によって賃金が決定されるのであります。 給与決定委員会は、入社後３年未満、３年後６年未満、６年後９年未満という具合にして社員を６段階に区切り、各段階から選挙によって２名が給与決定委員に選ばれ、合計12名よりなる委員会が知恵を絞って自主的に給与体系を作り、社長に答申することになるのであります。社長は、その答申案に署名して、その年の給与体系が確定するのであります。実は、今までに社長が答申案を修正したのは、石油ショックの後に１回だけだったと謂うことであります。勿論、この適正な給与体系を作るためには、企業経理の完全公開が基本前提となっています。したがって、このロータリアンの企業内管理は、ロータリーの倫理運動の視点からみて誠に見事なものであると謂うべきであります。

何はともあれ、経理は公開しなければなりません。その副次的効果として、労働組合対策も円滑に行くことになるのであります。

13.『企業内管理論』その4

前回は、ロータリアンが自分の企業を如何に管理すれば、強靱な体質の企業に育てることが出来るかについての第三の原則として、適正賃金の原則を話しました。そこで、今回は、第4の原則として「利益の適正分配」の話をします。

これは、企業が儲けてきたものを企業関係者にどのように配分すべきかという問題であります。通常一般の考え方は、企業の総売上高から、先ず公租公課（即ち、税金）と人件費その他の諸経費を控除して、その残りを三つの分野に配分するという考え方であります。即ち、

第1に、会社があって利益を生むことができたのでありますから、会社の内部留保として資本準備金・利益準備金等の準備金を積み立てます。

第2に、役員の働きによって企業は利益を生むことができたのでありますから、役員報酬を支払います。

第3に、会社のオーナーである株主に配当金を支払います。

このようにして、企業の儲けて来た利益は適正に配分されていくのであります。これが従来から一般に行われている利益の分類法であります。これを三分類法と謂います。

ところが、ロータリーは企業を機能的に見る機能論的視点から、

第4に、従業員にも特別賞与を支払うべし、と説くのであります。(四分類法)

その理由は、企業を機能論的に見ますと、企業を構成する全ての人達が、それぞれ自分の役割を果たすことによって、初めて企業は利益を生み出すことが出来たのでありますから、利益を生み出した原因となった全てのところへ利益を還元しよう、と謂うのであります。これは、まさに仏教の因縁論に基礎をおいた東洋的な発想であります。そうだとすれば場合によっては、『お客様』にも利益を還元する場合があってもよいということになります。

この考え方は、現代では、ピーター・ドラッカー辺りの考え方に似ていますが、実は、1908年シカゴロータリークラブに入会し、ロータリーの哲人と謂われたアーサー・フレデリック・シェルドンの考え方なのであります。彼は、既に20世紀初頭の時点において、この理論を説いていたのであります。

但し、この利益の四分類法を現実の経営に適用する際に、一点注意すべきことは、従業員の給与は、経費控除の段階において既に支払われているのでありますから、これを利益分配の段階において更に支払うときには、会計処理上の問題があるので、公認会計士、税理士等の専門家に任せるべきであります。

14.『企業内管理論』その5

企業内管理の原則の第五に『従業員の自主管理権の確立』という問題があります。

この問題を制度化したものが労働組合であります。凡そ、企業組織体と言うものは、役員と従業員という利害関係の対立する二つの人脈集団によって構成されていまして、企業は両者によって守られなければならないのでありますが、両者の間には基本的な不信感があるのであります。特に、従業員から役員に対する不信感が強いのであります。

実は、このことが企業組織体を発展させるのに大変なマイナスになるのでありまして、労働組合との団体交渉においても無駄な労力と時間を費やすことになるのであります。

そこで、この不信感をどのようにして払拭すればよいのかと謂いますと、それには、従業員内部の問題は、先ず従業員の自治的な討議に任せることであります。

例えば、作業開始前の準備時間だとか、社内におけるマナーなど、従業員内部の組織管理の問題については、従業員側に一切任せた上で、従業員の代表者と役員とが絶えず腹を割って話をするような管理体制を組めばよいのであります。

要するに、労働組合のない場合は、従業員の自治意識を高めて、彼等の自主管理権を認めることであります。労働組合対策は、この延長線上の問題なのであります。

ところで、労働組合というものは、労働者が経営者に対して戦いを挑むという姿勢を法律が保障しているものでありますから、経営者としては誠に不愉快なものであります。

ただ、労働組合運動というものは、経営者に対する争いの形をもって、自分達の主張を叩き付けてくるという方式(Formula)をもった一つの運動でありまして、彼らが口で喋っていることと、心で思っていることとは違うということ、つまり労働組合との諸々の交渉は、一種のセレモニーでしかない、という関係が出来上がれば、労働組合対策としては成功であります。したがって、経営者と従業員との間に心が通い合っているか否か、ということが肝心要のところであります。そして、これは、一にかかって常日頃の役員と従業員との人間関係によって決まることでありまして、心が通い合っておれば、言うことは厳しいことを言っていても、心の中ではそうは考えていない、というのが労働組合運動の本体なのであります。

この点を読み取りますと、労働組合対策というものは、簡単なことだとは言えないまでも、それほど苦慮することもないのではないかと思うのであります。ただ、あらゆる制度には濫用がありまして、上部団体に対する団交委任だとか、イデオロギーの問題などが入って来た場合には、軽々しくは言えないのでありますが、役員と従業員との間に心が通い合っているか否かにより、その結果は大違いなのであります。

15.『企業内管理論』その6

企業内管理の重要な問題の一つに労働組合対策があります。例えば、或る有名な書店の場合、歴代社長は、悉くロータリアンであるにも拘らず経理の公開をしません。機密費は乱費し、社長の役員報酬として莫大な金額を計上しました。そこで、労働組合が硬化し、経営者と従業員との心が通い合っていないばかりに、黒字倒産をしてしまいました。その社長は『ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり』などと言っているのでありますから漫画にもならない話であります。要するに、常日頃、従業員の自主管理権を認めて、従業員の代表者と話し合っていることが肝要なのであります。

そして『良質な労働を受け取るべし、恨みのある労働を受け取るべからず』ということを常に心に留めておかなければなりません。ロータリーは、労働組合を作れとも、作るなとも言っていないのであります。労働組合があればあるように、無ければ無いように、ロータリーは、これについての十分な対応策を持っているのでありますが、その対応策というものは、『従業員の自主管理権の確立』という考え方を基にして作られているのであります。したがって、従業員に、企業経営の主体的な担い手としての自覚を持たせるように、役員の方でこれをリードして行け、ということであります。これは、法律論ではなく、倫理論であります。倫理運動としてのロータリーの考え方であります。

パーシー・ホジソンの『奉仕こそわが努め』の中に出ている警備保障会社の事例を紹介しておきます。この会社は、泥棒が入らないように予防することを主たる目的とする会社でありますから、原理的には、泥棒の経験者の方が泥棒の心が判るので、警備保障会社の社員としては適格者なのであります。したがって、そのような人達を採用して、どのようにして正業の中に立ち戻らせるかということが役員の頭の使い所であります。 そこで、彼等の職務上のトレーニングやこの会社の社会的な使命についての教育というものを、泥棒の経験者である指導者に任せたところ、非常に立派なものを作ったと謂います。そして、その警備保障会社の従業員の中から事故がでることがなくなった、つまり、事故の防止を、従業員に『自主管理権』を与えることによって解決したのであります。したがって、人間は、疑えば切りがない反面、主体性を育てると、これまた切りがないのであります。泥棒の経験者でも会社の立派な担い手になり得るのであります。昔、東京大学出身者が泥棒をしたと謂って新聞種になったことがありましたが、逆に言えば、泥棒でも東大に入れるということであります。以上を要するに、この自主管理権確立の思考の延長線上に諸々の従業員対策を考えるべきであります。

16.『企業内管理論』その7

企業内管理論の問題の最後に『Human relation』の問題があります。この問題については、先ず『法律論』の視点に立てば、従業員と会社との契約は、会社に対して一定の時間で区切られた労働を売って、その対価としての賃金を受取るという内容であります。これに対して、役員と会社との関係は、時間で区切られた労働を売るものではありません。逆に謂えば、役員は24時間勤務であります。四六時中企業経営のことを考えていなければなりません。つまり、役員にとっては時間で測られた労働の量の問題ではなく、労働の質が問題なのであり、別の言い方をすれば、役員は、Ideaを売るのであります。ところで、民法第 623条は、雇用契約について、『雇傭ハ当事者ノ一方カ相手方ニ対シテ労務ニ服スルコトヲ約シ相手方カ之ニ其報酬ヲ与フルコトヲ約スルニ因リテ其効力ヲ生ス』と規定しています。

これは謂わば、労働力の売買であります。時間と労働とを一定額の金銭（賃金）と交換するのでありますから、朝8時に出社して午後5時に退社すれば、それから後は、個人の自由に委ねられた私生活の時間であり、それは最早、経営者が介入すべき筋合の分野ではありません。原則的には企業の懲戒権も及ばない分野であります。したがって、退社後に遊び過ぎたり、酒を飲み過ぎたりして、翌日二日酔いの状態で出勤し、まともな仕事が出来なくても、午後5時まで会社に居れば、給料が貰えるのであります。

要するに、法律論では、労働の量は規制することは出来るとしても、労働の質まで規制する事はできないのであります。

しかし、従業員だからといって、労働の質を度外視することはできません。これを野放図に放置すると、良質な労働を提供できない結果、企業の発展にとって重大な阻害要因となることは明らかであります。したがって、会社に居る時間も、退社後の時間に生き甲斐を与えるような労務管理を行い、退社後の自由時間も、翌日の労働のエネルギーになるような使い方を開発することが必要なのであります。したがって、退社後の時間は従業員の自由時間ではありますが、その大眼目は、翌日の労働の再生産のエネルギーになる時間帯であることが望ましいのであります。そこで、退社後の時間は、経営者とは無関係である（これは法律論）、というのではなく、例えば、夜学に通う若い従業員が居れば、これを励ましてやり、場合によっては奨学金を出してやるとか、花嫁修行の女子社員には、茶道や華道を習わせるとか、人生相談をして精神衛生の問題を解決してやるとか、団体旅行をするとか、色々と肌理の細かい配慮をして、従業員の心を常に経営者と同じ次元においておく必要があるのであります。

17.『企業内管理論』その8

前回は、ロータリアンが自分の会社を如何に管理するかについて、会社に居る時間も、退社後の時間に生き甲斐を与えるような労務管理を行い、退社後の自由時間も、翌日の労働のエネルギーになるような使い方を開発することが必要であり、退社後の時間も従業員の自由時間ではありますが、その大眼目は、翌日の労働の再生産のエネルギーになる時間帯であることが望ましいのであり、そこで、退社後の時間は、経営者とは無関係である（これは法律論）、というのではなく色々と肌理の細かい配慮をして、従業員の心を常に経営者と同じ次元においておく必要があるということを申し述べました。要するに、会社は、従業員のプライベートな行動を育成するための出費を惜しむべきではありません。従業員に対して、絶えず貸し方になっている社長でなければならないのであります。実は、これが、労働組合対策についても影響するのであります。

また、このような配慮による人間関係が育成されていると、例えば、レイ・オフの場合などに、従業員が『社長、苦しい時はお互い様だから、私は暫く他社で働いています。状況が良くなったら、また呼び戻して下さい』と言って、快くレイ・オフに応じてくれることにもなるのであります。これは、法律上の雇用関係は切れても、心の雇用関係は切れないということを意味するものであります。これがロータリーが倫理の世界にある所以であります。

ところで、一所懸命に従業員を育てても他社に引抜かれてしまう、何度育てても引抜かれてしまうから、従業員を育てることを止めたと言う人がいますが、そのように考えるのではなく、企業というものは社会の教育機関である、という自覚を持つべきであります。引抜いた方から、『さすがはあの会社が育てた従業員だ』と言われるようにならなければならないのであります。このように、社員を育てること自体が、職業を通じて世のため人のための奉仕になる、という自覚を持つべきであります。

要するに、企業内管理論は全て質に関する思考であり、量の問題ではありません。そして、つまるところ、全て不信感除去論であります。常日頃、絶えず『貸し方』になっている社長であるべきであります。したがって、従業員管理の要諦は、感謝し、慰労し、激励するということに尽きるかと思うのであります。

以上において、ロータリアンの企業管理の原理と実践の世界を概観してきたのでありますが、今の経済の格差社会における企業管理の実態を見るとき、原理的に暗すぎる、と思うのであります。かの文豪ゲーテは臨終に際して『暗すぎる。もっと光を』と言いました。私はロータリアンの企業管理に『もっと光を』と言いたいのであります。

18.『アッセンブリーとフォーラム』その1

最近、アッセンブリーとフォーラムの概念が正確に理解されていないようにも思われますので、念のため、それぞれの概念を説明しておきたいと思います。

先ずアッセンブリーAssembly（協議会）には4種類あります。即ち、Club Assembly、District Assembly、International Assembly、そしてConvention Assemblyであります。

1. International Assembly国際協議会

これは、毎年2月頃、世界中のガバナーエレクトが一堂に会し、RI会長エレクトからRIテーマ及び次年度のRIの活動方針並びにガバナーとして色々の情報を聞き、次年度の運営方針を協議する会合であります。

2. District Assembly地区協議会

これは、国際協議会から地区に戻ったガバナーエレクトが国際協議会で受けてきたRIの情報を地区内のクラブの代表権者である会長・幹事に伝え、次年度の地区内の各部門の活動について協議するものであります。

このようにして、当初、エヴァンストンから発信されたRIの情報が国際協議会から地区協議会そしてクラブ協議会を経てクラブの一般会員へ伝達されて行くのであります。これが、RIの基本的な情報の伝達システムであります。

ただ、近年、日本では、会長・幹事のほかにクラブの重要部門の委員長も招集していますが、これは原理的には正しくありません。何故かと言いますと、RIの会員は各クラブであり、クラブの代表権者は、会長・幹事でありますから、RIの組織である地区協議会は、RIの代表権者であるガバナーとクラブの代表権者である会長・幹事が協議する場だからであります。日本のこの慣例は、会長・幹事が地区協議会で聞いてきた情報をクラブ協議会で各委員長に伝達するのが本来のあり方であるにも拘わらず、各委員長に直接RIの情報を伝達することになり原理的ではないのであります。

3. Club Assemblyクラブ協議会

これは、クラブ会長以下クラブの役員と各委員長が一堂に会してクラブの運営と活動について意見を交換する会合であります。したがって、一般のクラブ会員は同席しませんから、クラブフォーラムとは異なるものであります。

この会合のメインになる情報は、会長・幹事が地区協議会でガバナーから聞いてきた情報でありますが、それ以外にも副次的な情報について意見を交換することもあります。Club Assemblyは、年間2回乃至4回開かれるものであり、年度初めは新年度の運営と活動について、年度途中は今後の運営と活動及び過去の実践について意見を交換するものであります。したがって、この会合は、あくまでも意見交換の場であり、クラブの意思を決定する決議機関ではありません。決議権は、理事会及び総会に専属しているのであります。

19.『アッセンブリーとフォーラム』その2

フォーラムには、2種類あります。即ち、Forum on the Club levelとIntercity General Forumであります。前者は、我が国では「クラブ単位のフォーラム」と呼ばれ、後者は、これを翻訳しないで、その頭文字を採って略して、I・C・G・Fと呼んでいました。これは、近接する二つ以上のクラブが集まって討論の機会をもつ会合、所謂「都市連合Forum」であります。これがその後、Intercityは一字であるとしてI・G・Fとなり、更にこれが現在のI・M即ち、Intercity Meetingになったのであります。したがって、現在のI・Mは、本来フォーラムなのであります。このことを忘れてはなりません。

クラブフォーラムは、各クラブ毎に行われるものでありまして、四大奉仕部門即ち、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕及び国際奉仕の四部門を別々に、そのフォーラムのテーマとして、日を別にして開催されることが原則とされています。これが、Intercityと違って、Generalという文字を使わない所以であります。したがって、各クラブは、1年に少なくとも4回のフォーラムを開催することが望まれているわけであります。

このフォーラムを開く目的は、会員に公開された討論Discussionによって、そのクラブの存在する土地に相応しい各部門のサーヴィスが、どのようになされなければならないか、ということについて、ロータリーの運営の分野に関してよりよき知識が与えられることであります。

これには、クラブ全員が出席することが要請され、ことに当日のテーマの部門に属する委員及び新入会員は、洩れなく出席するように会長・幹事は努めるべきであります。 このフォーラムは、夕刻に食事も取って、十分時間をかけて討論を行うものであり、場所は、例会場が最も望ましいのでありますが、都合が悪ければ、食事も出来、参会者を十分収容出来る場所を探さなければなりません。

フォーラムリーダーは、当日のテーマとなるサーヴィス部門に精通した会員、即ち、委員長またはロータリー経験の深い会員がなるべきであり、もし、クラブに適任者がいない場合は、近隣クラブの適当と思われる人に依頼してもよいことになっており、このリーダーを選任する任務は、その日の討論される部門の委員会の仕事となっているのであります。

フォーラムのやり方は、要は、一人が長い間喋らないようにして（長広舌は禁物）、会員皆が参加して、平等に発言の機会を持つことが必要であり、リーダーはこの点に特に注意しなければならないのであります。

【ロータリーにおけるリーダーシップ】

2007.7.14　RI.2680地区情報委員会主催セミナー　神戸国際会館9F

地区研修リーダー　深　川　純一

今日は「ロータリーにおけるリーダーシップ」というテーマを頂いております。そこで、どのような切り口でお話しようかと考えたのでありますが、昔、19世紀のケンブリッジ大学の法史学の泰斗フレデリック・メイトランド教授が「我々が歴史を学ぶのは、単に過去を追憶するためではない。過去に学ぶことによって現在を正しく認識することが出来る。そして、過去・現在の正しい認識を踏まえて初めて未来を正しく展望することが出来る。したがって、歴史を学ばないものは現在及び未来を語る資格はない」と断言していることを踏まえて、ロータリーにおける歴史を学ぶことの重要性という視点から、先ず、日本の初期ロータリーにおいて偉大なリーダーシップを発揮した人達を紹介し、その後でリーダーシップの原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。

先ず、ロータリーでは、職業を専門職業professionと実業businessに分けていますが、ロータリー創立当初、ロータリーの世界でリーダーシップを執っていたのは、実業家でありました。シカゴクラブの創立当時、創立者ポール・ハリスは、弁護士・professionでありましたが、その他の３人は皆businessでありました。

その後、入会した人も、アーサーF・シェルドン、B. F. Collinsのようなbusiness manでありましたし、1923年のGuy Gundakerも弁護士ではありましたが、後にレストラン経営というbusinessに身を投じています。

これら多くのbusiness manが、職業の倫理を提唱し、職業奉仕の原理を開発していったのであります。

この点は、日本のロータリーにおいても全く同じであります。日本ロータリーの創立時の会員は、professionでは弁護士の宮岡恒次郎ただ一人で、そのほかは米山梅吉以下殆どbusiness manでありました。

殊に、昭和３年から昭和14年に至る戦前の７人のガバナーをも見ても、professionは、北大の総長佐藤昌介ただ一人であり、あとは米山さん以下全てbusiness manであります。これらbusiness　manが日本の戦前のロータリーにおいてリーダーシップを発揮したのであります。就中、これら７人の内でもリーダーシップにおいて断然優れていたのは最初の４人、米山、井坂、村田及び朝吹の各ガバナーでありまして、いずれもbusiness manでありました。

今、これら７人のガバナーの地区管理時代を顧みますと、

1. 昭和3. 4. 5年　３期連続
   米山梅吉　東京ロータリークラブ
2. 昭和6. 7年　２期連続
   井坂　孝　横浜ロータリークラブ
3. 昭和8. 9年　２期連続
   村田省蔵　大阪ロータリークラブ
4. 昭和10年　１期
   朝吹常吉　東京ロータリークラブ
5, 昭和11年　１期
   佐藤昌介　札幌ロータリークラブ
6. 昭和12年　１期
   里見純吉　大阪ロータリークラブ

7. 昭和13年～14年　1期

松本健次郎　門司ロータリークラブ

国際ロータリー第70地区の日本全体が一地区の管理はこれで終わるのであります。これ以後は、日満ロータリークラブ連合会の話に入っていくことになりますが、この7名のガバナーの地区管理を概観しますと、当然のことながら、出来不出来があります。

この中で、リーダーシップの視点から見て、断然優れていたのが、最初の4人、米山、井坂，村田及び朝吹の4ガバナーでありました。この4人は、大変重要な影響を日本ロータリーに残したと言えます。したがって、この4人について先ず紹介しておきたいと思います。

就中、ロータリーの思想の系譜の場面において、鮮やかな思想的対立を見せたのは、初代ガバナー米山さんと2代ガバナー井坂さんでありました。

米山梅吉ガバナー

昭和3年から昭和6年にかけて3期連続してガバナーを務めました。しかも、初代ガバナーであると同時に大正13年から15年にかけては、当時、日本には未だ地区がなかったので、初代スペシャルコミッショナー（準ガバナー）としても2期連続務められたのであります。

ガバナー3期連続、スペシャルコミッショナー2期連続、これほどのリーダーシップを発揮した人は、米山さんをおいてほかにはありません。まさに古今未曾有であります。

ただ、米山さんは、初代ガバナーであったがために、地区管理については只管隠忍自重、妥協を強いられたガバナーでもありました。したがって、ガバナーとしては、大した業績を残していないのであります。

しかし、大正13年時点において、既にロータリーについて深い理解を示していたのであります。米山さんの有名な著書に【常識関門】というのがあります。 何を説いたかと謂いますと、『科学技術の発達した現代社会において、技術を使うのは人間である。したがって、その技術を使う人間の心の問題が今日の教育に欠落している。これは危険である』と言うのであります。この考え方は、現代の日本においても、まさに金言であり、肝に銘ずべきものであります。

例えば、裁判においても、心の温かい裁判官が裁くと暖かい解決が出来ます。ところが、同じ法律を適用しても、心の冷たい裁判官が裁くと冷たい結果となります。したがって、法律家として、法を社会の幸せを保障するために運用するには、その人のパーソナリティが暖かくなければならないのでありますが、大学の法律学は、パーソナリティを暖かくすることまでは教えないのであります。したがって、倫理の裏打ちのないパーソナリティは危険であるというのであります。

米山さんは、大正13年時点で、既にこの心の問題を指摘していたのであります。私達が今日の頽廃した倫理問題・教育問題を考えるとき、肝に銘ずべきことだと思うのであります。

【常識関門】の常識とは、パーソナリティの中に育つ豊かな知性のことを【常識】と呼んだのであります。したがって、所謂【常識】と謂うよりは次元の深い思索でありまして、むしろ【良識】と呼んだ方が適切であると思うのであります。

『職業人に科学技術の元になる【良識】を涵養させるところ、これがロータリークラブである。したがって、君達は、いつかはロータ

リークラブに入って心を磨くべきである』と説いたのであります。

『ロータリーの例会は、人生の道場である』と言う米山さんの言葉は、実は、このような深い意味合いを持った言葉であると謂うことを理解しなければならないのであります。即ち、ロータリーの第一義は、心を磨くことであり、例会は、そのための道場であると謂うのであります。

ところで、米山さんの著書に【新隠居論】というのがありますが、長井盛至著【米山梅吉と日本のロータリー】から【新隠居論】の内容を抜粋しますと、

米山さんは、『人間は功成り名遂げた時は、いち早く実業の世界から隠居すべきである。（今日的に謂えば引退すべきであるという意味であります）そして、残った人生（余生）を社会奉仕に身を捧げるべきである』と説いたのであります。これはリーダーシップを考えるときに忘れてはならない言葉であります。

そこで、米山さんは、56歳の時、三井銀行常務の職を辞し、日本草分けの三井信託を創立して社長に就任し、67歳の時、その職を辞しました。

そして、昭和９年３月、三井の同族から3,000万円という巨大な金額を出してもらって財団法人三井報恩会を設立し、67歳にして自らその理事長に就任したのであります。

これは、表向きは、三井全体の計画になっていたものでありますが、実際は、米山さん自身の発想であり、結局は、米山さんが中心になり、責任をもって運営されたものであります。まさに偉大なるリーダーシップの発揮であります。この会の目的は、日本の遅れている社会事業と文化事業の促進援助でありました。

その事業内容は、米山さんの決済したものだけで、合計3,922項目、昭和９年３月現在金17,535,066円であったと記録されています。

更に米山さんは、70歳の古希を迎えた時、全財産を投げ出して財団法人緑ヶ岡小学校を設立し、自らその校長に就任しています。そして、晩年、最後は破産に瀕したのでありますが、側近が『先生、そこまでしては駄目だ』と言って留めたと謂われています。

以上を要するに、米山さんという人は、世のため人のための奉仕に身を捧げた、謂わば社会奉仕真骨頂漢と謂うべき人でありまして、正に、自己犠牲の奉仕"Service,Not self"の世界に生きた人でありました。

ところで、米山さんは、先程申し上げたように、初代ガバナーとして、様々な妥協を強いられたために、ガバナーとしては、大した業績は上げていないのであります。即ち、

1. 公式訪問は、一切していません。
2. 地区協議会も一切開いていないのであります。
3. ガバナー月信は不定期に出しておられたようであります。
4. 米山さんの只一つの業績としては、昭和４年の日本における第１回地区大会　即ち、RI第70地区年次大会をやり直しさせたことであります。この大会のホストクラブは京都ロータリークラブでありました。

   地区大会は、国際ロータリー側即ちRI側の大会であって、クラブ側の大会ではありません。したがって、国際ロータリーの役員であるガバナーが主催者であり、大会の企画、立案、実施は全てガバナーの専権事項であります。

したがって、何故やり直しさせたのか、と謂うことは、推測する他ないのでありますが、米山さんの質素な生活態度を考えると、京都クラブは、おそらく、地区大会に芸者を呼ぶたぐいのことをやったのではないか、と思われるのであります。

大体、地区大会というものは、ガバナーによって色々な味が出てよいのであります。或るガバナーは親睦に重点を置く。また、或るガバナーは、討論に重点を置く、と謂うように色々あってよいと思うのでありますが、ただしかし、最近の地区大会は、金を使いすぎるように思います。これでは世間の誤解を招くと思うのであります。

5. それから、昭和5年の地区大会で、満州の大連ロータリークラブの古沢丈作氏など素晴らしいロータリアンを紹介して、感銘深いスピーチをしています。リーダーは、人を惹き付けなければなりませんから、これもリーダーシップの重要な要素であります。

ところで、神戸クラブの直木パストガバナーの手紙によりますと、米山さんがロータリーをよく理解していたことは、国際ロータリーにおいても認められていたのでありまして、そのことは、1926年（大正15年）日本に未だ地区のない時代に、既に国際ロータリー理事（RI理事）として1年間就任していることでも明らかであります。

元来、RI理事というのは、ガバナー経験者即ち、パストガバナーの中から選任されるのでありますが、米山さんは、ガバナーにもなっていないのにRI理事に選任されているのであります。このようなことは、今日では絶対に考えられないことであります。

米山さんの臨終については、佐々木邦著【米山梅吉伝】によりますと、

長女の愛子さんの話では、米山さんは、自分の終焉の近づいたことを覚った時、自分の生涯について御礼を言いたいから一寸起こしてくれ、と言われ、床の上に端座して、春子夫人初め一同に御礼の言葉を述べられました。そして、暫く黙祷を続け、それから、少し眠るからと言って横になったまま永遠の眠りに入ったと謂われています。見事な大往生でありました。

なお、米山さんが創立した緑ヶ岡小学校は、その直前の3月20日、青山学院に移管され、同時に米山さんは校長を辞任しています。生涯の最後まで、人を育てる『教育の世界』に献身された人でありました。

ところで、法脈という言葉があります。この言葉は、元来、禅の世界の言葉であります。（血脈に対する言葉）。本来は禅の世界で一人の師から一人の弟子へ印可が授けられていく「始祖単伝の法」による思想継承の意味であります。

第一祖達磨から始まって、第二祖慧可、第三祖僧燦、第四祖道信、第五祖弘忍、そして、第六祖慧能の南宋禅が日本に渡来して、道元禅師はじめ日本の禅の系譜が始まるのであります。

そして、日本の代々の祖師は自分の後継者を育てるために、殆ど一生をかけて心血を注いだのであります。何故か。それは、法脈を守るためであります。法脈が途絶えることは祖師として最大の恥であったのであります。

法脈は、禅の世界に限らず、大学、企業、歌舞伎等の芸の世界そして家庭にも軽度の法脈はあります。ロータリーにも法脈はあるの

であります。したがって、ロータリーのリーダーも後継者を育てなければなりません。米山さんの思想の後継者に万代順四郎さんがおられます。これは米山さんの法脈を継いだ人であります。

万代順四郎さんは、青山学院の出身であり、明治40年、三井銀行に入社して、初めて米山さんの知遇を得た人であります。そして、米山さんが亡くなるまでの40年間に亘って終始特別の愛顧を受けた人であります。

戦後、三井銀行が帝国銀行になったとき頭取となり、一方、青山学院の理事長にもなっておられます。

万代さんは、米山さんの一言一句の教えと愛情をよく汲み取り、出来るだけそれを身につけるように努力した人であります。

その結果、米山さんの人格が乗り移ったようになり、経済界、校友会、ロータリー等においても、米山さんの後継者の役割を果たされたと謂われています。

特に、母校青山学院へは、米山さんと同様に、財産の大部分を寄付して、匿名の奨学基金に当てておられたのであります。

万代さんは、米山さんの気持を完全に理解して、死の瞬間までよき伴侶でありました。したがって、米山さんは、子息桂三氏への臨終の言葉にも、

『父亡き後は、万代さんを鑑として世に処するように』と言い遺しているのであります。

万代さんの書いたものによりますと、米山家の中の空気は、静粛の中にも常に明るさがあったと謂います。

米山さんは、自身、家族の一員として努めておられたようであります。例えば、酒は好きだが、晩酌は一本にとどめ、食事は家族と同時に始めて、皆と一緒に食べるという具合で、生活は質素でありましたが、子息東一郎、駿二の両君が亡くなられてからは、一層質素になられ、その分、社会への奉仕に努められたと謂うことであります。

このように、リーダーたるものは、自分の後継者を育てることを忘れてはならないと思うのであります。

井坂孝ガバナー

昭和6年から8年にかけて2期連続のガバナーでありました。

この人は、東京ロータリークラブの第6代目会長であり、昭和6年（1931）横浜ロータリークラブ特別代表として横浜ロータリークラブを創立しました。

横浜の実業界から推されて横浜市の商工会議所会頭となり、事業面では、東京瓦斯社長の他十数社の社長、重役を勤めておられます。これまた素晴らしいリーダーシップを発揮した人でありました。

公益に尽くすことが大きかったので、嘗て2度にわたって、商工大臣、逓信大臣候補としての内交渉を受けましたが、固辞して立ちませんでした。米山さんと同じように、自己宣伝を避け、まさに陰徳陽報、隠れた博愛行為が頗る多かったと謂われています。

敗戦後、1949年3月、日本ロータリーが国際社会に復帰したのを見届けるかのように、1949年6月19日早朝、この世を去ったのであります。

井坂ガバナーは、日本ロータリーの地区管理をルールに乗せた人であります。

即ち、ガバナー月信を通じてロータリーの精神を解説し提唱しました。殊に有名なのは、1931年、昭和6年8月10日付けガバナー月信第1号であります。

『私は、日本全国のロータリークラブを管轄

するガバナーとして、ロータリアンが必ず守らなければならない3ヶ条を提示するので、拳々服膺せられたい』

と言って次の3ヶ条を提示したのであります。

第一に曰く、ロータリアンたるものは、約束を守るべし。

第二に曰く、ロータリアンたるものは、賄賂を贈る事なかれ。

第三に曰く、ロータリアンたるものは、徒に慈善事業に憂き身を窶す事なかれ。

この3ヶ条の内、リーダーシップとの関係で特に重要なのは、第一の約束を守るということであります。これは、ロータリアンは、皆職業人でありますから、契約を守ることを意味しているのであります。即ち、契約的正義の実現を説くものであります。契約を守るということは、ロータリアンの信用を確立し、リーダーシップを発揮する基本前提であります。しかし、近来、契約を守らないで恥じないロータリアンも出て来ました。

また、約束を守るということは、時間を守るということを意味します。時間は、万人の共有物であります。時間を守らないということは他人に迷惑をかけることになり、更に、自らの信用を失うことにもなります。したがって、ロータリーでは、時間を守るということが昔からの精神伝統になっているのであります。これは、ロータリアンであるための絶対条件であり、そこにロータリーの魅力があったのであります。

ところが、最近、例会に遅刻しても平然として、恥ずかしいとも思わない会員が増えてきました。このような人はリーダーとは謂えないのであります。

第二の賄賂を贈ることなかれ、というのは、賄賂の横行しない健全な取引社会と公正な自由競争社会の実現を説くものであります。親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起こります。

これは、自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、元より同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。そこで、ロータリーは、倫理運動の視点から、賄賂の授受を厳しく戒めているのであり、これは職業奉仕論の核にある大きな柱であります。

殊に、戦後は、昭和電工疑獄を始め、ロッキード事件その他贈収賄事件が後をを絶ちません。現代社会の倫理の退廃ぶりは誠に目に余るものがあります。したがって、この賄賂禁止の提唱は、道徳を守る人間を作る、倫理的な人間を作るというロータリーの倫理運動としての面目躍如たる場面なのであります。

第三の徒に慈善事業に憂き身をやつす事なかれ、というのは、弱者救済のために慈善事業はしなければなりませんが、それに憂き身をやつしてはならない、というのであります。即ち、

慈善事業は、ロータリアンでなくても出来ることであります。ロータリーの第一義は、ロータリアンの心を磨くことであり、それに基づく職業奉仕の実践によって、先ず、自分の企業をどのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に作り上げること、これが第一であり、その上で余裕があれば、慈善事業に手を出してもよいと謂うことでありまして、これは、あくまでも職業奉仕がロータリーの

第一義であることを説いているのであります。

これは、一つには、米山流ロータリーに対して井坂ガバナーが一矢を報いたものとも考えられるのであります。即ち、

米山さんの自己犠牲の奉仕"Service,Not self"の実践は、誠に厳しすぎたが為に実業活動が影響を受けることにもなりかねません。そこで、井坂さんはそれとの調和を求めたのであります。

しかし、米山さんは、何も弱者保護だけやればよいとは考えていなかったのであります。職業奉仕も大切な奉仕と考えていましたし、殊に、土屋大夢を財政的に援助したことなどは、文筆家への夢を捨てた事への償いの気持もあったのであります。

しかし、当時、井坂さんには、そのことは判りませんでしたので、米山さんに対して、このような反論をしたのであります。

もう一つは、井坂さんは、アーサーF・シェルドン流のロータリーの本質論をよく把握していたのであります。先ず、Guy Gundakerを学び、"Service,Not self"自己犠牲の奉仕というロータリー宗教論の境地に対する反省の中から、シェルドンの実業倫理主義の立場を提唱するに至ったのであります。

したがって、この点において、米山さんと井坂さんとは、共に偉大なるリーダーシップを発揮しながらも、ロータリー思想の面においては鮮やかな思想的対立を示したのであります。即ち、

米山さんは、"Service,Not self"のロータリー＝宗教論の境地に生きた人であり、井坂さんは、"Service above self"のロータリー＝実業倫理の世界に生きた人なのであります。井坂さんの論理は、ロータリーは親睦から出発し、親睦の効果としての職業の繁栄、職業奉仕が本質であり、それ以外の分野、即ち、社会奉仕、国際奉仕等異質なものには、あまり手を広げるべきではない、調和を乱すと言うのであります。つまり、親睦＝職業を重視し、それを乱さない限度で社会奉仕を考える、そこに調和を求めたのであります。

以上を要するに、井坂ガバナーの提唱は、職業奉仕を中心とするロータリー観の提唱であり、ロータリーの神通力は、実業の世界にのみ発揮せらるべきであると言い切っているのであります。そして、これが日本の戦前のロータリーの職業奉仕のバックボーンになり、職業奉仕の思想提唱について見事なリーダーシップを発揮していたのであります。

そして、この井坂ガバナーの提唱に甚く感銘したのが神戸クラブの直木太一郎さんでありました。したがって、ロータリー思想の系譜としては、A．F．シェルドン、井坂孝、直木太一郎という系譜を辿ることが出来ると思うのであります。

ただ、賄賂に関して特に注意すべき点が一つあります。例えば、賄賂を使わなければ生きて行けない業界があります。このような業界のロータリアンは、どのようにしてリーダーシップを発揮すればよいのでしょうか。

そこで、このような業界からロータリーに入った会員は、賄賂禁止の原則を知って悩むわけであります。即ち、

自分はロータリアンである。然るに、ロータリーには賄賂禁止の原則がある。したがって、自分は賄賂を使わない、と言って会社を倒産させてしまっては、何にもならないのではないかという問題であります。

しかし、ロータリーは、不可能を強いるものではありませんから、賄賂を使わずに倒産

せよ、とまでは言って居ない筈であります。これでは、ロータリーが面白くなくなります。したがって、そのようなときには、賄賂を使えばよいと思うのであります。

しかし、何の反省もなく堂々と賄賂を使うのでは困ります。賄賂を使わなければ生きて行けないこの業界は、改善しなければならないと心に誓い、そのための努力をしながら、やむを得ず使う賄賂でなければなりません。

そして、賄賂を使わないで生きて行ける公正な取引社会を自分の世代で実現できなければ、孫子の代まで申し送りながら、やむを得ず使う賄賂でなければならないのであります。

これが、私が従来説いて来た賄賂禁止論でありました。賄賂を使わないと生きていけない業界であるにも拘わらず賄賂を使わない、ということは、言うに易く、行うに難きものだからであります。

ところが、この行うに難きことを実行していた人が居ました。東京東ロータリークラブの佐藤千壽パストガバナーであります。

実は、昨年２月、私は、東京の第2580地区大会にRI会長代理として出席し、職業奉仕の話をしました。そのとき私は、今申し上げた賄賂の使い方の話をしたのであります。聴衆の反応も良く、一見パンチが利いていたように思ったのであります。

ところが、あとの懇親会で、佐藤先生から『深川先生、先程の賄賂の話は賛成できないよ。ロータリアンは絶対に賄賂を贈ってはならない。私は、今まで絶対に賄賂を使ったことはないよ』と静かに諭されました。私は、脳天に鉄槌を受けた思いでありました。

その後、先生が賄賂を使わないで生きて来られた職業奉仕の体験を知り、自ら深く恥じ入った次第であります。

このように、佐藤パストガバナーの職業奉仕は、その真髄を衝いた非常に厳しいものなのであります。

しかし、佐藤先生が、絶対に賄賂を使わないというそのような潔癖を押し通す限り、当然のことながら先生の会社の一つの事業部門の経営は赤字になりました。それどころか、そこまで苦労しながらも、万一、事故でも起こしたら、会社が潰れるほどの損害賠償を請求されることにもなります。

そこで、遂に、佐藤パストガバナーの会社の取締役全員が挙げてこの事業からの中止撤退を佐藤先生に要請してきました。

然し、佐藤先生には、必ずものになるという成算がありましたから、これも押し切って「赤字経営」を続けさせたのであります。これも「言うは易く、行うに難きもの」であります。

ただ、佐藤先生の考え方は、これは赤字とはいっても、本業の主力製品で十分利益を上げていますから、決して会社の死命を制するようなものではありません。これは、「健全なる赤字」であって、謂わば「創業時の開発費用」だと謂うのであります。

要するに、これは、１年間だけを見て損益を考えるのではなく、何年間かの期間を通じて損益を考える所謂「期間損益計算の考え方」であります。然し、その一定の期間持ちこたえられるだけの力が会社になければなりません。したがって、これも、職業奉仕の実践によって平素から企業に力を蓄えていなければならないことを物語るものであります。

要するに、佐藤先生は、無用の過当競争を避けて賄賂を禁止し、そして、営業の駆け引きで勝負するのではなく、製品の品質管理を

徹底して技術力で勝負するという姿勢を貫かれたのであります。これが物作りの生産会社においては正道なのであり、職業奉仕の真髄にある考え方なのであります。

まさに、ロータリアンのリーダーシップ発揮の面目躍如たるものがあります。

以上を要するに、井坂ガバナーは、ロータリー正統派理論を戦前のロータリーに持ち込んでリーダーシップを発揮した立派な人であり、この種本は、Guy Gundakerの【ロータリー通解】でありました。したがって、ロータリー通解の理論は、

第1に、東京クラブ創立の功労者福島喜三次さんから大阪クラブの名幹事露口四郎さんを経て関西系ロータリーへ伝えられ、第2に、井坂ガバナーによってアレンジされて、ガバナー月信によって全日本のロータリーへ伝わって行ったという思想の系譜を看取ることが出来るのであります。

村田省蔵ガバナー

昭和8年～10年、2期連続のガバナー。この人のリーダーシップは、米山さん、井坂さんとはまた違った色彩をもっています。

何故かと言いますと、村田ガバナーのロータリー理論は、忠君愛国的ロータリー理論だからであります。その特徴は二つの点に集約されます。

1. 第一は、ロータリーの日本化の提唱であります。これは、当時の軍閥の弾圧に対する対策論の意味もあったと思われますが、謂わば国粋主義的ロータリー理論を提唱したのであります。
2. 第二は、ロータリー拡大のスローガンの提唱であります。彼は、昭和9年の地区大会において全日本のロータリークラブに対して要請します。

『人口5万人以上の中小都市に1ロータリークラブを作るべし。もって、忠君愛国の拠点たらしむべし』と謂うのであります。

この拡大のスローガンの提唱によって、村田ガバナーの任期2年間で、一挙に14クラブが設立されたのであります。

この忠君愛国的奉仕理論というのは、プラス・マイナスはありますが、仲々面白いロータリー理論であります。即ち、これは、地域社会の延長線上に国家社会と謂うことを考えますと、或る時点までは正しい面を持っています。しかし、一旦、戦争になると、果たしてこの理論は妥当なものか否か疑問であります。例えば、日米戦争の場合に、アメリカのロータリアンを殺すことをもって奉仕の実践と謂えるか否か。即ち、この考え方からは、国際奉仕の概念が出て来ないのであります。

ところで、ロータリーの日本化の問題について村田ガバナーは、昭和9年にこのスローガンを掲げるときに、昭和3年に大阪クラブの土屋大夢が二宮尊徳の考え方を引用して発表した【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】というテーマの講演があるが、この考え方に戻れば、これ即ち職業奉仕の開発になる、と説いたのであります。

確かに、ロータリーには、バタ臭いところがありますので、この限りでは彼の提唱は、決して間違っていないと思うのであります。

また、昭和11年の第8回地区大会では、大連クラブのロータリー宣言を翻訳して、これをもって、国際大会で、綱領の改正を求めてはどうか、と謂う意見も出しているのであります。

ところで、ロータリー日本化の風は、西から吹いたと言われています。まさに大阪ロー

タリークラブの村田さんがそのリーダーシップを執ったのであります。即ち、東京ロータリークラブは、一等国の首都として、いち早くシカゴやロンドン等と肩を並べることを急がなければならなかったのでありますが、大阪ロータリークラブは、ロータリーを日本の社会へ同化させることに主眼をおいて努力していたのであります。

このように、東京・大阪それぞれの行き方の違いが現れていますが、何れをよしとする問題ではないのであります。

村田ガバナーは、ロータリーソングも英語のものではなく、日本人が作ったものを唄うべきであるという提唱をしています。これが実ったのが昭和10年のことでありました。

実は、昭和52年に直木パストガバナーから頂いた手紙によりますと、この提唱に原動力を与えたのは、実は、1914～15年度国際ロータリークラブ連合会会長であったFrank L. Mulhollandでありました。

彼は、昭和５年、神戸の地区大会にRI 会長代理として出席して曰く、

『私は、ロータリーは、あくまでも世界のロータリーであって、アメリカのロータリーではないと思う。したがって、アメリカナイズされるのには反対である。

今、英語でロータリーソングが唄われたが、何故日本語の歌を唄わないのか、と聞いたところ、日本語の歌では権威がない、と謂うことであったが、そのようなことでは困る。

私は、各国におけるロータリークラブが、それぞれその国の風俗習慣によって行われることを希望する』と。

Frank L. Mulhollandは、ロータリーの理論を説くについて、一頭地優れていたと謂われているだけに、流石であります。素晴らしいリーダーシップであります。

やがてその後、５年の歳月を閲して昭和10年、日本語のロータリーソングが生まれるに至るのであります。即ち、

昭和10年５月５日、京都朝日会館で地区大会が開かれ、823名が参加しました。未曾有の盛会であったと記録されています。

この大会において、京都・祇園の歌舞練場で東久邇宮殿下御臨席のもとに新作の日本語のロータリーソングが初めて発表されたのであります。

第１位は、【旅は道連れ世は情け、情けは人のためならず】
杉村広太郎作詞（東京）
吉住小三郎作曲（東京）
但し、この歌は、後に、著作権侵害の事実が出てきたので、ロータリーでは、唄わなくなりました。

第２位は、【奉仕の理想】
前田和一郎作詞（京都）
萩原英一作曲（東京）

第３位は、【平和を人の世に】
田崎慎治作詞（神戸）
早川弥左衛門作曲（名古屋）

第４位は、【我らの生業】
高野辰之作詞（東京音楽学校教授）
岡野貞一作曲（東京音楽学校講師）

また、ロータリーの日本化の問題としては、先程申し上げた土屋大夢（本名・元作）の【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】の翻訳があります。

彼は、古文書の研究をよくし、二宮尊徳翁の思想を引用して職業奉仕論を説いています。『田畑を耕すに先立って、先ず心の田畑を耕せ』と謂うような、日本人の胸にピタッ

と来るような奉仕哲学の解明をしたのは、戦前のロータリーにおける素晴らしい業績でありました。

彼は、【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】というテーマで英語の論文を書いて、昭和３年の第２回太平洋地域大会において発表しました。

その後、これを日本語に翻訳して、昭和９年の地区大会で、村田ガバナーが、ロータリーを日本の土壌に親しむように、この論文をもう一度、地区大会の中で取り上げるということを通じて、戦前のロータリアンの中に段々と浸透していったのであります。

村田省蔵ガバナーの人物像

「北村徳太郎随想集」の中に【村田さんの想い出】という随想があります。

『私が、村田さんを親しく知ったのは、確か昭和26年であったが、私が特に言いたいのは、清潔な財界人としての村田さんのことである。村田さんは、クリスチャンとしての道義性をしっかりと蓄えておられた。それでいて、決して野暮ではなかった。

何時からカソリックの信仰を持たれたのか、私には知る由もないが、その信仰に根ざす人生観や使命感が村田省蔵の人間観をあのように素晴らしいものにしたと思う。白梅の薫る村田さんの邸内で、白梅のように清楚なその人を追憶しつつ、敬慕の情は尽くすべくもない。』

このような文章を見ると、村田さんの国粋主義的ロータリー観を誤解してはならないと思います。あの戦時中のロータリー観は、軍閥の弾圧を避けるための多分に方便的なものであったと思われるのであります。

以上、ご紹介した米山、井坂、村田の３ガバナーについて、ある日、直木さんのお宅で聞いた話を紹介しておきます。

『平生釟三郎さんの話であったと思うが、戦前、アメリカでストリップが流行りました。この３人が、若いロータリアンに誘われたらどうするだろうか？と謂う話であります。

米山さんは、幕が上がったら、俯いて帰って来るだろう。

井坂さんは、もっとやれ、というだろう。

村田さんは、お前達のためにならんから、止めておけと言うだろう。』と。

この話は、３人の特徴をよく捉えた面白い話だと思うのであります。

朝吹常吉ガバナー

昭和10年～11年にかけて１期のガバナー。この年から１期ずつのガバナーとなりました。

父親英二氏は、中津の福沢諭吉先生を慕ってその門下生となり、そのお世話で福沢諭吉先生の姪と結婚したため、福沢先生の一族として、当時福沢先生の私有地であった慶応義塾の三田山上の一角に居を構えていたのであります。したがって、その子である朝吹さんの【常吉】という名前も、福沢先生が自ら命名したものであり、民主的な、また庶民的なことの好きな福沢先生らしい命名であり、吉の字は、勿論福沢先生の名前から一時頂戴したものであります。

ロータリーとの出会いは、どのようなことであったかと謂いますと、

朝吹さんは、父親の朝吹英二さんが三井の重役をしていましたので、ロータリーの創始者米山梅吉先生とは、朝吹さんも懇意にしていたのであります。

その米山さんから、『アメリカにはロータリークラブという社会に奉仕する大変よいクラブがあるので、日本にもそれを作ろうと思

うが、君も是非会員になってくれないか』と言われて、国際親善と社会奉仕は、朝吹さんの理想とするところでありましたから、大喜びで、チャーター・メンバーとして参加したのであります。

そして大正13年、親友である古川男爵に懇望されて、古川系の帝国生命の専務となり、その翌年社長となって、昭和18年辞任するまで会社の興隆に尽くしたのであります。

朝吹さんが帝国生命の社長時代、公私の区別を厳格にしたことはあまりにも有名であり、帝国生命が終戦後改称した朝日生命の会長藤川博氏の回顧文の中にも、

『一枚のハガキを投函するにも、社用のものは給仕に托されたが、私用のものは、必ず自分でわざわざメールシュートまで入れに行かれた』と述べられているのであります。

また、秘書をしていた斉藤政之助氏の文章には、

『朝吹社長は、潔癖すぎる位潔癖な人で、社長室には、1本別に私費で架設された電話があり、私用の際は必ずそれを使って、料金は自弁された。

また、ご自分の費用で自家用車を持たれ、会社の車にはお乗りにならなかった。世の中には、多大の私財を有しながら、会社の費用に便乗せんとする者の多いのを嘆いて、自らは潔癖を押し通された。

しかし、他の重役連には、能率と体面を保つために会社の車をあてがってやり，自分が出来るからといって、これを他に強制しようとはなさらなかったことは、如何にも尊いものであったと思う』と記録されているのであります。

誠に見事なリーダーシップであります。

次に、朝吹さんが、民間外交を推進されたことは、夙に有名であります。即ち、

朝吹さんは、大正の終わり頃、アメリカ人ヴォーリス氏の設計になる純洋風の家を建てて住んでおられたのでありますが、昭和15～16年、戦争で時局が険悪になるまでは、週に2～3回は自宅で晩餐の接客をしておられました。そしてその殆どが外国人でありました。

外国人客の種類も、ロータリー関係、テニス関係、会社関係等多種多様であり、大使・公使や音楽家達も多かったのであります。

先に述べた朝日生命の藤川会長の追憶文の一節を引用しますと、

『私が、会社から派遣されて欧米に留学したときのことである。アメリカのシカゴの街を歩いていると、路上で1人のアメリカ人に呼び止められた。

「お前は日本人か」というので「そうだ」と答えると、「自分は、最近日本から帰ってきた者だが、日本で一番楽しかった想い出は、ミスター朝吹に招かれて御馳走になったときのことだ。お前は、ミスター朝吹の名前を聞いたことがあるか？」と言う。

私が、「名前を知っているどころではない。ミスター朝吹は、私の会社の社長だ」と答えると、その人は、これは奇遇だと喜び、私をコーヒー店に誘い御馳走してくれた。

それから、ロサンゼルスへ行くと、またまた朝吹さんに御馳走になったというアメリカ人に逢ったのには驚いた…』

これと同じような話は、岩崎清七氏も経験されたそうであります。

岩崎さんは、余りよく知らないアメリカ人から非常な歓待を受けたのでその訳を聞くと、その人は「自分は日本で朝吹さんから手厚いもてなしを受けたので、そのお返しの意味

で、同じ日本人の貴方をもてなすのだ」と言ったそうであります。

このような朝吹さんも、寄る年波には勝てず、昭和30年３月10日老衰により77歳９ヶ月の生涯を閉じられました。

葬儀は、三越の社葬をもって青山斎場で行われましたが、朝吹さんの生前よりの堅い遺志により、供物、供花等は一切お断りした簡素なものであり、新聞にも、「花環のない葬儀」として大きく報道されたものであります。

さて、ロータリーにおけるリーダーシップに関連して、初期ロータリーの拡大について一寸触れておきます。これは朝吹さんの或る有名なエピソードに繋がっていく話であります。

先ず、日本のロータリーは、東京クラブと大阪クラブの二つの本家クラブを基点としてロータリーの拡大が始まるのでありますが、日本の第１分家クラブは、神戸ロータリークラブであります。スポンサークラブは大阪クラブであります。

次は、名古屋ロータリークラブであります。これは、東京クラブが大阪クラブに対抗してスポンサークラブとなったのであります。

その次は、京都ロータリークラブであります。このクラブの創立については、東京クラブと大阪クラブのどちらがスポンサークラブとなるかが問題となったのでありますが、京都は日本の古都である、万人のノスタルジアのあるところであると謂うので、米山さんの仲裁により、東京・大阪共同スポンサーと謂うことになったのであります。但し、ロータリアン名簿には、東京だけがスポンサークラブとして記載されています。

そして、最後に、横浜ロータリークラブが創立されました。

以上で、日本の６大都市には、悉くロータリークラブが設立せられたわけでありますが、しかし、この時点では未だ日本に地区というものがありませんでした。

そこで、大正13年から地区に準ずる取り扱いをするようになり、Special Commissioner（準ガバナー）を置くことになったのであります。

初代のSpecial Commissionerは、米山梅吉さんで、大正13年から15年まで２期連続であります。

二代目Special Commissionerは、井坂孝さんで、大正15年から昭和２年まで任期１年であります。

この時、日本のロータリアン達は、RIに地区大会に準ずる大会を開くことを要請しました。RIも、それは大変結構だということになりました。そこで、

1. 大正15年、大阪で第１回の準地区大会Intercity Conferenceが開かれています。Special Commissionerは米山梅吉さんであります。
2. 次いで、昭和２年、東京で第２回の準地区大会Intercity Conferenceが開かれました。Special Commissionerは井坂孝さんであります。
3. 次いで、昭和３年、横浜で第３回の準地区大会Intercity Conferenceが開かれました。三代目Special Commissionerは、後にロータリー解散時、文部大臣となった平生釟三郎さん、御当地甲南大学の創立者であります。

以上の３人のSpecial Commissionerのあと、昭和４年から日本に地区管理即ち、RI第70地区の管理が始まるわけであります。

ところで、この地区管理の始まる直前に、昭和３年に東京で第２回太平洋地域大会Regional Conferenceが開かれたことに一言触れておかねばなりません。

このRegional Conferenceと言うのは、国際ロータリーが不定期に開催する大会であり、第１回は、ハワイのホノルル。第２回は、昭和３年に東京。第３回は、昭和10年にフィリピンのマニラで開催されています。

ところで、この第２回太平洋地域大会Regional Conferenceのホストクラブは、東京ロータリークラブでありました。経費を試算してみると、当時の金で約200万円は必要でありました。大学卒の初任給が20円に満たない頃のことでありますからこれは大金であります。

当時は、団体奉仕の思考は未だ定着していませんでしたから、ロータリアン達は、漠然と個人奉仕を考えていたのであります。どのようにしてこの経費を捻出すればよいのか？

ロータリアン個人は大金持ちでありますが、クラブ自体には金はありません。しかも、米山さんは、入ってくる金を全て世のため人のために使ってしまいますから、金を持っていません。そこで、時の帝国生命社長朝吹さんの登場となるのであります。

朝吹さんは、皆が困っているのをみて、『私がその200万円を出しましょう。但し、一つ条件があります。私が金を出したことを金輪際口にしないことであります』

このようにして、朝吹さんのお陰で、太平洋地域大会は成功裏に幕を閉じることが出来、日本のロータリアンは面目を保つことが出来たのであります。これひとえに朝吹常吉の男気によるものであった、と記録に残っているのであります。では、金を出したことを金輪際口にしない約束が、何故公になったのか。実は、このことは、朝吹さんが亡くなられたお通夜の席でもう亡くなられたのだからと、供養のつもりで打ち明けられたと謂います。

ところで、朝吹さんは、米山さんとは非常に対照的な金の使い方をした人であります。米山さんは、入ってくる金を片っ端から世のため人のために使いましたが、朝吹さんは、ダムの水のように金を貯めておいて、ここぞという時に、ダムの栓を抜くように一気に使ったのであります。

しかし、両者に共通している点は、金を出したことを金輪際人に言わなかったことであります。この陰徳陽報の教えは、日本ロータリーの精神伝統になっています。このようにして、お二人とも日本のロータリーにおいて偉大なリーダーシップを発揮されたのであります。

米山さんは、『ロータリーは、隠れたところに仕事がある。それは、隠れているから妙味がある』と言っておられます。この言葉は、ロータリーのリーダーシップを考えるとき、心に留めておくべきことだと思うのであります。

以上で、ロータリーにおけるリーダーシップを考える参考として戦前の４人のガバナーのを紹介したのでありますが、次に、ロータリーにおけるリーダーシップについてその原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。即ち、

一般に、リーダーシップ＝指導性と謂うとき、それは、指導する者と指導される者という上下の関係として捉えられていますが、ロータリーにおける指導性というのは、会社のような縦型社会即ち、上下関係における指

導性ではありません。

ロータリーは横型社会でありますから、それは、ロータリアン全てを平等対等なものと見る社会における指導性＝リーダーシップを意味するのであります。

したがって、ロータリアン同士が平等対等であるのみならず、ロータリアンとクラブ会長との関係、クラブ会長と地区ガバナーや地区委員との関係も平等対等であります。そして、更に謂えば、ロータリアンと地区委員や地区ガバナーとの関係もロータリアンとしては平等対等なのであります。

何故なら、国際ロータリー即ち、RIの会員はロータリークラブであって、ロータリアン個人は国際ロータリー＝RIの会員ではありませんから、そもそも上下関係どころか何らの関係もないのであります。したがって、敢えて両者はどのような関係かと謂えば、やはりロータリアンとしては、お互いに平等対等だということになるのであります。

ただ、平等対等であることの意味を誤解しないように注意しなければなりません。例えば、元RI理事の今井先生に対して私達ロータリアンは、いつも友達のような気持や態度をもって接しています。しかし、私達は今井先生を心から尊敬しています。今井先生もまた、私達から信頼され、慕われています。ここが大事なところであります。これをロータリーにおける「徳の支配」というのであります。

ロータリーは、権力服従の縦型社会ではありません。時として、他地区の縦型社会の意識を持ったロータリアンは、今井先生に接する私達の態度を見て、あんな偉い人に対して何と慣れ慣れしい態度かと、異様に感じて驚くようであります。しかし、ロータリーが横型社会であることを考えれば、元来、そのような意識を持つ方がおかしいのであります。

ただ、一点注意すべきは、「親しき仲にも礼儀あり」と謂われるように、年長者に対する礼を失してはならないことは当然であります。

一般に、企業は縦型社会であると考えられていますが、ロータリーの企業に対する考え方は、そのような縦型思考ではありません。ロータリーは、企業を権限論的に見ないで機能論的に見るのであります。即ち、企業を構成員の役割の配分であると見るのであります。

例えば、企業には、社長、部長、課長、タイピスト、工員、運転手等々様々な役割を持った人達がいますが、それぞれが自分の役割を果たすことによって企業は円滑に運営されていくのであります。したがって、企業を構成している様々な人達のうち一人でも欠けると企業は円滑に運営されません。

このように企業を機能論的に見る限り、それは構成員の役割の平等な配分にすぎないのであります。このように企業を横型社会として見るのがロータリーの企業管理の要諦なのであり、その中核にあるのが「徳の支配」という考え方なのであります。

要するに、ロータリーにおけるリーダーシップというのは、縦型社会における権力による支配ではなくて、横型社会における「徳による支配」なのであります。

では、横型社会におけるリーダーとは如何にあるべきか。一つの事例を出しておきます。

昔、中国に「六韜（リクトウ）・三略（サンリャク）」という兵法書がありました。これは、源義経が鞍馬の山で学んだという兵法であり、相対性の原理を説く

相対主義の兵法であります。即ち、

用兵の術も情勢に応じて千変万化しなければなりません。つまり、こちらから仕掛けず、相手の出方に応じて動くべしと説くのであります。

「六韜」は、中国の周の太公望が著したという六種の兵法書、即ち、文韜、武韜、虎韜、豹韜、竜韜、犬韜の六書のことであります。

「三略」は、黄石公が著したと謂う上略・中略・下略の三書の総称であります。

この「略」というのは、戦略とか、駆け引きという意味であります。

そこで「六韜三略」というのは、これらの総称でありますが、これは、転じて、「虎の巻」、「秘密の術」、「奥の手」という意味があります。

因みに、受験参考書を「虎の巻」というのは、「六韜三略」の「虎韜」篇から出たものだと謂われているのであります。

さて、「上略」は、戦争前についての兵法。「中略」は、戦争中の兵法。「下略」は、戦争後の兵法であります。

「上略」に曰く、『柔よく剛を制す』と。これは戦前の兵法であります。戦争は、力だけでは駄目だよ。頭を使え。つまり、学者を大事にせよ、ということであります。これは知的戦略の大切さを説いております。

例えば、資本力が大きい者が勝つとは限りません。一時、造船業界は、大型ばかりにして中・小型の設備をなくしました。その結果は推して知るべしであります。

ロータリーも徒に拡大を求めるべきではなく、常に原理的反省を怠ってはならないと思います。私は、古き良き時代のロータリーの良質性を回復するためには会員の増強・ロータリーの拡大を止めて、逆に、今のロータリーの会員数を半分位にするべきだと思います。

曾て、神戸クラブの直木太一郎パストガバナー曰く、「今暫し拡大を止めて、今居るロータリアンの原石を磨くべき時ではないか」と説かれたことを忘れてはならないと思うのであります。

また、シュウマッファー曰く、"Small is beautiful"。それぞれ肝に銘ずべき言葉であります。

また、東京東クラブの佐藤千寿パストガバナー曰く、『最大となることを望まず、最良となることを望む』また曰く、『蟹は甲羅に似せて穴を掘る。大きくするより質を高めること、追求すべきは質であって量ではない。人生においては、「足るを知る」ことが大切、足るを知る者を富者と謂う』。更に曰く、『会社の価値は何によって計られるか。資本金の大きさではない。売上高の大きさでもない。利益の大きさでもない。社員数の多さでもない。その会社が、如何なる人を作ったかによって会社の価値は計られるのである』と。

この言葉は、佐藤パストガバナーが曾てガバナーの時の1974年度のRI会長ウイリアム・ロビンスの言葉『ロータリークラブの価値は、そのクラブが地域社会に如何なるプロジェクトを実施したか、如何に多額の寄付をしたかではなく、そのクラブが如何なる人を育てたかによって決まる。』という言葉と全く同じ境地にあるものであります。まさに金言であります。

「中略」に曰く、『美酒を献ずる者あり。皆で飲もう』と。これは戦時中の兵法であります。

昔、中国に百戦百勝、当たるところ敵無しの将軍がいました。その将軍が或る村に逗留した時、村人達が美味しい酒を将軍に献上し

ました。すると将軍は、その酒を自分一人で飲むのではなく、部下将兵に対し、「皆裸になって川へ入れ、そして上流からその酒を川に流せ、皆でそれを飲もう」と言ったのであります。

これは何を意味するかと言いますと、自分が貰った酒は、自分一人のものではない、お前達部下将兵全員のために貰ったものだから、自分一人で飲むわけにはいかない。したがって、自分も皆と一緒に酒の流れた水を飲もう、という意思表示であります。即ち、

部下将兵の心を掴む指導性＝リーダーシップの一つの事例であります。このような指導性＝リーダーシップによってお互いに心を通わせなければ戦いには勝てないよといこと、即ち、心の団結を説いたものであります。

したがって、例えば、病院の院長が患者から贈り物を貰った時、自分個人として貰ったものではなく、病院全体の代表者としての自分に貰ったのだという気持が大切であります。即ち、

これは従業員全体の財産Community propertyだと考えて、これを患者や従業員の福利厚生に還元するのであります。ここに用兵の術の根底があるのであります。これはロータリーのリーダーとしても参考になる話かと思うのであります。

「下略」に曰く、『高鳥死して而して強弓滅び、敵国滅びて而して謀臣滅ぶ』と。

これは戦後の兵法であります。戦争が終われば、頭を使う謀臣即ち、参謀はもう不要の世の中となります。したがって、帝王たる者は、戦前・戦中の参謀達がいなくなっても決して奢ることなく、謙虚に世の中を治めることに専念しなさいよということ、即ち、過去の栄光に胡座をかくな、ということであります。

これは、ガバナー、パストガバナー、ガバナー補佐、地区委員、クラブ会長・クラブ幹事その他およそリーダーシップを発揮すべき全ての人達に当てはまる話であります。

以上を集約しますと、ロータリーのリーダーとして、第一に肝要なことは何か。

ロータリーをよく学び、ロータリーを身につけることであります。そのことによって、ロータリーについて自信が出来ます。即ち、リーダーたる者は、須らくロータリーについて絶対的な自信を持つべきこと、これが、ロータリーのリーダーたる者の第一の条件であると思うのであります。

しかし、ロータリーを身につけ、ロータリーについて自信が出来ますと、人間というものは仕様のないものでありまして、ともすれば、その自信が他人に対する優越感になる虞があります。

そこで、第二に肝要なことは何か。

リーダーたる者は、ロータリーに自信を持つが故に他のロータリアンに対して優越感を持ってはならない、ということであります。

そして、第三に肝要なことは何か。

リーダーたる者は、常に謙虚に頭を垂れて、他のクラブ並びに他のロータリアンに学ぶ姿勢を持たなければならないということであります。

以上三つの事柄が、ロータリーのリーダーとして肝に銘ずべきことであろうかと思うのであります。

次ぎに、ロータリーのリーダーたる者の心得ておかねばならないことは、ロータリーの仕事には終わりがないということであります。

例えば、ガバナーの任期は１年であります

す。しかし、任期が終わっても色々な仕事が待ち受けています。のみならず、パストガバナーになってもロータリアンであることには変わりはありませんから、ロータリアンとしての仕事は一生涯続くのであります。

この理は、何もガバナーに限ったことではありません。ガバナー補佐についても、クラブ会長・幹事についても、地区委員についても同じことが言えます。
したがって、リーダーたる者は、本当に御苦労様なのであります。

当地区の偉大なパストガバナー斉木亀次郎さんの言葉に、『月落ちて、天を離れず』という言葉があります。月は、西の空に沈んでも、宇宙を離れることは出来ないというのであります。これをロータリーの世界に当て嵌めると、ロータリアンは、ロータリーの一つの仕事が終わっても、ロータリーから離れることは出来ないという意味になります。

明治時代の感性の優れた非凡な詩人、金子みすずが美しい詩を作っています。

『お花が散って実が熟れて、
　　その実が落ちて葉が落ちて、
それから芽が出て花が咲く。
　　そうして何べんまわったら、
この木はご用がすむかしら』

皆さんは、この詩をどのように鑑賞されますか。私達は、毎年々々芽を出し、何年も花を咲かせる木というものに対して、その生命力の強さを称えるでしょう。

しかし、金子みすずは、この木が何時までも休むことが出来なくて可哀想にと感じています。そこには、金子みすずの木というものに対する深い思いやりがあります。これが金子みすず独特の感性なのであります。

これを、ロータリーの世界に当て嵌めるとどうなるでしょうか。

ロータリアンは、ロータリーの世界にいる限り、毎年毎年ロータリーの奉仕を続けなければなりません。休むことは出来ないのであります。毎週一回の例会には必ず出席して奉仕の心を身につけ、クラブの外では奉仕の実践をしなければなりません。誠に御苦労様であります。

しかし、金子みすずのように、そのことを可哀想にと慰められていてはなりません。寧ろ私達ロータリアンは、ロータリーに居る限り、毎年々々まさに終わりのない奉仕が出来ることに誇りを持つべきであります。そして、何時までも健康な身体で奉仕できることを感謝すべきであると思うのであります。

次ぎに、リーダーシップに関して、noblesse oblige ノーブレス・オブリージという言葉について一言申し添えておきます。

これは、イギリスの貴族階級の根本精神を表した言葉でありまして、自分達の持っている貴族としての特権、財産などを国民や国家のために役立てる義務と責任があるということを意味する言葉であります。現に、あの第二次世界大戦の時、イギリス士官達の戦死者には、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の出身者が圧倒的に多かったといわれています。このように、この言葉の根底に流れる思想は非常に崇高なものなのであります。

しかし、このnoblesse oblige の精神は、ロータリーの世界にそのまま当て嵌るでしょうか。イギリスは階層社会でありますが、ロータリーは、万民平等の世界であります。したがって、noblesse oblige の思想は、ロータリーにはそのまま当て嵌らないと思います。

ところが、日本ロータリーの精神伝統の中

には、このnoblesse oblige の思想が流れているようにも見受けられるのであります。当地区の偉大なパストガバナーであられた直木太一郎さんの思想や、日本ロータリーの創始者米山梅吉先生の思想や行動にもその片鱗が見受けられるようにも思われるのであります。

これは、恐らく、戦前の日本ロータリー創立時の状況、即ち、当時の日本社会における実力百万石の大実業家のみによって組織されたクラブであるという特殊な事情によるものであろうかと思うのであります。

しかし、noblesse oblige というのは、生まれながらにして貴族である身分と特権をもつ人達の精神を表した言葉であります。これに対して、ロータリアンは、このような生まれながらの身分や特権とは無関係の世界であります。

確かに、私達ロータリアンは、自分達は「選ばれた人」であるという意識を持っています。そのこと自体は、間違っていません。それはそれでよいと思います。

しかし、ロータリアンは、noblesse oblige のように、生まれながらにして「選ばれた人」になったものではありません。同業者の中から、ロータリーが良質な人であると認めて、ロータリーが一方的に選び出した人なのであります。同業者が選んだのではないのであります。ロータリーが同業者の承諾も得ないで一方的に選び出した人なのであります。したがって、「選ばれた人」とは言ってもその意味は、noblesse oblige とは全く違うのであります。この点を誤解のないようにしなければならないと思います。

昔は、確かに、超一流の実業家で組織されていましたから、所謂「エリート」即ち、「選ばれた人」と地域社会からも思われていました。

しかし、その「選ばれた人」という意味は、昔と今とでは全く異なるものであることを理解しなければならないと思います。

今のロータリーは、現象的にも、また、原理的にも、このような上流階級だけの組織ではありません。したがってロータリーは、no blesse oblige のような特権があるから国家や国民に奉仕するというのではなく、あくまでも、アメリカ的な万民平等の思想のもとに、庶民的な一人々々のロータリアンとして世のため人のために奉仕しようとするものなのであります。

したがって、noblesse obligeの世界は階層社会・縦型社会でありますが、ロータリーの世界は完全な平等社会・横型社会なのであります。

では、原理的に見て横型社会におけるリーダーシップは如何にあるべきでしょうか。

先ず、その基本前提として、ロータリアンの意識構造を申し述べておきたいと思います。それは、「茶席の論理」を考えれば判りやすいと思います。

茶席には、社会のあらゆる階層の人達が入ってきます。士農工商、大名も武士も町人も百姓も入ってきます。しかし、大名も武士も茶席に入るときは、腰の刀をはずして丸腰で入ります。そして、完全対等平等の立場で静かに茶を喫して去るのであります。これを「喫茶去」と謂います。

ロータリーの世界もこれと同じでありまして、例会には、大会社の社長も、中小企業の社長も、大病院の院長も町のお医者さんも、八百屋さんも魚屋さんもロータリアンとして入ってきます。

しかし、一旦ロータリーの世界に入りますと、皆、平等対等の立場で交わり、心を通わせ合うのであります。そこには、一切上下の関係はないのであります。これがロータリーの論理であります。したがって、ロータリーの世界には、noblesse oblige のような階層社会を前提とする縦型社会の論理はないのでありまして、ロータリーの世界は、万民平等の横型社会の論理の支配する世界なのであります。

ただ、誤解のないように申し上げておきますが、ロータリーは万民平等の世界ではありますが、ロータリアンは、やはりその中から「選ばれた人」なのであります。一つの職種から一人だけ選ばれた人なのであります。

しかも、それは、良質であるが故に「選ばれた人」なのであります。万民平等だからと謂って誰でもロータリアンになれるものではないのであります。

したがって、「選ばれた人」と謂う意味を誤解しないようにしなければなりません。地域社会には沢山の職種があります。それらは皆、職種の異なった異質の職種、即ち、異業種であります。地域社会は異業種の集まりであります。

しかし、ロータリーは、それぞれの異質の職種＝異業種の中からそれぞれ一人だけ良質な人を選ぶのであります。したがって、ロータリアンとして選ばれた人は、皆「良質な人」であるが故に「等質な人」であります。即ち、ロータリアンは、皆、異業種の中から選ばれるという意味において「異質の人」でありますが、良質であるが故に選ばれたという意味においては、皆「等質な人」なのであります。所謂「等質の中の異質」なのであります。そして、その「等質」は、皆「良質」な人なのであります。金子みすずに素晴らしい詩があります。

【私と小鳥と鈴と】

私が両手をひろげても、
　お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
　地面を速くは走れない。
私がからだをゆすっても、
　きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、
　たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
　みんなちがって、みんないい。

要するに、ロータリアンは、良質であるが故に「選ばれた人」でありまして、noblesse oblige の精神をもつイギリスの貴族のように身分や特権があるが故に「選ばれた人」ではないのであります。ロータリーにおけるリーダーシップを考えるとき、この点を誤解しないようにしなければならないと思います。

このように、イギリスの階層社会は縦型社会であります。したがって、noblesse oblige も先程申し上げたオックスフォード大学やケンブリッジ大学出身者に戦死者が多かったというように良い意味で機能している場合はよいのでありますが、インドの階層社会、カースト制度のように、一方に富裕な社会があり、他方に極貧の社会があるという格差社会が厳然として存在し、このことを当然のこととして是認し、これを改めようとしない社会は、ロータリーの万民平等の理想とは相容れないものであります。したがって、ここにはロータリーはありません。したがってまた、ロータリーの奉仕もないのであります。

最後に、ロータリーのリーダー・指導者として肝に銘じておいて欲しいと思うことを一言申し述べておきます。

御承知の通り、ウィルキンソンRI会長が先般の国際協議会で発表されたRIのテーマは、「ロータリーは分かち合いの心」"Rotary Shares"というものでありました。

ところで、ウィルキンソン会長は、このテーマの根底にあるものは、「愛」と「親切心」であると説いておられます。『あらゆるニーズに取り組むときには、どうか、ロータリーの真髄が「愛」であり、その発露が「親切心」であることを思い起こして下さい』と述べています。

「愛」と「親切心」。実は、この言葉は、ロータリーのリーダーとしては、肝に銘ずべき言葉であろうかと思います。そしてこの二つの言葉は「思いやりの心」と集約することが出来ると思うのであります。

ウィルキンソンRI会長は、『ロータリーは誰彼の区別なしに全ての人類に向けられる人類愛に他ならない。ロータリーは、その人類愛を表現し分かち合う術を授けてくれるのです』と述べ、そして、その愛を分かち合う分野について、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕及び青少年奉仕について簡単に説明し、更に、会員増強についても愛を分かち合うべきことを説いておられます。これは、ロータリーの全分野に亘ることを意味します。

したがって、ロータリーのリーダーたる者は、奉仕の実践に当たり、あらゆる事態を冷静に分析し、全ての事柄に目を行き届かせる「愛」と「思いやりの心」を持っていなければならないと思います。一つの例を紹介します。

例えば、世界社会奉仕の窮極の理念は、貧困の社会に金や物を供給することではなく、貧しい人達に自立心を育てることであります。

青年海外協力隊というのは、ロータリアンではありませんが、世界社会奉仕の理念に沿った誠に立派な活動をしていますが、ある時、その隊員達が、タイの村で村人達に竹籠の編み方を教えました。村人達は喜んで帰って行ったのでありますが、その後、一向に竹籠を作ろうとしません。隊員達は、不思議に思い乍らも約6ヶ月が経ちました。そのある日、隊員達が村人達に呼ばれてパーティに行ったところ、その村では一人の老人が竹籠を作って生計を立てていることが判ったのであります。村人達はその老人のことを思って竹籠を作らなかったのであります。

この事実は何を教えてくれるかと言いますと、1923年のセントルイスの国際大会で採択された決議23－34号第6項には、奉仕の実践をするときには、先ずニーズを調べよ、と謂っています。ニーズのないところには奉仕の実践はありません。したがって、この事案の場合には、先ず、村人達が何を欲しているかを調べなければならなかったのであります。村人達が欲しない竹籠作りを教えても、折角の善意が実らないのであります。リーダーたる者は、何時もこの点を考えていなければならないと思うのであります。

また、ウィルキンソンRI会長は、『ロータリーは誰彼の区別なしに全ての人類に向けられる人類愛に他ならない。』と述べておられます。しかし、私は、ロータリーは、全ての人類だけでなく、この世に生きとし生けるもの全てに向けられた愛に他ならない、と考えるのであります。そこから、人間同士の共生、

動物、植物との共生、自然との共生という共生の思想が生まれるのであります。即ち、

例えば、今、科学技術の発達の視点から見れば、医学が長足の進歩を遂げたことは人間の幸せにとって有難いことであります。しかし、医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされています。このことに思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。このことを一体どう考えるのか。

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物の命を奪ってもよいと考えるのか。しかし、彼らも神様から命を与えられて生きているのであります。その命を奪うことは罪ではないのか。もし、罪だとすれば、その罪は、一体、誰が、何時、何処でどのようにして償うのか。

元来、私達人間は、動物の命、植物の命、生きとし生けるものの命を頂いて生きています。この生きとし生けるものの命を奪って生きていく人間とは一体何か。そもそも生きとし生けるものの命とは何か。

ロータリーにおけるリーダーシップを考えるとき、単に人類に対する愛だけではなく、この世に生きとし生けるもの全てに対する愛の心を忘れてはならないと思うのであります。この心は、やがて地球環境を考える心に繋がっていくものなのであります。

最後に、リーダーとして心に留めておくべきことをもう一つ話します。

この話は、今から約20年前、評論家の草柳大蔵さんが一燈園という修養団体で話されたことであります。

昭和62年でしたか、映画俳優のユル・ブリンナーが肺癌で亡くなりました。彼は、その8年前から肺癌になったということが判っていましたので、その4年前に京都に来て、お忍びで大徳寺の和尚さんに会いました。この和尚さんは鈴木大拙先生を凌ぐほど英語の出来る人でありましたが、ユル・ブリンナーは、和尚さんに向かって真剣な眼差しで2時間に亘って話を聞きました。

「死ぬということはどういうことですか」

「生きるということはどういうことですか」

と一生懸命に聞いたのであります。凄い切込みであります。

後で聞いたところ、彼は、曹洞宗の道元を実によく読んでいたのであります。ニューヨークの本屋へ行きますと、道元禅師の翻訳本が沢山あるそうであります。

そして、道元禅師の教えを基にして和尚さんに聞いているのであります。そして2時間。終った後で、畳に手をついて、「本日は、誠にありがとうございました」と言ってお辞儀をしています。

そして、「就いては、もう一つ質問があります。貴方の着ていらっしゃる白い着物と白い帯が実によろしいので、それを我々が着てもよいものでしょうか」

和尚さんが、「貴方の頭は、我々と同じだから大丈夫です」と言うと、すぐ西陣へ行って、着物を2着作って帰りました。彼は、肺癌になってからの8年間に死生観を実に突き詰めて考えていたのであります。

そして、寿司が大好きで、ニューヨークの「竹寿司」と謂う店によく行って、劇場が跳ねるとスタッフを連れて行って一緒に御飯を食べる。『寿司を食べたいだけ食べろ、日本酒を飲みたいだけ飲め』と言って宴会をするのであります。

ところが、その連れてくる人はというと、切符もぎりの女の子、掃除係のおばさん、照

明係のように、人生で一回も脚光を浴びたことのない、ライムライト（lime light）を浴びたことのない裏方さんばかりであります。そのような人達を連れてきて、「さあ、食べたいだけ召し上がれ」と言って食べさせる。この辺が大変魅力的なのでありますが、彼の周辺の人達と話合ってみると、彼は、蒙古人とハンガリーのジプシーの間に生まれた子でありました。

実は、ヨーロッパやアメリカの社会では、ジプシーだと判った途端に、そのことだけで社会的存在を抹殺されてしまします。

あの「第三の男」というチターの名曲を作ったアントン・カラスは、世界中にあの曲が流れて、遂にホワイトハウスの大統領の前で演奏会を開いたり、フランスの大統領の官邸で演奏会を３日間続けたという、その位、世界中のハイライトが当たって、そして、沢山お金を儲けて、ハンガリーの首都ブタペストに「カラス」というレストランを開きました。その店は、２ヶ月前からでないと予約できない位流行ったのでありますが、或る時、アントン・カラスはジプシーの子だという新聞記事が僅か100行くらい載ったために、サアッとレストランから客が退いて、その店は潰れてしまいました。

そして、カラス自身は、遂に昭和61年、落魄の内にこの世を去ったのであります。ハンガリーの本当にうら寂しい、雨漏りのするアパートのベッドの上で、誰にも看取られず、ただ一人で死んでいたのであります。そのくらい厳しいのであります。

ユル・ブリンナーは、このような環境の中を耐えに耐えてきたからこそ下っ端の涙が判るのであります。社会の底辺で支えている人達の気苦労が判るのであります。だからこそ、その人達をお寿司屋さんに呼んで御馳走をするのであります。このようなエピソードは沢山ある筈ですが、彼はそういうことは自分では謂わないのであります。これはまさに日本流に謂えば、「陰徳陽報」の心であります。

この世の中には、一方にnoblesse obligeのような身分や特権のある豊かな社会があると共に他方には、差別された貧しい社会があります。どちらの社会に生きる人達も温かい赤い血の通った人間なのであります。したがって、リーダーたる者は、常に弱者に涙する心を失ってはならないと思うのであります。

会社でも、病院でもその他あらゆる団体の組織の頂点に立ってリーダーシップを発揮する者は、常に社会的弱者に対する思いやりの心がなければならないと思うのであります。そしてこれは、まさにウィルキンソンRI会長の心でもあるのであります。

以上、「ロータリーにおけるリーダーシップ」というテーマで長々と拙いお話を申し上げました。さぞかしお疲れになったかと思います。御静聴を感謝致します。有難うございました。

あとがき

2001年（平成13年）６月、よいひでおちゃんの発案により始まった、例会での深川先生の『純ちゃんのコーナー』は、本年度で丸６年続けられたことになります。その間に、ロータリー情報委員会は委員会併合により、雑誌・ロータリー情報委員会と名前を変えましたが、その１つの重要な任務は、新会員のオリエンテーションとその教化です。新会員の皆さんが『純ちゃんのコーナー』を足掛りに、ご自分で勉強されている事を伺い、このコーナーの有用性を信じ、ありがたく存じます。聞き漏らした点を本冊子で確認されることを期待いたします。

最後に、深川先生の献身的なご努力と、小野隆一郎会長、滝内秀昭幹事をはじめ全会員の皆様そして事務局のご協力に深謝いたします。

伊丹ロータリークラブ　　2006～2007年度　　雑誌・ロータリー情報委員会

純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅶ

目　　次

1．『クラブのテリトリー Territory』その１ ……2
2．『クラブのテリトリー Territory』その２ ……3
3．『クラブのテリトリー Territory』その３ ……4
4．『クラブのテリトリー Territory』その４ ……5
5．『クラブのテリトリー Territory』その５ ……6
6．『クラブのテリトリー Territory』その６ ……7
7．『ロータリー寛容論』その１ ……8
8．『ロータリー寛容論』その２ ……9
9．『ロータリー財団』その１ ……10
10.『ロータリー財団』その２ ……11
11.『ロータリー財団』その３ ……12
12.『ロータリー財団』その４ ……13
13.『ロータリー財団』その５ ……14
14.『ロータリー財団』その６ ……15
15.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１ ……16
『ロータリーの神髄』……17

序に代えて

竹中秀夫会員の発想で始まりました拙話『純ちゃんのコーナー』に就きましては、昨年度もロータリー情報委員長船本洋会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満７年の歳月を閲することになりました。毎年のことながら、例会での３分間スピーチをどのような内容でロータリー情報を説けばよいのかということを模索しながら徒に馬齢を重ねてしまった感があります。顧みて、内心忸怩たる思いでございます。

ところで、何故、ロータリー情報なるものが必要なのでしょうか。或る人は「ロータリーは毎週一回例会に出ておれば解る」と言いますが果たしてそうでしょうか。

私が伊丹ロータリークラブに入会したのは1973年３月であります。その月のガバナー月信は、西宮甲子園クラブから出た古河滋（しげる）ガバナーの月信３月号でありましたが、その巻頭言に書かれていたスエーデン出身の元国際ロータリー会長ブライトホルツさんの言葉に強く惹かれたのであります。即ち、その月信の巻頭言で古河ガバナーは、『元ＲＩ会長のブライトホルツさんは、３月２日夜のＲＩ第366地区大会（大阪）の懇親会で「私は20数年間ロータリアンであるが、未だロータリーとは何かがよく判っていない」と謙遜された。涼しい心境である。』と述べておられたからであります。

この言葉からは元ＲＩ会長のお人柄とロータリーに対する思いの深さが感じられます。 当時、私はロータリーに入会したばかりでありましたが、永年ロータリーで研鑽に励んだ最高の指導者にして未だロータリーは未知なるものなのかと不思議にも思い、ロータリーというものの奥の深さを知らされたのであります。この故に、やはりロータリアンはロータリー情報を身につけなければならないと思うのであります。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を15回しか話すことが出来なかったため、その内容が非常に乏しくなってしまいました。そこで、今回は15回分の話に加えて、今年の２月17日、神戸ポートピアホテルにおいて開催されました当地区主催のロータリー教化セミナーで私が地区研修リーダーとして話した『ロータリーの神髄』の一文を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

終わりに、この一年間、私の拙い話を辛抱強く聴いて下さったクラブの皆様方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、この小冊子の発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員、船本洋会員はじめクラブ事務局の人達に心からなる感謝を捧げ、ペンを擱きます。有り難うございました。

2008年７月　　深川純一

1.『クラブのテリトリー Territory』その１

標準クラブ定款第３条には、「本クラブの所在地域は次の通りとする」として、**所在地域即ち**、Territory を規定しています。当伊丹クラブの**所在地域＝ Territory は伊丹市全域**であります。したがって、クラブとしては、伊丹市全域にわたって奉仕活動をすることができますが、その Territory を越えて他のクラブの Territory で奉仕活動をすることは出来ないのであります。もし、伊丹クラブが自分のTerritoryを越えて、他のクラブのTerritoryの中で奉仕活動をする場合には、相手クラブとジョインプログラムを組まなければならず、その場合は、ガバナーの承認を得なければならないのであります。

このように、Territory は、クラブの活動限界を決める機能を持っているのであります。したがって、クラブは、Territory を越えて奉仕活動することは出来ないのであります。

近年、行政の分野では、広域行政とか市町村合併とかが議論され、また現に実施されてもいますが、これは、行政の組織の問題でありまして、当然のことながらロータリーの組織論とは全く関係のないことであります。行政の世界が広域になったからと謂って、ロータリークラブの活動も広域にならなければならないという論理はないのであります。ロータリークラブは、全世界のクラブが共通にもつ標準クラブ定款の第３条によって、クラブの**活動範囲＝** Territory がピシッと決められており、クラブがその範囲を越えて活動することは、相手クラブの自治権侵害になるのであります。

しかし、これはクラブとしての奉仕活動即ち、団体奉仕の場合の問題でありまして、ロータリアン個人としては、一切 Territory の制約を受けません。何故かと謂いますと、ロータリー運動の本体は個人奉仕であり、個人奉仕は世界中何処ででも実践出来るからであります。伊丹クラブのロータリアンの親睦のエネルギーがロンドンで花咲くこともあるのであります。現に第１次世界大戦の時に、アメリカのロータリアンは Territory の外であるヨーロッパ戦線で個人奉仕をしているのであります。したがって、Territory というものは、ロータリアンの側から見る限り、あまり重要ではないのであります。

では、Territory が重要性を帯びて来る視点は何かと言いますと、それは国際ロータリーの側から見た場合であります。即ち、国際ロータリーの側からは、その構成員である**クラブを認証**していくと謂う立場から、クラブの活動限界をピシッと定めておかないと、クラブ間の紛争が起こったときに困るという考え方があるのであります。

要するに、Territoryは、 国際ロータリーの側からは重要でありますが、ロータリアンの側からは、あまり重要ではないのであります。それは、ロータリアンの**個人奉仕**は Territoryの制約を受けないからであります。

2.『クラブのテリトリー Territory』その２

前回は、ロータリークラブのTerritoryは、国際ロータリーの側から見ると重要な概念ではありますが、ロータリアンの側から見るとあまり重要ではないと申し上げました。即ち、国際ロータリー（ＲＩ）の側からは、その構成員である**クラブを認証していく**と謂う立場から、クラブの活動限界を厳格に定めておかないと、クラブ間の紛争が起こった時に解決できないということになるのであります。

例えば、1909年に**ロサンゼルスロータリークラブが二つ同時に出来て**しまったことがありました。そこで、この二つのクラブがお互いに自分のクラブが本家だ、正統だと言って主導権争いをすることになりましたので、これに懲りて、どちらのクラブが正統なクラブであるかということは、国際ロータリーからチャーターをもらった方のクラブを正統なものとするということになったのであります。これが**チャーターの理論**でありまして、現在の**チャーターナイト・認容状伝達式**は、このようにして始まったのであります。

そして、ロサンゼルスの二つのクラブの場合は、第１号案件でありましたから、どちらのクラブが正統だとも決め難いので、仕方がないので二つのクラブが合併するという形で解決したのであります。したがって、このクラブは、当初一業二会員制をとらざるを得なかったのであります。そして、時日をかけて、一業一会員制に修正して行ったのであります。これが、**国際ロータリーの側から見たテリトリーの理論**であります。

したがって、クラブを作るときには、**国家**の場合とパラレルに考えるとよく判ります。

第１に、テリトリー。これは国家で言えば領土に当たります。

第２に、クラブ会員。これは国家で言えば人民に当たります。

第３に、定款・細則。これは国家で言えば法律に当たります。

この三つの要素がないとクラブを作ることが出来ないのであります。したがって、国際ロータリーの側から見ると、テリトリーは非常に重要な事項なのであります。

このように、**テリトリー**の概念は、ロータリアンというロータリー運動の本体から見る場合と、国際ロータリーが各クラブを管理するという直接監督権の行使の側から見る場合とでは、全く意味が違ってくるのでありまして、この点を理解しておかなければなりません。ロータリー運動の本質は**個人奉仕**であります。したがって、世界中何処ででも実践出来るのであります。したがって、**テリトリー**は、ロータリー運動の側から見る限り、あまり重要な概念ではないということになるのであります。

3.『クラブのテリトリー Territory』その3

テリトリーというものは、一体どのようにして決められてきたのか、**テリトリーの本質**については議論があります。

元来、テリトリーは、**最小の行政単位**でありました。しかし、何時までも最小の行政単位でもってテリトリーの概念を割り切ることが出来るのかという問題があります。

先ず、行政の基本単位というものは、**地域社会**で形成します。例えば、村落社会を見ますと、家が何軒か建つと、その中に豆腐屋が一軒、八百屋が一軒、魚屋が一軒、鍛冶屋が一軒出来て、そして、子供を教育するために学校が出来て、治安を維持するために駐在所が出来て、宗教のシンボルとして寺や教会が出来るという形で地域社会が出来上がっていきます。

そうすると、この**地域社会**が経済的にも、文化的にも、宗教的にも一つの**まとまり**を持って来ます。これを community と謂うのであります。

community**の範囲**については、ヨーロッパでは、教会の鐘の音の聞こえる範囲であるとか、アメリカでは、幌馬車で往復できる範囲であるとか謂う説があります。

何はともあれ、このような**まとまり**が出来た時に、**行政単位**を作り、これを**テリトリー**としたのであります。そして、幾つかの**行政単位**がまとまって更に上部の**行政単位**が出来ます。例えば、**村**が集まって**町**になり、**町**が集まって**市**になり、**市**が集まって**県**になり、最後に、権力構造上、最高権限をもった**国家**がこれを掌握するという形をとっているのであります。

実は、**ロータリークラブ**が**テリトリーを構成**するときに、この**行政的な区画**をもって、自分達の活動限界と考えるのが最もやり易いだろうという安易な判断をしたことは、紛れのない事実なのであります。この事実は、開発途上国であるアフリカとか、中南米諸国の一部になると今日でも厳然として存在しています。

ところが、ヨーロッパとかアメリカのある種の社会だとか、日本のような Macro の Megalopolis（**巨大都市**）になりますと、**経済機能**、**社会機能**が重層的に重複した形で発展します。そうすると、これに対して、ロータリークラブは、従来の**行政単位中心**のテリトリーの枠組みの中からロータリークラブを作って行っていいのかという問題が、第2次世界大戦後の顕著な問題として起こって来たのであります。即ち、community**の機能の限界**が判然としなくなって来ています。例えば、大阪府と兵庫県は行政的には分かれていますが、経済的には一体であります。これが問題であります。

4.『クラブのテリトリー Territory』その4

前回は、日本のようなMegalopolis（巨大都市）では、**経済機能、社会機能**が重層的に重複した形で発展しますから、この場合、**ロータリークラブ**は、従来通り行政単位中心の**テリトリー**の枠組みの中からロータリークラブを作って行っていいのかという問題が第2次世界大戦後の顕著な問題として起こって来たということ、即ち、community・**地域社会の機能**の限界が判然としなくなって来ているということを申し上げました。

ロータリーは、経済的な目的をかなり主眼におく活動でありますから、本来、**経済単位を重視**しなければならないにも拘わらず、最小の**行政単位をテリトリー**としています。**これは何故か**と言いますと、昔は、**行政単位(例えば伊丹市）が経済単位（経済活動圏）**でもあり、**社会単位（地域社会）**でもありましたから、その内の一つを採れば、後は全てイコールでありました。したがって、その限りでは問題はなかったのであります。

ところが、社会が発展しますと、**行政単位**が必ずしも**経済単位**と一致せず、**経済単位**が必ずしも**社会単位**（community）と一致しなくなりました。これがMegalopolis（巨大都市）であります。大都市のビル街を見れば、**政治的、経済的、社会的**に色々な関係が**重層的に重なり合って社会の実体**が出来上がっていることが判ります。その結果、このような社会には、**住民相互のcommunicationがなくなってしまう**のであります。

元来、communityとはcommunicationのある**社会のことであります。**Community に**住民間のcommunication**があるからこそ地域社会に対する奉仕があるのでありますが、そのcommunicationがなくなると地域への奉仕は成り立たなくなるのであります。

私達は、社会単位としてのcommunity**地域社会**即ち、**地域生活共同体**の意味するものは一体何か、ということを考えてみなければならないと思います。

今から約27年前、**元ＲＩ理事の今井鎮雄先生**がガバナー月信第3号(1980.8.15発刊)に、興味ある記事を書いておられますので紹介しておきます。即ち、

今井先生がマンチェスター郊外のある町を訪ねられたところ、建物は2階建ての集合住宅ばかりでありました。今井先生が、その地区の青少年奉仕委員長のロジャー・ウォーリーさんにそのわけを聞いたところ、『以前は、高層アパートを建てていたのだが、それでは住む人達の**心が通わない**のでcommunityが作れない。そこで、最近は、市議会が2階建より高い建物を造らないことを決めたのです』と謂うことでありました。

これは傾聴に値する意見であり、彼等は、communityを非常に大事に考え、そのcommunityをより良くするために何が出来るかを考えているのであります。

5.『クラブのテリトリー Territory』その5

前回は、communityとは、communicationのある社会のことであると申しました。ところが、現在、communicationがなくなったためにcommunityが崩壊しつつあるのであります。それは、先ず、村落共同体に**個別化**の現象として現れました。即ち、

昔は、村落共同体即ち地域社会には、祭があり、盆踊りがあり、色々な行事があって、地域社会即ちcommunityの人達はそれなりのまとまりをもっていたのであります。

しかし、やがて、他の地方からの人口の流入による構成員の個別化、核家族化の現象が起こり、また、逆に地域社会からの人口の流出による過疎の現象によって、村自体の色々の機能を喪失して行きました。その結果、地域社会にcommunicationがなくなってしまいました。果たして、これをcommunityと謂えるかどうかが問題であります。

一方、都会はどうか、と謂いますと、人口の都市集中によって、経済単位としては、一つのビルだけで1クラブが成り立つ状況であります。一つのビルだけで40の職業分類が成り立ち、1クラブが出来上がります（例えば大阪市北区）。しかし、そこにcommunicationはありません。これを地域社会即ち、communityと謂えるでしょうか。一つの行政単位の中に幾つもの経済活動単位即ち、企業が重なり合って存在します。しかし、その中に住居即ち、夫婦親子の生活共同体はありません。したがって、小学生が居なくなります。1community＝1テリトリーとして、**テリトリーを細分化**してみても、そこにcommunicationがなくなってしまったという現象があります。

一方、視点を変えて**グローバルな視点**で見ると、**communityの拡大の現象**もあります。Communityとは、communicationのある社会でありますから、経済単位としてのcommunityは、今は経済活動圏として拡大されています。例えば、私達が昔から日本の伝統として食べてきたものでも、気がついてみると、正月の鯛はアフリカから、蕎麦はカナダから、海老はインドから、蛤は韓国から来ていると謂う時代になっています。これは、実は、世界全体が私達のcommunity＝**生活圏**であることを示しているのであります。この場合、**地域性**はありませんが、逆にcommunicationはあるのであります。したがって、**世界社会奉仕**WCS（World Community Service）は、グローバルに考えて、世界社会を一つのテリトリーと考えるのであります。しかし実は、それはテリトリーがないのと等しいのであります。では、テリトリーがなければ**団体奉仕**が出来ないではないかと謂うと、正にその通りであります。したがって、ロータリーは、世界社会奉仕というものは、本来**個人奉仕**でするべきものと考えているのであります。

6.『クラブのテリトリー Territory』その6

前回申し述べましたように、最近のような大都市の高層化、個人の孤立化の現象は、community の崩壊を意味しています。心が通わなければ、即ちcommunicationがなければ、communityは作れないのであります。その community をより良いものにするためにロータリークラブがあるのであり、そのためにロータリアンが居るのであります。

したがって、ロータリアンは、community をより良いものにするために何が出来るかを考えなければならないと思います。ところが、私達は、日常、会社関係、取引関係、学校関係或いは自治会関係等色々な分野で、それぞれの仲間の中で生活をしていますが、その仲間と一緒に community を作っていくという意識はあまりないのではないかとも思うのであります。しかし、本来、地域への奉仕とは、自分が今生きて生活している場をどのようにして創り上げていくかということに他ならないのであります。

以上のように見て来ますと、社会の発展により、経済社会が重層的な構造をとることによって、一方では社会単位としての communityの崩壊の現象があり、他方では経済単位としての community の拡大という現象を見るとき（行政単位と一致しない）、ロータリーが何時までも、最低の行政単位という一枚看板をもってテリトリーを割り切ることが出来るのかどうか、という大変難しい問題に遭遇するわけであります。したがって、此処では問題点を指摘するに留めておきます。

ただ、しかし、ここで見失ってはならないのは、ロータリーの奉仕の本質は**個人奉仕**であると謂うことであります。**個人奉仕**というのは、個々のロータリアンが何処のクラブに所属しても、自分の現在地を奉仕の実践の場と心得なければならないと謂うことであります。したがって、**テリトリー**の概念は、**ロータリー運動の本質即ち、個人奉仕**から考えると、必ずしも本質に直結した概念ではありません。一種の技術概念であります。したがって、本質的でないものは変更できるが故に、テリトリーに関する事項は規定審議会事項なのであります。したがって例えば、1983年の規定審議会の決議によって、ロータリークラブのテリトリー外であっても、同一市内もしくは隣接クラブのテリトリーに事業場か住居を持っている人をクラブに入会させることが出来るようになっており、これは、ロータリーが職業人の集まりであることから、行政単位としてではなく、**経済単位**として**テリトリー**を捉えようとする考え方の現れなのであります。

以上を要するに、**テリトリーは方便の問題**でありまして、一業一会員制の原則のような本質の問題ではないのであります。

7.『ロータリー寛容論』その1

先ず、1905年にシカゴロータリークラブが創立された当時は、世のため人のための奉仕などという考え方は全くありませんでした。そこには、クラブ会員が皆で仲良く助け合う親睦だけの世界がありました。

しかし、やがて、自分達だけが仲良く助け合う利己的なクラブは長続きしないだろう、クラブが地域社会で発展するためには、世のため人のためのことも考えるクラブでなければならないという考え方から、1907年以降、ロータリークラブに世のため人のためのことを考える奉仕という考え方が生まれてきたのであります。

そこで、ポール・ハリスは、クラブの中で奉仕の重要性を提唱し始めました。ところが、ロータリークラブは、元来、皆が仲良く助け合う親睦だけの世界でありましたから、ポール・ハリスの奉仕の提唱は、多くの会員との間に軋轢を生むことになりました。

しかし、ポール・ハリスは奉仕を説くことを止めませんでしたので、クラブは荒れに荒れたのであります。そして、やがてクラブが崩壊寸前の危機に瀕したのであります。 結局、この危機は、チェスレー・ペリーが全米ロータリークラブ連合会を創立することによって回避され、ポール・ハリスは、全米ロータリークラブ連合会会長として暖かく迎えられることになったのでありますが、彼は、大いに反省するところがありました。**クラブを崩壊の危機にまで追い込んだ自分の考え方の誤りは一体何処にあったのか？**

ポール・ハリスは、1907年から親睦団体であるクラブに奉仕の概念を入れようとしましたが、この時の彼の考え方は、**『始めに親睦ありき』**、その上に高次の概念としての**『奉仕』**が出てきたのであるが、これが親睦より高次の概念である以上は、それが**親睦**と相容れない時には、**親睦を抑えて奉仕が生きるべきだと謂う立場**をとったのであります。その結果、当然のことながら、**クラブ親睦が崩壊**してしまったのであります。

そこで、ポール・ハリスは、ロータリーにおける**親睦と奉仕とを上下の関係**において捉えたことの**誤り**に気づきました。**『親睦と奉仕**とは、**等位の概念**として捉えるべきであった。この両者はロータリークラブという社会制度において**表裏一体の関係**にある。いずれを優先させてもいけない。即ち、**親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る**』と。

即ち、ロータリーとは、**寛容**である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。**自分の考え方を人に押しつけてはならない**。したがって、**人を責めて**はならない。ロータリーはこのような思考の世界の中にある。これがポール・ハリスのロータリー寛容論であります。

8.『ロータリー寛容論』その2

ポール・ハリスは、1910年、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿ると悟ったのでありますが、彼はその気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Rational Rotarianism"であります。

これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というものは、どのような特徴を持った思考なのか、と謂うことを解説したものであります。

ポール・ハリスは、1910年、全米ロータリークラブ連合会の初代会長に選任せられた時から稿を起こし、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だロータリーの**機関誌**というものがありませんでしたので、これを発表する場がありませんでした。そこで、チェスレー・ペリーに相談したところ、チェスレー・ペリーは喜んで、彼が編集委員長になって出来上がったのが、"The National Rotarian" 誌でありました。これは、やがてロータリーが国際的に発展するに及んでNationalと謂う言葉が消えて現在の "The Rotarian"誌 となったのであります。

これが、この論文を巻頭論文としたロータリーの**公的機関誌創刊号発刊の物語**であります。時に、1911年1月26日のことでありました。

このため、国際ロータリー理事会は、古くから1月26日を含む1月最後の1週間を【雑誌週間】と名付けて、ロータリーの公的機関誌である"The Rotarian" の購読を勧誘するスピーチを全世界のロータリアンにして貰いたいと提唱してきたのであります。

ところが、今から約20年ほど前にこれが4月に変更になり、しかも【雑誌月間】となりました。その理由を国際ロータリー事務局に問い合わせましたところ、単に事務管理上の都合と謂うことでありました。このようにして、ロータリーの由緒ある記念すべき日が忘れ去られて行くのは誠に残念なことであります。

ところで、ポール・ハリスはその巻頭論文に曰く『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】(toleration) と答えるであろう』と。

これがポール・ハリスのロータリー理論、即ち、**ロータリー＝寛容論**であります。したがって、彼は『**ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る**』と説いたわけであります。したがって、ロータリーが思考の体系として、その外延（外堀）を確立したのは、1910年にポール・ハリスが『**ロータリーは、寛容の中に宿る**』と自覚した時であります。この時にロータリーの思想の原点が据えられたのであります。

9.『ロータリー財団』その1

国際社会に対立している国家間の紛争を個人の善意をもって解決していこうというのがロータリーおける国際奉仕の実践でありますが、ロータリーは、第一次世界大戦の最中にあって原理的に奇妙なものを作り上げました。これを**ロータリー財団**と謂います。

もっとも、当初は、1917年、時の国際ロータリークラブ連合会会長アーチ・C・クランフの提唱による**【国際理解と親善を目的とする基金】**の設定でありました。これが、時移って1931年に**【ロータリー財団】**と名称を変更したのであります。しかし、これは名称の変更だけであってその実体は変わりません。

ロータリー財団に対する初期ロータリアンの反応は、非常に冷たかったのであります。即ち、『我々は、ロータリーに忠実であるが故にアーチ・C・クランフの提唱する基金に対して金を出すわけにはいかない』というのであります。

では、**アーチ・C・クランフは、何故このような提唱をしたのでありましょうか？**

そこで、アーチ・C・クランフの考え方を分析致しますと、

1．先ず第1に、第1次世界大戦の勃発により国際奉仕の必要性は高まりましたが、**国際奉仕の実践**は、テリトリーの遙か彼方で行われますから、当時の交通機関の発達状態からして、個人奉仕の実践は無理であります。

2．次に、**ロータリー運動**というものは、**個人の善意を育てる運動**でありますから、例会では心を求めるという**精神的な親睦**が本体であります。したがって、ロータリアンは、例会に集まるときはひたすら心を求めるべきでありますからロータリークラブには集金能力はありません。しかも、外国は遙かに遠いから奉仕には金がかかります。

そこで、彼は、連合会が全世界のロータリアンから無理のない金を集めて受託者になり、この金を**個人奉仕**に支出すれば、これが国際奉仕の実践になると考えました。

3．更に、**1917年は、ライオンズ国際協会創立**の年であります。この運動は、将来、ロータリーにとって脅威になるかも知れない。そこで、ライオンズに出来なくて、ロータリーに出来るものは何かと考えたときに、ライオンズは**団体奉仕**でありますからクラブのテリトリーの外では活動できませんが、ロータリーは**個人奉仕**でありますから、**テリトリーの制約**を受けないで、何処ででも奉仕の実践が出来ます。

そこで、連合会がこの浄財をプールして、これを個人奉仕の実践に役立てればよい、これを可能ならしめるのがこの【国際理解と親善を目的とする基金】であると考えたのであります。この点は、誠に理路整然たるものがあります。

10.『ロータリー財団』その２

前回は、ロータリー財団の前身であった【国際理解と親善を目的とする基金】についてのアーチ・C・クランフの考え方を分析して紹介しましたが、当時のロータリー主流の考え方は、彼の考え方を認めませんでした。その理由は二つであります。

第１に、国際ロータリークラブ連合会という**団体の分**を弁えなければならない。連合会を作ったのは個々のロータリークラブである。クラブのお陰で連合会が出来たのである。したがって、連合会がロータリークラブの権限を侵害することは許されない

第２に、ロータリークラブは、**連合会に【国際理解と親善を目的とする基金】の管理など認めたことはない。**にも拘わらず、連合会の会長たるものが連合会の理事会の決議も得ないで**独断専行**をもってこのような基金の設定を提唱するなど絶対に許されない。 これが当時のロータリーの考え方でありました。したがって、基金の提唱はしたが金は集まらない。したがって、会長のアーチ・C・クランフが赤恥をかくことになります。

さればと言って、会長の考え方は、ロータリーの原理に反します。そこで、困ったのが次年度の国際大会のホストであったカンサスシティ・ロータリークラブであります。『我々は、ロータリーの真髄に忠実なるが故に、このような原理に反する金は出したくない。しかし、金を出さないと、議案が否決されて、会長が赤恥をかく』

そこで、カンサスシティクラブが**人身御供**になって出した金が、僅か**26＄50セント**でありました。確かに、今日よりは、ドルの価値はあります。しかし、**200名以上**居るクラブの寄付金としては、まさにLip serviceに等しい金額であります。

しかし、兎に角基金は、実在するに至り、1927年まで国際ロータリー理事会が預かるという形になりました。この時にポール・ハリスが偉かったのは、ロータリー運動の中で色々の理論はある。しかし、神様でない者が、理屈を言ったり実践したりするのであるから、どれも満点のものはない。そこで、『自分は、ロータリー運動の生みの親として、**善意で提唱され、善意で実在する**に至ったものならば、例え原理的には間違っていても、その**因縁は大事**にしなければならない。正しいとは言わない。しかし、ロータリー運動史上、実在するに至った以上は大切にしよう』これは、ポール・ハリスの**ロータリー寛容論**の一つの現れであります。**自他を峻別**して、あれは駄目だといって絶対に認めないのではなく、大きく**自他を包摂**して育てていくのであります。これは指導者として大事なところであります。

しかし、依然として金は集まらずに1927年まで経過するのであります。

11.『ロータリー財団』その3

前回は、ポール・ハリスが「国際理解と親善のための基金」について、善意で提唱され善意で実在するに至ったものならば、その**因縁は大事**にしなければならないと言ってその基金を育てようとしたが、金は集まらずに**1927年**まで来たことを話しました。

そこで、**1927年**、国際ロータリー理事会は、この基金に金が集まるようにする方法がないかと考えた時に、アメリカの**国内税法上の免税措置**に着目したのであります。

アメリカ国内税法上は、民間の善意を社会福祉の育成のために出した金は、企業の**損金**扱いにしてくれるという特例があります。そのためには、アーチ・C・クランフの基金だけでは駄目で、これを**財団制度**にすると、その特例が適用されます。

ただ、英米法には、財団という制度はありませんが、実質的に見て、善意に捧げられた準公共的な目的の資産を管理する制度に『信託』があります。これは、同一の目的物の上に、複数の所有権が併存的に存在し、持分権の区分がない制度をもって管理するものであり、日本の一物一権主義（所有権中心主義）の例外であり、**『公益信託Charitable trust』とも『慈善の目的をもってする信託』**とも呼ばれているものであります。この制度によると、これに対する募金が企業上の損金として処理することが出来ます。

そこで、国際ロータリー理事会としては、このアーチ・C・クランフの基金を信託制度（財団制度）にすれば、寄付金が増えると考えたわけであります。

そこで、1927年の国際ロータリー理事会が、この案件を提唱して準備委員会を作り、作業が完了して、基本約款が作り上げられたのが1931年のことでありました。

このようにして、**『国際理解と親善を目的とする基金』**は、**1931年以降、ロータリー財団**と呼ばれる信託財産制度によって管理されるようになったのであります。

ポール・ハリスは、信託財産制度になったときに大変喜びました。『結構なことだ。一歩前進といわなければならない』と。

しかし、**全世界のロータリアン**は、態度を変えませんでした。

『問題は、金を出しやすいか否か、を議論しているのではない。金を出すべきか否か、を議論しているのである。我々はロータリアンとして、個人奉仕の実践に誇りを持ち、金を出すべき時には沢山出している。しかし、この基金には金を出すべきではないと思うから出さないのである。』と。

これは、当時の一貫した論理でありました。したがって、金は依然として集まらなかったのであります。

12.『ロータリー財団』その4

前回は、ロータリアンから寄付金を集めるために**『国際理解と親善を目的とする基金』**が1931年以降、**ロータリー財団**と呼ばれる信託財産制度によって管理されるようになったこと、しかし、依然として寄付金は集まらなかったという話をしました。

このようにして、やがて、1935年を越えますと、ナチズム、ファシズムによってヨーロッパに暗雲が垂れ込めて参りました。そこでポール・ハリスは、**第2次世界大戦の勃発を予防**するために、若者に国際感覚を育成し、国際理解と親善のためにロータリー財団に百万ドルを集めて奨学金を支給しよう。そして、若者達に国際感覚を育成することを目的としたロータリー運動を起こそうといって自ら陣頭に立ったのであります。

しかし、金は依然として集まりませんでした。『我々は、ロータリー運動の真髄に帰依しているから、このような財団には金は出さない』という一貫した論理でありました。

結局、第2次大戦は勃発し、1945年、核爆弾によって悲惨な結果となりました。

そして、戦後2年にして1947年1月27日、ポール・ハリスがこの世を去りました。その時に、残されたロータリアン達が考えたのは、『ロータリーの生みの親ポール・ハリスはあの世に去った。しかし、彼の死を無にしないためには、彼の志を受け継がなければならない。そのためには、彼があれほど念願をもって育てようとした「**国際理解と親善と平和**」、「**ロータリー運動の国際性**」、これは疑う余地もない。したがって、**ロータリー財団に募金をしよう**』というスローガンになったのであります。このようにして、あれだけ忌み嫌われたロータリー財団が、**ポール・ハリスの死を契機**として、一躍、ロータリー国際奉仕の分野における**檜舞台**に立つようになったのであります。

それから、**寄付が集まりだしたもう一つの理由**は、1945年を越えると全世界的にロータリーを勉強することに意義を感ずる人が少なくなったことであります。このことも財団には幸運でありました。『ポール・ハリスの後に続け。金を出すことでケリがつくなら出しましょう』ということで金が集まるようになったのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーのように、『私は、ロータリーの真髄に忠実なるが故に財団に寄付しないことをもって誇りとなす』という人は少なくなってしまったのであります。但し、誤解のないように申し上げますが、これは金を出すなと言っているのではなく、このような人が居てもよいと言うだけのことであります。ロータリアンは、弱者に涙する心をもって余力のある限り寄付はするべきであります。

13.『ロータリー財団』その5

ロータリー財団への寄付について一つ注意しなければならないことは、ポール・ハリス・フェローの**勧誘**について、**財団**についての**正しい理解**をすべきことであります。

それは、外国との交流のない地方都市では、国際奉仕の実践の機会は殆どありません。しかし、一旦、ポール・ハリス・フェローになると、これが知らず知らずのうちに国際奉仕となるので、1000ドル出してポール・ハリス・フェローになると、恰もお寺の**永代供養料**のように国際奉仕の一生の仕事は終わってしまうのであるから、同じ出すなら1000ドル出しなさいよという説得をする人がありますが、これは誤りであります。

それは一体何故か。ロータリー財団は、**比喩的に言えば**、国際ロータリーレベルにおけるニコニコ箱であります。したがって、ロータリアンに何かの嬉しいことがあって、ニコニコ箱に金を入れても、社会奉仕の実践が全部終わったことにはなりません。もし、終わったことになるのであれば、これは正に**永代供養論**でありますから、1000ドル入れたら卒業証書を出そうと謂うことになります。

しかし、そうではなくて、ニコニコ箱というものは、ロータリアンに何か嬉しいことがあれば、それを記念して無理のない浄財をクラブに出しておいて、クラブが社会奉仕や国際奉仕の実践をするときに役立ててくださいよという意思表示なのであります。

したがって、これは、奉仕の実践の側から考えますと、実践を前提とする**予備行為**でありまして、金を出すこと自体は実践にはなりません。金を出すこと自体はあくまでも**寄託行為**に過ぎないのでありまして、これは**奉仕の実践行為**ではないのであります。

したがって、これとパラレルに考えて、この基金に金を出すことは、国際ロータリーの国際理解と親善を目的とする事業に役立ててくれという意思表示であり、それ自体は奉仕の実践にはならないのであります。したがって、これは予備行為でありますから、二回、三回と続けて金を入れてもよいのであります。また、奥様のためにしてもよいのであります。したがって、国際奉仕の実践をしたいと思えば、**金を入れること以外**のことをしなければなりません。例えば、**ロータリー財団奨学生を推薦**するとか、外国から来た**学生の世話を引き受ける**とかすればよいのであります。これが国際奉仕の実践になるのでありまして、ロータリー財団に金を出すこと自体は、奉仕の実践にはならないのであります。これは、奉仕の実践の**予備行為**であり、**永代供養料**にはならないのであります。ただ、**誤解のないよう**に一言付け加えますならば、例えば、災害の時に出す義捐金は、勿論奉仕の実践になります。弱者に涙を忘れてはなりません。

14.『ロータリー財団』その6

今日は、ロータリー財団の特徴について簡単にお話し致します。

元来、教育事業を主体とする善意の財団制度は、財団所在地に来た人に金を出します。

例えば、フンボルト財団は、ドイツに来た若者に金を出します。フルブライト委員会やフォード財団はアメリカに来た若者に金を出します。ブリティッシュ・カウンセル、米山奨学会皆然り、であります。米山奨学会は、片貿易だからけしからん、という声がありますが、この種の財団は片貿易が本来の姿なのであります。

ところが、ロータリー財団は、地球上の全ての人達が善意と善意を交換するという国際体験を得て貰うための制度でありますから、**何処の国の若者が何処の国へ行ってもよい**のであります。但し、受取機関としてのロータリークラブがなければなりません。

ロータリー財団は、このような素晴らしい独自性をもっているのであります。しかも、**ロータリアン個人**が奨学生の面倒を見ることが出来ます。これも財団の長所であります。これが、ロータリーの奉仕は、育てる奉仕だと言われる所以であります。

ところで、元来、財団制度は、**基本元本を固定**して、**運用利息で事業を継続**するものであります。米山奨学会もカールミラー記念財団も皆然りであります。

ところが、ロータリー財団は、そのゆとりがありません。したがって、3年間だけ元本を固定して、その運用利息で経費を補いますが、3年経つと元本を使ってしまいます。

そこで、ロータリー財団は『基本元本は全世界のロータリアンである。ロータリアンが居るかぎり、毎年、何処かから金が入って来る。これが運用利息のようなものである』
という柔軟な解釈をとります。

しかし、これは、明らかに**こじつけ**であり、**詭弁**であります。しかし、このような考え方をとらざるを得ない事情にあることもまた事実であります。したがって、ロータリアンたる者は、これを助けなければなりません。全世界のロータリアンが、一定のインターバルをおいて寄付をしなければ、財団はその機能を適切に果たせないのであります。この事情を知って、多少なりとも感ずるところのある人は、温かい目をもってロータリー財団を見守ってやって欲しいのであります。

原理は原理として、助けるべきものは助ける。これが、ポール・ハリスの**ロータリー寛容論**であります。なお、最近は、**ベネファクター**という、元本を消費しないで固定し、その運用利息をもって事業財源にあてるという財団本来の方式の募金も開発されているのはご承知のとおりであります。以上で、ロータリー財団の話を終わります。

15.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１

今回は、**ロータリーにおけるリーダーシップ**についてその原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。即ち、

一般に、リーダーシップ即ち、指導性と謂うとき、それは、指導する者と指導される者という**上下の関係**として捉えられていますが、ロータリーにおけるリーダーシップというのは、会社のような**上下関係**における指導性ではありません。

会社は命令服従の縦型社会でありますが、ロータリーは**横型社会**でありますから、ロータリーにおけるリーダーシップは、ロータリアン全てを平等対等なものと見る社会におけるリーダーシップを意味するのであります。

したがって、ロータリアン**同士**が平等対等であるのみならず、ロータリアンと**クラブ会長**との関係、**クラブ会長と地区ガバナーや地区委員**との関係も平等対等であります。そして、更に謂えば、ロータリアンと地区委員や地区ガバナーとの関係もロータリアンとしては平等対等なのであります。

何故なら、国際ロータリー即ち、ＲＩの会員はロータリークラブであって、ロータリアン個人は国際ロータリー即ち、ＲＩの会員ではありませんから、そもそも両者は上下関係どころか何らの関係もないのであります。したがって、敢えて両者はどのような関係かと謂えば、**やはりロータリアンとしては、お互いに平等対等**だということになるのであります。

ただ、**平等対等であることの意味を誤解**しないように注意しなければなりません。例えば、私達の仲間は、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生に対していつも友達のような気持や態度をもって接していますが、今井先生を心から尊敬しています。今井先生もまた、私達から信頼され、慕われています。ここが大事なところであります。これを**ロータリーにおける「徳の支配」**というのであります。

重ねて申し上げますが、ロータリーは、**権力服従の縦型社会**ではありません。時として、縦型社会の意識を持ったロータリアンは、今井先生に接する私達の態度を見て、あんな偉い人に対して何と慣れ慣れしい態度かと、異様なものと感じて驚くようであります。しかし、ロータリーが横型社会であることを考えれば、元来、そのような意識を持つ方がおかしいのであります。

ただ、一点注意すべきは、**「親しき仲にも礼儀あり」**と謂われるように、年長者に対する礼を失してはならないことは当然であります。

『ロータリーの神髄』

2680地区ロータリー教化セミナー 2008.2.17

地区研修リーダー　深川　純一

今日は「ロータリーの神髄（シンズイ）」というテーマを頂いております。神髄というのは真髄とも書きます。辞書を引きますと、どちらも同じ意味でありまして、その道の奥義（オウギ）とか蘊奥（ウンノウ）という意味であります。用語例としては「芸の神髄を究める」という言い方がありますので、今日のテーマは「ロータリーの神髄を究める」ということになろうかと思います。

只、神髄という言葉には、若干宗教的なニュアンスがあります。元来、ロータリーは一つの思想でありまして、しかもその思想は、マルチン・ルターの新教運動の最後にスイスのジュネーブで起こりましたカルヴィンの思想の系譜に属するものでありますから、キリスト教の影響があることは紛れもない事実であります。そのことは、職業奉仕をOccupational serviceと謂わず、敢えてVocational serviceと謂っていることからも明らかであります。即ち、Vocationと謂うのはラテン語でVocatio、英語でCalling、即ち、「神の思し召し」という意味であります。したがって、ロータリー創立当初の20世紀初頭の1911年、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長ベンジャミンF・コリンズBenjamin Franklin Collinsが”Service,Not self”という標語を提唱しました。即ち、ロータリーのServiceとは、自己を否定・犠牲にして、宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依することであると謂うのであります。それ以後、1912年の国際ロータリークラブ連合会会長グレンC・ミードGlenn C.Meedを初め当時の殆どの指導者がその信奉者でありました。そして、この思想は、やがて1915年サンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」の採択となって実を結んだのであります。

しかし、この「道徳律」は、最後の第11条に「黄金律」を規定しており、あまりに宗教的色彩が強いというので、1921年頃、A．F．シェルドンの提唱により、"Service above self"という標語が第１の標語となり、やがて1980年、国際ロータリーレベルにおいて廃止になりました。しかし、クラブレベル、個人レベルでは未だ脈々と生きているのであります。

いずれにしても、ロータリー思想は、宗教的な色彩を完全に払拭し得ないものでありますから、神髄という言葉を使っても違和感はないものと思います。

只、この宗教的な色彩を避ける為でもないと思いますが、神髄と同じような意味ではありますが、「原点」という言葉を使う人も居ます。ただ、神髄と原点とでは、若干言葉のニュアンスが違うと思うのであります。

私は、原点という言葉は、神髄よりも概念の幅が広いと思うのであります。即ち、ロータリーの原点といえば、ロータリーが色々な側面をもっていることから、ロータリーの思想の原点は何か、とか、ロータリーの組織の原点は何か、とか、ロータリーの実践の原点は何かというように色々な視点から分析することになろうかと思います。そして、ロータリーの原点を思想の視点から見ると、やはり

「神髄」という言葉の方が相応しいと思うのであります。

何はともあれ、言葉の解釈はこれ位にして、先ず、今日の私の話の結論を申し上げておきます。それは、ロータリーというものは、体系化された様々な原理の総体であり、それが象徴的に集約されたものがObject of Rotary即ち、ロータリーの綱領であります。元来、Object of Rotaryを「綱領」と翻訳するから判りにくいのでありまして、これは文字通りロータリーの「目的」と訳せば判りやすいのであります。正に綱領はロータリーの目指すものでありまして、したがって、綱領は、ロータリーの神髄を究めるための目標なのであります。

では、その目指すものは、具体的に言えば一体何か。それは一言で言えば親睦と奉仕という言葉に集約されると思うのであります。したがって、ロータリーの中心概念は、親睦と奉仕なのであります。

そこで、以下には、この親睦と奉仕の神髄を究めると何が出てくるのかということを論証していくことになるのであります。

さて、ロータリーは、一つの運動体であります。そしてその運動体の目指すところのものは倫理運動であります。凡そ運動と申しますものは、20世紀初頭のロータリーのようにその運動に起動力を与える時期が最も大切なのであります。 ロータリーの場合は、その時期にポールP・ハリスを初めアーサーF・シェルドン、ベンジャミンF・コリンズ、チェスレーR・ペリーなどの優れた指導者がいたことが今日の大を成した原因であろうかと思うのであります。彼らは高々と理想を掲げ、その理想に燃えて行動したるが故に様々な原理を開発し、その原理を実践して、ロータリー創立後約25年間、四半世紀の間にあの熱く燃えた素晴らしいロータリーを作り上げたのであります。そこで先ず、その原理形成の軌跡を振り返ってみたいのであります

先程申し上げましたように、ロータリーの**中心概念は親睦と奉仕**であります。では、何故、**親睦と奉仕**がロータリーの中心概念なのか。そのことを明らかにするには、ロータリークラブがこの世に生まれたロータリー濫觴の物語から始めなければなりません。

そこで今日は、入会3年未満の会員もおられるとのことでありますので、最も基本的なこともやや詳しくお話し致します。

御承知のように、先ず1905年2月23日シカゴロータリークラブが発足しました。会員達が、お互いに助け合って、楽しいクラブを作ろうと言って出発したのであります。したがって、当初、ロータリーには**親睦**だけがあったのであり、その当時、世のため人のための奉仕などというものは未だ影も形も無かったのであります。

実は、このロータリーの**親睦**を作ったのは、ロータリーの創始者ポール・ハリスでありました。彼は、1905年2月23日、シカゴの町のノース・ディアボーン街のユニティビルの711号室で3人の友達と話し合いました。

ここで、ポール・ハリスは、予て考えていたことを3人に語りかけました。それは、皆が仲良く助け合って生きていく楽しいクラブを作るためには、同業者がいると仲良くなれないから、一つの職種から一人だけ会員を選んでクラブを作ろうと提案したのであります。これを一業一会員制の原則と謂います。

何故、このような原則を決めたのかと言いますと、資本主義経済社会では自由競争原理

が支配しますから、同業者は、まさに「食うか食われるかの関係」に立たされます。したがって、同業者は、競争相手がいるが故に、お互いに心を開いて親しくなることが出来ません。したがって、俺が潰れる前に彼奴が潰れてほしい、という訳の判らない感情の虜にもなるのであります。

そこで、ポール・ハリスは、クラブの**親睦**を守るために同業者を排除して、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則を採用したのであります。したがって、これは、クラブの親睦を守るためにポール・ハリス自身が作った原則であり、これがロータリーという**組織の原点**なのであります。

そして、その1ヶ月後の3月23日には、会員9人が集まってシカゴクラブの創立総会が開催されました。この会合で、ロータリークラブという名称を決め、会長・幹事をはじめクラブの役員を決め、クラブの組織を創ったのであります。 そして、このときもう一つ重要な原則を決めました。それは、会員は4回連続して例会を欠席すると自動的に会員資格を失うという「**規則的例会出席**」の原則であります。これは、当時のロータリアン達は皆、零細企業の経営者ばかりでありましたから、お互いに厳しい経済状況の中で仲良く助け合って行くためには、皆仲間として必ず例会には出て来いよ、ということであります。

しかも、当時のクラブ例会は、2週間に一回でありましたから、4回連続して欠席すると2ヶ月もクラブに出てこないことになります。したがって、そんなに長い間、欠席して、お互いの安否も気遣わない、助け合いもしない、そんな冷たい奴は俺たちの仲間ではない、辞めて貰おうというのがこの原則を立てた彼らの心でありました。したがって、これもクラブ親睦を守るためにシカゴクラブが採択したロータリーという**組織上の基本原則**でありました。

要するに、彼らはまず、「**一業一会員制の原則**」と「**規則的例会出席の原則**」を採択し、ロータリーの最も基本的な組織原理を確立したのであります。

このようにして、ロータリーは、親睦が確保され、皆は仲良くなっていったのであります。

そこで、ロータリーは、皆が仲良くなるために、色々なことをしております。先ず、会員同士は**親類付き合い**をするのだから、お互いに取引をするときには利益を貪ってはならない、というので、会員に「**原価の取引**」を義務づけました。 更に、彼らは、物質的な助け合いのほかに、精神的にも助け合うようになりました。この助け合うということの**具体的な意味は何か**、と言いますと、ロータリアンは、皆職業人でありますから、それぞれ自分の企業経営上の悩みをもっています。その悩みをクラブに持ち寄って、皆で智慧を出し合ったのであります。

例えば、或る会員が「**うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ**」と言うと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆業界が違います。したがって、発想もアイディアも皆違います。したがって、「**そのことなら私の業界ではもう解決済みだ。こうして御覧**」と言って教えてくれます。

また、或る問題については、皆未だ未解決であった場合は、**三人寄れば文珠の知恵**と謂われるように、皆で衆知を集めて解決していったのであります。

このようにしてお互いに企業経営上の知恵

を出し合い、アイディアを交換して助け合ったのであります。したがって、恰も、クラブが**経営相談所のような機能**を果たすようになり、会員達は次第に豊かになって行ったのであります。

このクラブ例会における「**アイディアの交換**」「**発想の交換**」の機能こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた本質的な機能でありまして、このことは当時のクラブの「**綱領**」にも「**発想の交換**」Exchange of Ideaという言葉が記されていたのであります。

ところが、1922年、この発想の交換という言葉がクラブの「**綱領**」から消えてしまったのであります。**それは一体何故か。**

彼らは、クラブ例会における「発想の交換」Exchange of Ideaと謂うことは、ロータリークラブにあっては至極当然のことではないか。そうであれば、わざわざ書いておく必要はないだろう、と謂うので、消してしまったのであります。したがって、言葉は無くなりましたが、現在も「**発想の交換**」Exchange of Ideaという**機能**は、ロータリークラブの本質的要素として厳然として存在するのであります。実は、例会に於けるこの発想の交換機能は、職業奉仕の実践の基本前提なのであります。

要するに、この時点では、ロータリーは、皆が仲良くして助け合う親睦だけの世界でありまして、ロータリーの全ての原理原則は、ただ親睦の為にのみあったのであります。したがって、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もなかったのであります。

ところが、1年半位経った頃、**ドナルド・カーター** Donald Carterという弁理士に入会を勧誘したところ、ドナルド・カーターは、『君達は、お互いに助け合って豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制であれば、クラブに入れない同業者はどうなるのか。また、職業人のクラブであれば、職業を持っていない一般地域社会の人達はどうなるのか。私達は、この地域社会に生まれ、地域社会で育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になっている地域社会に何らの恩返しもしない、何らの足跡も残さないで、自分達だけが、お互いに助け合って、豊かになって、やがてこの世を去っていく、そのようなエゴイズムのクラブは永続性がないだろう。そのようなクラブには入りたくない』と言って、きっぱりと入会を断ったのであります。

この報告を聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。

『ドナルド・カーターの言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう』といって、それからロータリークラブは、親睦だけではなく、世のため人のためのこと、即ち、奉仕も考えるクラブに変わっていったのであります。

そこで、ポール・ハリスは考えました。ロータリークラブは、世のため人のための奉仕をするために存在するのであるから、そのようなクラブであれば、これはシカゴの街だけにあればよいというものではない。全アメリカの地域社会にあって然るべきものである。したがって、アメリカ中の地域社会にロータリークラブを作るべきであるという考え方となり、ここにロータリーの拡大という考え方が提唱されるようになったのであります。

ところが、このようにして**親睦**のほかに**奉仕**を認めるようになったために、クラブの中

に摩擦が生じました。何故かと言いますと、親睦というのは、クラブの中で会員同士が仲良くして助け合うことでありますから、**親睦のエネルギー**は、全てクラブの中に向いています。

これに反して、**奉仕**というのは、会員以外の人達、即ち、地域社会の人達のために何かをしようということでありますから、**奉仕のエネルギー**は、クラブの外に向いています。このように、親睦のエネルギーと奉仕のエネルギーは、その向かっている方向が正反対なのであります。

そこで、シカゴのクラブの大多数の会員達は、自分達は、皆で仲良くして助けあって皆が豊かになるために、即ち、親睦を求めてクラブに入会したのであるから、地域社会の人達のこと、即ち、奉仕のことなど考える必要はないと考えています。

これに対して、ポール・ハリスやドナルド・カーターほかごく一部の会員達は、ロータリークラブというものは世のため人のための奉仕を考えなければ、やがて潰れてしまうだろう、という考え方であります。

しかし、**奉仕などと謂うことを考えるのは**大多数の会員達の反対するところであり、更に、世のため人のため即ち奉仕のためにロータリークラブを沢山創っていくという**ロータリーの拡大**は、クラブにとっては大変**荷が重い仕事**であり、クラブにとっては全く余計なことでありますから、これまた大多数の会員達の反対するところであります。

このような意見の相違からクラブの中にに摩擦が生じ、クラブが荒れて来ました。ポール・ハリスは、奉仕を説きますが、大多数の会員達はこれに反対であります。さりとてロータリーの創始者ポール・ハリスを辞めさせるわけにはいかない。そこで、会員達は面白くありませんから、次第に例会に出席しなくなりました。即ち、

ポール・ハリスが奉仕を説くとクラブの親睦が崩れます。しかし、親睦を守ろうとすると奉仕を説くことが出来ません。そこでクラブは荒れに荒れるわけであります。このようにして、当初ロータリーの親睦を作ったのはポール・ハリスでありましたが、実は、その親睦を壊したのもポール・ハリスだったのであります。

シカゴクラブの初代の親睦委員長であった歯医者のドクター・ネフDr.William R.Neffはこの状況を見て、『あと一月でこのクラブも**お陀仏**だ。親睦委員長としてクラブを立て直すために何かをしなければならない。**起死回生の策**はないのか』と考えました。

そこで、彼は、クラブの会計であったハリー・ラグルスを呼びました。そして、『君は歌が上手だから、ポール・ハリスが奉仕の話を始めて皆がしらけたら、歌を唄ってくれ』と頼んだのであります。そこで、ハリー・ラグルスは、皆の気分が沈んだときに立ち上がって『諸君、歌を唄おう』といって音頭をとって、会員の心を引き立てたのであります。これが**ロータリーソング発祥の物語**であります。

したがって、**ロータリーソング**というものは、どんな歌でもよいのであります。**皆の心を楽しくするもの**であればよいのであります。

例えば、昔は兵庫県と四国は同じ地区でありましたから、高知県から出たガバナーが公式訪問に来られたときは「よさこい節」もいいでしょう。また、旧制第三高等学校出身のガバナーであれば「琵琶湖就航の歌」もいい

でしょう。但し、冬の季節に「吾は海の子」などを唄うとセンスを疑われま。また、ロータリアンの品格を疑わせるような歌は避けるべきであります。

何はともあれ、ポール・ハリスが奉仕を説いて親睦が崩れると、ハリー・ラグルスが歌を唄って親睦を回復する。するとまた、ポール・ハリスが奉仕を説いて親睦を崩す、という具合でありましたから、やはりクラブの親睦は次第々々に崩れていったのであります。

この状況を冷静に見ていたのが、1910年から32年間に亘ってＲＩの事務総長を勤め上げた偉大な組織管理者チェスレー・ペリーでありました。

彼は、**自問自答**します。**ロータリーにとって親睦はどうしても必要であるか**。答えは明らかにイエスであります。しかし、親睦を重視すると奉仕は出来ません。 では、**ロータリーにとって奉仕はどうしても必要であるか**。これも答えは明らかにイエスであります。しかし、奉仕を説くと親睦は崩れます。そこで親睦を重視すると奉仕は出来ません。この相反する要請を如何にして調和することが出来るかを彼は考えたのであります。

そして、1910年に至って結論を得ました。それは、クラブの中で奉仕を説くと親睦が崩れますから、奉仕のことは、クラブの中では議論しないことにして、クラブとは別枠の団体を作って、奉仕のことはその団体に任せることにすれば、親睦を崩すことなく奉仕が実現できると考えたのであります。

このように考えて、彼は、ロータリークラブとは別枠の団体を創るために、1910年、当時、全米に存在した16のロータリークラブの代表者をシカゴに集めました。そして、全クラブの同意を取り付けて出来上がったのが**全米ロータリークラブ連合会**という全アメリカのクラブの連合組織体でありました。これが現在の**国際ロータリーの前身**であります。

要するに、親睦を暖めることはクラブの中で、奉仕のことは連合会でという図式が出来上がったのであります。

このようにして、チェスレー・ペリーは、**親睦と奉仕とを調和させる**ことに成功したのでありまして、ここに、**親睦と奉仕を指導理念とするロータリーの考え方の基礎**が出来上がったのであります。

ただしかし、先ず全米ロータリークラブ連合会を創立することを16のクラブが全て承認しなければなりません。そこで議論が始まりました。

この連合組織体は、シカゴクラブよりも上位の団体としてシカゴクラブに対して命令権を持つことになる、と謂うのであれば、承認することは出来ません。

さりとて、シカゴクラブが15の子クラブを生み、その全クラブが集まって連合組織体が生まれるのであれば、シカゴクラブの**孫団体**に当たる。したがって、連合会が各クラブよりも下に位置する団体だと考えるのも論理が通りません。

このような論議に数ヶ月を要し、結局、各クラブと連合組織体とは対等の地位に立つという考え方が出るに及んで、承認決議に漕ぎ着けたのであります。

次に、**全米ロータリークラブ連合会初代会長の選任についても紛糾しました。**
シカゴクラブ以外の15クラブは、それは当然親クラブのシカゴから出すべきだと言いましたので、**初代会長は、シカゴクラブから選出することにはなった**のでありますが、シカゴ

クラブの会員達は、皆心の中ではポール・ハリスを選出すべきだと思いながらも、ポール・ハリスが1907年以降クラブ親睦を踏みにじった経緯がありますから、戸惑いがあります。したがって、何時まで経っても初代会長の選任決議が出来なかったのであります。

時のクラブ会長はAM・ラムジー A.M.Ramseyでありましたが、彼は、後に 国際ロータリーの代表として、第一次大戦後の国際連盟の会議にロータリーからオブザーバーとして出席しているほどの人物であり、彼が国際連盟の諸々の会合において、ロータリーを代表して述べた諸々のスピーチは、全世界の外交官達の心を打ったといわれるほどの雄弁家でありました。その彼がもうこれ以上選任決議を待たせるわけにはいかないと言って、会長として曰く、

「我々はロータリアンである。ロータリーを愛するが故に諸々の議論をした。議論が昂じて感情的にもなった。そして、その討論を通じて、我々は今や全米ロータリークラブ連合会を組織出来るようになり、その初代会長の選任を我々の決議に委ねられている。ロータリーにとって我々は正にエポックメイキングな時期を迎えているのであって、この重要なロータリーの発展段階において、あれは駄目だ、これは駄目だという瑣末な現象的な気持に支配されているようでは、後世のロータリアンの失笑を買うだろう。

我々が今や正に決断しなければならないことは何か、というと、ロータリー運動のこの潮流の中にあって、一体誰を全米ロータリークラブ連合会の初代会長に推挙すべきかと謂うことなのであって、これは、私個人の意見であって、会員の全てを拘束するものではないが、謙虚に振り返ってみると、その人物はただ一人しか居ない。それはポール・ハリスだ」と言って話を終えたのであります。

シカゴクラブの例会がこの時、水を打ったように静かになって、やがて発言あり。「会長！ロータリーの創立者ポール・ハリス君を全米ロータリークラブ連合会初代会長に推挙すべきことを提案します。」

万雷のような拍手がやってきました。このようにしてラムジーは、「ポール・ハリス君を全米ロータリークラブ連合会初代会長に推挙することを決定した」と宣言できるようになったのであります。

結局、ポール・ハリスが全米ロータリークラブ連合会初代会長に選ばれたのでありますが、あまりに審議が遅れたために、**会長任期の残存期間**が少なくなってしまいました。

そこで、これでは、あまりに気の毒だというので、もう一度、1911年からの会長職を務めることになったのであります。

ところで、ポール・ハリスは、会長として暖かく迎えられて、深く**反省**するところがありました。**自分の考え方の誤りは一体何処にあったのか？**

ポール・ハリスは、1907年から親睦団体であるロータリークラブに奉仕の概念を入れようとしました。この時のポール・ハリスの考え方は、**『始めに親睦ありき』**、その上に高次の概念としての『**奉仕**』が出てきました。

そして、これが**親睦より高次の概念**である以上は、それが**親睦と相容れない時**には、親睦を抑えて奉仕が生きるべきだと言う立場をとりました。その結果、当然の事ながら、親睦が崩壊してしまったのであります。

ポール・ハリスは、ロータリーにおける**親睦と奉仕**とを**上下の関係**において捉えたこと

の誤りに気づきました。即ち、

『**親睦と奉仕とを等位の概念**として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において**表裏一体の関係**にある。いずれを優先させてもいけない。したがって、**親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る**』

と悟ったのであります。

ポール・ハリスは、その気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文【**レイショナル・ロータリアニズム**】"Ratioinal Rotarianism"であります。

これは、ロータリーの思考というものは、合理的な立場から考えると一体どのような特徴を持った思考なのかと謂うことを解説したものであります。

ポール・ハリスは、1910年、全米ロータリークラブ連合会の初代会長に選任せられた時から稿を起こし、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だロータリーに**機関誌**というものがありませんでしたので、これを発表する場がありませんでした。

そこで、チェスレー・ペリーに相談したところ、チェスレー・ペリーは喜んで、彼が編集委員長になって出来上がったのが、ロータリーの機関誌【**ザ・ナショナル・ロータリアン**】"The National Rotarian"であります。そして、これは、やがて1912年、ロータリーが国際的に発展するに及んで"The National Rotarian"の National という言葉がとれて現在の【**ザ・ロータリアン**】"The Rotarian"となったのであります。

これが、この論文を巻頭論文とした**ロータリーの公的機関誌創刊号発刊の物語**であります。時に、1911年１月26日のことでありました。

このため、国際ロータリー理事会は、古くから１月26日を含む１月最後の１週間を【雑誌週間】と名付けて、全世界のロータリアンに対して、ロータリーの公的機関誌である"The Rotarian"の購読を勧誘するスピーチをして貰いたいと提唱してきたのであります。

ところが、近年、この雑誌週間が雑誌月間となり、しかも１月から４月に変更になりました。その理由をＲＩ理事会に問い合わせますと、単なる事務管理上の都合だということでありました。歴史的に意義のあるこの週間がこのような理由で簡単に変更されてしまったことは誠に淋しいことであります。

ところで、ポール・ハリスは、この巻頭論文【**レイショナル・ロータリアニズム**】において、『**自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】(toleration)と答えるであろう**』と言っています。

これがポール・ハリスの**ロータリー理論**でありまして、**ロータリーイコール寛容、所謂『ロータリー寛容論**』であります。したがって、彼は『**ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る**』と大悟したわけであります。

ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、**寛容な心を持つこと**。自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の世界の中にロータリーはある。これがポール・ハリスのロータリー理論でありました。

私は、このことを『**親睦なくして奉仕なし。**

奉仕なくして親睦なし』と集約しているのでありまして、**親睦と奉仕**とは、正に密接不可分な**表裏一体の関係**にあるのであります。そして、この二つは、正にロータリーの中心概念であり、謂わばロータリーの核にあるものなのであります。ロータリーを一言で言えば何か。それは親睦と奉仕である。では、ロータリーの親睦とは一体何か。ロータリーの奉仕とは一体何か。ロータリーを突き詰めて考えると結局この二つの言葉に集約されるのであります。1927年、ＲＩ理事会は「我々は言うべきことは全て言い尽くした。しかし、為すべきことは未だ何一つ為されていない」として、四大奉仕部門を確立し、原理探求のロータリーから実践のロータリーへと邁進していったのであります。

まさに、20世紀初頭の25年間の原理探求のロータリーで開発された様々な原理を集大成して、ロータリーを一言で言えば何か。それは親睦と奉仕であると集約出来るのであります。したがって、これが「ロータリーの神髄」にある考え方なのであります。

以上を要するに、ロータリーが、その**思考の体系**として、その**外延（外堀）**を確立したのは、1910年、ポール･ハリスが『**ロータリーは、寛容の中に宿る**』と自覚した時であります。したがって、1910年までは、無反省的な、無意識的な原理の開発に過ぎなかったと謂うべきであります。即ち、ポール・ハリスが「**ロータリーは寛容の中に宿る**」**と自覚した時**に、**ロータリーの意識的な体系的思考の外延が完成**するに至ったと謂えるのであります。

これを思想史的な視点から見ますと、**ロータリーの思想の原点**が据えられたのは、実は1905年ではなく、1910年のことであったと謂えるのであります。それまでは、無意識的な無反省的な**試行錯誤の期間**であったと謂うべきであります。このようにして、ポール・ハリスが1910年に「**ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る**」と自覚した思考が実は「**ロータリーの神髄**」にある思考なのであります。

そして、この思考が象徴的に文章化されたものが「**ロータリーの綱領**」なのであります。**綱領**は「**ロータリーとは何か**」ということを簡明直裁に書き上げたドキュメントでありまして、ロータリーの核にあるものであり、正に「ロータリーの神髄」なのであります。この故に綱領は、謂わばロータリーの般若心経であるとも謂われているものなのであり、ロータリアンにとって一番大事なものなのであります。

ところで、時間の関係で、ロータリーの綱領の解説はあとに譲ると致しまして、ポール･ハリスが説いた「**ロータリー寛容論**」は、実は非常に東洋的な発想に基づくものと私は思うのであります。蓋（ケダ）し、初期ロータリーは、1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「**全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓**」所謂「**ロータリー道徳律**」、就中その第11条の「**黄金律**」に象徴されるようにこれはキリスト教の色彩の非常に強いものでありましたが、実は、ポール・ハリスの提唱した「**ロータリー寛容論**」は、その思想を越えるもののように考えられるからであります。

哲学者**田中忠雄先生**の説によりますと、イギリスの世界的な論客**アーノルド・トインビー**は『**キリスト教的不寛容**では、現代の対立を救い得ないという発想から、アジアの精神的基盤に人類の運命の希望を繋ぐ』という予感を述べています。

殊にアジアの精神的基盤である「禅」の神髄は、明らかに「**寛容**」にあります。それは、多くの流派を擁しながら、度量の狭い縄張り争いをしたことは非常に少ないのであります。禅の訓練は峻烈を極めたものではあっても、なお仏陀の慈悲を背負っています。慈悲とは他者の身になって感ずるという人間最高の能力のことであります。それが正に「寛容」ということの真義なのであります。

私は、昨今の国際社会、殊にアメリカを中心とする様々な対立の状況を見るとき、誠にアジアの寛容こそは、今や、世界救済の原動力でなければならないと思うのであります。

また、昔、イタリアの**アンドレ・オッティ首相**は、マルタ島で開かれた世界宗教者会議において、『宗教家は、「**寛容**」と謂うことを説くが、自分を絶対視して相手を許す、というのは「寛容」ではない』と言い切っていますが、誠に傾聴すべき見解であると思うのであります。

「**寛容**」について哲学者田中忠雄先生は、仏陀の教えにある「**一水四見(ケン)の譬え**」ということを説いておられます。この話が判ると、人間は度量が大きくなって「寛容」になれるようであります。その要旨は次のとおりであります。

先ず、「天人(テンニン)」は水を珠玉と見るというのであります。その意味は、天人が羽衣で水面を羽ばたくと、水滴が飛び散って玉となり、七つの色に光るというのであります。したがって、天人にとっては、水が珠玉に見えるのであります。

ところが「鬼畜」は、水を濃血と見ます。その意味は、鬼畜が水に入ったら、忽ち七転八倒して苦しんで死にます。したがって、鬼畜にとっては水が忌まわしい濃血に見えるのであります。

これに反して、龍魚は水を宮殿と見ます。龍魚にとっては、水ほど住みよい場所ありませんから、龍魚にとっては水は金殿玉楼であります。もし、誰かが龍魚に向かって、「お前の住んでいるその宮殿は、実は流れているのだよ」と言えば、龍魚は「そんな馬鹿なことがあるか」と一笑に付してしまうでしょう。

そして、最後に、人間は「水」を「水」と見るのであります。

そこで、道元禅師は、「**随類(ズイルイ)の所見不同なり**」と謂われたのであります。「天人」「鬼畜」「龍魚」「人間」という具合に、それぞれ類に従って見るところが違うのであります。したがって、人間も自分達が水を水と見るからといって、他の種族も同じく水と見なければならないと強いることは出来ません。人間も、やはり多くの種族の内の一つにすぎないのであります。人間だけが「水それ自体」とでも謂うべき客観的真理を知っているわけではありません。これを道元禅師は、「**本水(ホンスイ)なきが如し**」と言われたのであります。

珠玉でもなく、濃血でもなく、宮殿でもなく、水でもなく、本水（本当の水）というようなものが別にあるわけではないのであります。仮に、そのようなものがあるとしても、どうして人間がそれを知ることが出来るでしょうか。人間が知るのは、やはり「随類の所見」の一つとしての水に過ぎません。

然るに地上の人間は、随分思い上がって、宇宙を自分中心にばかり考えます。便所の糞壷が汚いものだとばかり思いこんで、それが、ウジ虫達にとっては無上の楽園であることを忘れています。

この思い上がった独りよがりの人間中心主義の思想が根本になって、人間の間にも独り

よがりの「非寛容」が出てくるのであります。

宇宙が人間の為に存在するかの如く錯覚したのと同じ原理で、世界や社会は一民族、一国家、一階級のために存在するかの如く思いこんで行動します。そこに、救われ難く対立する「二つの世界」の葛藤が生ずるのであります。

刻々に起こる国際的並びに国内的な一切の問題は、例外なく「**一水四見の理**」で動いています。左とか右とかの色分けで、自分の主張を絶対化し、自分だけが正義だと思いこむ悪習から速やかに脱却する必要があると思うのであります。したがって、正にアジアの道に参ずるべきであります。東洋思想には本当のゆとりがあると思うのであります。

また、今日の「**ロータリー教化セミナー**」という場合の「**教化**」という言葉にも注意が必要であります。今から約20年余り前に**評論家の草柳大蔵先生**が一燈園という修養団体で話されたことを御参考までに紹介しておきます。即ち、

パリで世界情報会議というのがありました。この情報という言葉を言語辞典で引いてみますと、伝達という意味はないのでありますが、研究社の新英和大辞典には出ています。**コミュニケーション**（Communication）**とかコミュニケート**（Communicate）と謂って、本来の意味は、思想を伝達するとか、聖体を授けるという意味、即ち、「**聖体拝受**」という意味であります。

これはキリスト教用語であって、「聖体拝受」でありますから一つの聖体に神が居ます。その神に繋がっている人、同じ神を信仰している人の間に伝達が行われる、これがコミュニケーションという言葉の内容であります。

そこで、アメリカの学者が言いました。

『我々は今一つの神を設定して、その神に対して認めるか認めないか、それから始めなければならない。そして、この一つの神以外のところに居るのは**エキストラ・コミュニケーション**（Extra-communication）である。これは「**蛮族**」である。したがって、キリスト教の原理をもって、この蛮族に属する人達をコミュニケーションの聖体拝受の世界に引き入れなければならない。コミュニケーションというのは、第一義は「**聖体拝受**」ということ、それは一つの神を皆が仰ぎ見ていることである。一つの神のもとにコミュニケーションが行われるのである。』

と言ったのであります。

まさにそこに「**教化**」という思想が出てくるわけであります。神を知らない人は「**教化**」しなければならない。アメリカ側の学者は、今日の情報工学の基礎にあるものはコミュニケーションだというわけであります。

その話が終わると、ドイツのヤスパースという哲学者が立ち上がりました。

『何を言うか。傲慢不遜も甚だしい。曾て、アーノルド・トインビーは、西洋文明は没落すると言った。その一番大きな原因は、「**非寛容**」の原理である。キリスト教文明が作った現在の西洋文明の基礎にあるものは、「**非寛容**」である。即ち、自分の神以外のものを認めない、それで教化をして自分の中に取り入れている。このようなことをしていると、非常に固い社会になってしまう。したがって、今の西洋文明を壊さないためには、「寛容」の原理をもったインド文明を取り入れなければならないというのがトインビーの文明論である。したがって、あなた方が**エキストラ・コミュニケーション**だと言っているところの方、即ち、共通の神を抱かないところの

方がコミュニケーションが実際に良いではないか。例えば、東洋はどうか。シンガポール、台湾、韓国、日本、言ってみれば皆儒教文化の国である。儒教文化の国の方が経済成長率が良いではないか。キリスト教国のアメリカ、ヨーロッパは経済成長率が低いではないか。ところがニックスといわれる国、儒教圏の国々は何れも高い経済成長を遂げている。何も経済成長率が高いから良いと言うのではないが、経済成長が高いと謂うことは、社会のコミュニケーション Communication がうまくいっていると謂うことである。活性化しているということである。生き生きしているということである。したがって、「**聖体拝受**」などということを言って、自分達の考え方しかないと思っていると、ヨーロッパ、アメリカは益々没落するだろう。』と言ったのであります。

実は、ヤスパースは、神を抱かない日本という国をよく知っているのであります。日本を良く勉強していて、日本には神などは存在しない。日本人は、結婚するときは神道でやって、人が死ぬと今度は仏教になって、12月末になると一晩だけキリスト教になる。では日本は**アニミズム**Animism（**精霊信仰**）かというと、**アニミズム**でもない。要するにいい加減なんだというのであります。彼は日本をよく知っているのであります。

ヤスパースは続けます。『日本はじめ東洋の国は「仁」の国である。キリスト教国は神を中心として「聖体拝受」によるコミュニケーションと言っているが、社会が活性化している国は、「仁」を中心としてコミュニケーションがあるというのであります。「仁」とは何か。書いて字の如く、人が二人居ると謂うこと、二人の人という意味である。Aさんは、自分が生きているのはBさんが居るからだと考える。Bさんは、自分が今日あるのはAさんのお陰だと考える。このようにお互いの存在を支え合っているというこのコミュニケーションが基礎にある社会が一番強い。

謂わば、神を中心にした「**聖体拝受**」におけるにおけるコミュニケーションはロジカル（Logical）のコミュニケーション、即ち、「**論理**」である。

これに対し、「仁」の方は、エコロジカル（Ecological）のコミュニケーション、これは「**生態**」という意味、即ち、**生きていく姿**である。

ロジカルとエコロジカル。「**論理**」のコミュニケーションと「**生態**」のコミュニケーションがある。これからは、謙虚にエコロジカルのコミュニケーション、即ち、「仁」の思想によるコミュニケーションを考え直すべきである』

とヤスパースは言うのであります。

実は、この考え方は、20世紀初頭のロータリーの考え方、即ち、ポール・ハリスが、「**ロータリーは寛容の中に宿る**」と説いた考え方に通じると思うのであります。「仁」は東洋の哲理、その核にあるものは「**寛容**」であります。「**聖体拝受**」は西洋の哲理、キリスト教の哲理、その核にあるものは「**非寛容**」であります。これは一神教の哲理であります。

ところで、1910年、**親睦と奉仕の調和の中にロータリーは宿る**、したがって、**ロータリーは寛容である**と大悟したポール・ハリスは、自ら敬虔なクリスチャンであり、キリスト教の「非寛容」の世界に住む人でありました。にも拘わらず、彼が敢えて東洋的な「寛容」の哲理を説いたということは誠に驚くべきことだと思うのであります。この意味にお

いて彼は偉大なる思想家であると思うのであります。彼自らはいみじくも、『自分はロータリーのデザイナーに過ぎない。ロータリーのビルダーは、チェスレー・ペリーである』と言っていますが、彼は単なるデザイナーではなく、正に偉大なる思想のデザイナーでもあると思うのであります。

このように致しまして、ポール・ハリスが1910年、『**ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る**』と大悟した境地は、まさに「ロータリーの神髄」に当たるものなのであります。

重ねて申し上げます。『**ロータリーとは寛容である**。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。決して自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の世界の中にロータリーはある。』これがポール・ハリスの**ロータリー理論**でありました。

私は、このことを『親睦なくして奉仕なし。奉仕なくして親睦なし』と集約しているのでありまして、親睦と奉仕とは、正に密接不可分な表裏一体の関係にあるのであります。

では、この「**ロータリーの核**」にある考え方、「**ロータリーの神髄**」を文章として明確に表現しているものは何か、と言いますと、それが「ロータリーの綱領」であります。したがって、”**綱領を知らずしてロータリーを説くことなかれ**”と言われているように、**綱領を身につける**ことはロータリアンであることの**絶対条件**なのであります。にも拘わらず、最近は、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということを耳にします。これは誠に由々しきことであります。昔は、このようなことは絶対にあり得なかったのであります。

曾て、昭和15年9月11日、東京ロータリークラブの解散を最後に軍閥の弾圧によって壊滅した日本のロータリー。その時の全日本のロータリアンの人数は僅かに2，142名。今のロータリーから見ると一地区にも満たない誠にささやかなロータリーではありましたが、皆、強者揃いの粒選りのロータリアンでありました。したがって、ロータリークラブは壊滅しても、ロータリー運動は止めなかったのであります。ロータリーはアメリカのスパイの手先だとか、フリーメイソンの隠れ蓑だとか謂われ、憲兵隊や特別高等警察（特高）に逮捕されるかも知れないという身の危険をも顧みず、恰も「**隠れキリシタン**」のようにロータリー運動を続けていった我々の先輩達の強靱な魂を忘れてはならないと思うのであります。

ところが、今はどうでしょうか。ロータリーの綱領も知らず、ロータリーの魅力も判らないままに簡単にロータリーを退会していく会員が増えています。これは明らかにロータリーの衰退を物語るものであります。ロータリーが衰退すれば、会員の増強など出来る筈がありません。会員を増強しようと思えば、先ず、ロータリアンの「内なる人」を強くして、魅力のあるロータリーを作ることであります。ロータリーに魅力が出来れば、会員は自然に増えるのであります。国際ロータリーが退会防止などという馬鹿げた恥ずかしいことを謂う必要もないのであります。

さて、**ロータリーの綱領**は、ロータリーの**般若心経**ともいうべきものでありますから、ロータリアンとしては、**大悟徹底的**に理解していなければならない問題なのであります。そこで、綱領には一体どのようなことが書いてあるのか。

ロータリーの綱領は、『ロータリーとは何か』ということを簡明直裁に書き上げたドキュメントでありまして、ロータリアンにとって一番大事なものなのであります。したがって、綱領を知らなければロータリアンとは謂えないのであります。

ロータリーの綱領は、二つの部分から成立っています。即ち、先ず最初の部分は、ロータリーを一言でいえば何か、ということを書いた部分であり、これが**綱領の本文**であります。ただ、本文は一言でロータリーを定義したものでありますから、非常に抽象的であります。したがって、何通りにも解釈されることにもなり、実質的な意味内容が千差万別なものになる虞があります。そこで、それを**補うために解釈原則(構成要素)**を1.2.3.4.と書いているのであります。

そこで、この綱領の第1から第4までの中で特に象徴的なものは何かと言いますと、それは、**綱領の第1の「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと」**という部分であります。これは、ロータリーにおける**親睦と奉仕**というものを判り易く文章化したものであります。

先ず、どのようにして親睦を作るのか。その方法は、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則であります。

先ず、1905年2月23日、ポール・ハリスによって**「親睦のための一業一会員制の原則」**が採択され、次いで1908年、アーサーF·シェルドンによって奉仕概念が誕生し、ここで、一業一会員制の原則は、**「奉仕のための一業一会員制の原則」**としても理論付けられたのであります。

(註)「奉仕のための一業一会員制の原則」とは、地域社会に存在する全ての職種の横断面を捉え、一つの職種から一人ずつ良質な人をロータリーに入会させ、その人をロータリーの代表(大使)として、その人の業界に奉仕の心を蔓延させることによって業界を改良しようとするもの。

ここに一業一会員制の原則は、**親睦と奉仕の二面性**を持つに至るのであります。これがロータリーにおける「基本原理の確立」であります。

要するに、**綱領の第1**は、**親睦と奉仕**の規定。親睦とは何か、奉仕とは何か、を規定しているのであります。

そして、これを受けて**綱領の第2**は、親睦によって作られた**「奉仕の心の内容」**を規定しています。Object of Rotary即ちロータリーの目的は一体何か。それは1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「ロータリーの道徳律」がその要旨において述べているように、それは**「倫理」**であり、**「愛」**であると謂えるのであります。これがロータリアンの**「個人倫理の確立」**であり、ロータリーが倫理運動であると謂われる所以であります。時に1915年のことでありました。

そして**綱領の第3**は、親睦によって作られた**「奉仕の心の適用」**即ち愛と倫理を実践すべきその実践の対象について規定しています。即ち、奉仕の心を家庭生活、職業生活そして社会生活に適用すべきこと、即ち、「奉仕の心の実践」を説いているのであります。

そして、このことについての象徴的なドキュメントが1923年のセントルイスの国際大会における**決議第23－34号**であり、奉仕の実践の在り方を詳細に規定しているのであります。これがロータリーにおける**「実践原理の確立」**であります。時に1923年のことであり

ました。

最後に**綱領の第4**は、奉仕の実践の対象の内、特に国際社会への実践を規定しています。世界平和のために、愛の心を全世界の地域社会に適用すべきことを説いているのであります。時に1921年のことでありました。

元来、**一般的奉仕クラブの綱領**としては、**第1に奉仕の心を作る**規定、**第2に奉仕の心の内容**の規定、**第3に奉仕の心の適用・実践**の規定によって完結するのでありますが、ロータリーは、**奉仕の心**を提唱するばかりに、心というものが、地域社会の延長線上に国際社会をも包摂することが出来ます。その結果第一次世界大戦を契機に国際奉仕の分野を開発したのであります。

そして、ロータリーの奉仕哲学を突き詰めていくことによって、ロータリーの国際奉仕というものは、人類平等の思想を広め、それをもって戦争の再発を防止し、人類の平和と繁栄に寄与するという大変重要な要素をもっていることを自覚するに至ったのであります。

そして、これは、ロータリーの奉仕の世界の**終着点**でありますから、何とかしてこれを**綱領**に書いておく必要があると考えまして、**1921年**のエディンバラの国際大会において、国際奉仕の概念を完成してこれを宣言し、その文言が、そのままの形で**綱領の第4**として付け加えられるに至ったのであります。

以上がロータリーの綱領のごく簡単な概要であります。この綱領をしっかりと心の中に植え付けていることが、ロータリアンであるための**絶対条件**なのであります。したがって、ロータリーの綱領は「**ロータリーの核にあるもの**」なのであり、正に「ロータリーの神髄」と謂うべきものなのであります。

以上を要するに、20世紀初頭に開発された様々な原理、即ち、1905年に確立されたロータリーの基本原理、それに基づく1922年に確立されたロータリーの組織原理、1915年に確立されたロータリーの個人倫理、1923年に確立されたロータリーの実践原理、そして1921年に確立された国際奉仕の実践原理、これらの諸々の原理の集大成がロータリーの綱領に凝縮されているのでありまして、その中心概念が正に「**親睦**」と「**奉仕**」なのであります。

このように致しまして、以上に申し述べましたことは、1923年時点において、綱領を指導理念としたロータリー運動全体の体系化が完成されたことを物語るものなのであります。まさに、ロータリーは**体系化された思考**なのであります。

私は、従来は例えば職業奉仕とか職業倫理とかロータリー財団とかのように個別的なテーマによりロータリーを説いて参りましたが、今回の「**ロータリーの神髄**」というテーマによって、初めて体系化されたロータリーの全体を俯瞰する話が出来たと思うのであります。

実は、この素晴らしいロータリーの全体系を、私達の先輩達は、創立後約25年間、四半世紀の内に創り上げたのであります。

ところが今はどうでしょうか。ロータリーの拡大、会員増強によって巨大な組織になるに従ってロータリアンの質が落ち、国際ロータリーの決議機関である規定審議会が民主主義の欠点である多数決原理によって衆愚政治化し、1968年以降、ロータリーの核にある原理原則を殆ど失ってしまったのであります。この衰退したロータリーを蘇(ヨミガエ)らせる起死回生の策は一体何か。私は、須(スベカラ)くあの熱く燃え

た「**20世紀初頭のロータリーに還れ**」と謂いたいのであります。

もし、このままに事態が推移するならば、ロータリーは壊滅してしまいます。ロータリーという形骸は残るかも知れません。しかし、最早それは魂の抜け殻、ロータリーの亡霊に過ぎません。昔、誰かが警告したように、Rotary rest in peace !「**平和の中に横たわるロータリー**」**即ち**「**死せるロータリー**」**にならないか。**

私は、これが杞憂に終わることをただこれ祈るのみであります。御静聴有り難うございました。

以上

あとがき

2001年、竹中会員の発案から始まった例会での「ロータリー３分間情報」、深川先生の『純ちゃんのコーナー』も７年の年月を重ねてきました。冊子も７冊を数えるに至りました。毎回お話しいただくのは、「３分間」ですが、そこには、ロータリー精神が凝縮され、積み重ねられた回数に「継続は力なり」という言葉を思い出します。

ここに７冊目となる冊子が完成しました。一つ一つのお話しの多くは、短くまとめていただいています。しかし、折に触れて開いていただくことによって、深遠なロータリー世界の神髄にきっと近づいていただけることでしょう。

最後になりましたが、献身的なご尽力をいただきました深川先生、小西会長、冨田幹事をはじめとする会員皆様、そして事務局のご協力に深謝いたします。

伊丹ロータリークラブ　2007～2008年度　雑誌・ロータリー情報委員会

純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅷ

目　　次

1.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１……2
2.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その２……3
3.『永遠の課題・職業倫理』その１……4
4.『永遠の課題・職業倫理』その２……5
5.『永遠の課題・職業倫理』その３……6
6.『永遠の課題・職業倫理』その４……7
7.『永遠の課題・職業倫理』その５……8
8.『永遠の課題・職業倫理』その６……9
9.『永遠の課題・職業倫理』その７……10
10.『永遠の課題・職業倫理』その８……11
11.『永遠の課題・職業倫理』その９……12
「職業奉仕の一断面」（１）　伊丹ロータリークラブ卓話……13
「心無罣礙」伊丹ロータリークラブ卓話……19
『佐藤千壽さんを偲んで』～永遠の課題・職業倫理～……25

序にかえて

竹中秀夫会員の発案で始まりました拙話『純ちゃんのコーナー』に就きましては、昨年度もロータリー情報委員長白井良夫会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満８年の歳月を閲することになりました。毎年のことながら、例会での３分間スピーチで果たして十分なロータリー情報を説き得たか否か内心忸怩たる思いでございます。

ところで、最近は、インターネットの普及により、ありとあらゆる情報が氾濫しています。殊に、ロータリーの世界を眺めても、ＲＩからの情報、ガバナーからの情報、他クラブからの情報、そして地域社会からの情報といった具合に様々な情報が提供されています。

しかし、ロータリアンの自己研鑽・切磋琢磨に役立つ情報となると意外に少ないように思うのであります。したがって、クラブとしては、ロータリアンがロータリーを理解し、それを実践することに役立つ良質な情報を積極的に提供するべきでありますが、これが意外に難しいのであります。したがって、今後も出来る限り良質な情報をロータリアンの皆様に提供出来るよう努めたいと思っています。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を１１回しか話すことが出来ませんでした。そのため、その内容が非常に乏しくなってしまいました。そこで、今回は１１回分の話に加えて、私の昨年２００８年１２月２５日の伊丹クラブ卓話『職業奉仕の一断面』、２００９年５月７日の伊丹クラブ卓話『心無？礙』、そして２００９年５月１８日の東京のＲＩ第２５８０地区職業奉仕セミナーにおける講演『佐藤千壽さんを偲んで～永遠の課題・職業倫理』の３篇の文章を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この一年間、私の拙い話を辛抱して聴いて下さったクラブの皆様方の寛容と友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員、白井良夫会員はじめクラブ事務局の皆様に心からなる感謝を捧げペンを擱きます。有り難うございました。

秋天に人々にただ謝するのみ　　高野素十

2009年9月　　深川純一

1.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その１

今回は、ロータリーにおけるリーダーシップについてその原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。即ち、一般に、リーダーシップ即ち、指導性と謂うとき、それは、指導する者と指導される者という上下の関係として捉えられていますが、ロータリーにおけるリーダーシップというのは、会社のような上下関係における指導性ではありません。

会社は命令服従の縦型社会でありますが、ロータリーは横型社会でありますから、ロータリーにおけるリーダーシップは、ロータリアン全てを平等対等なものと見る社会におけるリーダーシップを意味するのであります。

したがって、ロータリアン同士が平等対等であるのみならず、ロータリアンとクラブ会長との関係、クラブ会長と地区ガバナーや地区委員との関係も平等対等であります。そして、更に謂えば、ロータリアンと地区委員や地区ガバナーとの関係もロータリアンとしては平等対等なのであります。

何故なら、国際ロータリー即ち、ＲＩの会員はロータリークラブであって、ロータリアン個人は国際ロータリー即ち、ＲＩの会員ではありませんから、そもそも両者は上下関係どころか何らの関係もないのであります。したがって、敢えて両者はどのような関係かと謂えば、やはりロータリアンとしては、お互いに平等対等だということになるのであります。ただ、平等対等であることの意味を誤解しないように注意しなければなりません。例えば、私達の仲間は、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生に対していつも友達のような気持や態度をもって接していますが、今井先生を心から尊敬しています。今井先生もまた、私達から信頼され、慕われています。ここが大事なところであります。これをロータリーにおける「徳の支配」というのであります。重ねて申し上げますが、ロータリーは、権力服従の縦型社会ではありません。時として、縦型社会の意識を持ったロータリアンは、今井先生に接する私達の態度を見て、あんな偉い人に対して何と慣れ慣れしい態度かと、異様なものと感じて驚くようであります。しかし、ロータリーが横型社会であることを考えれば、元来、そのような意識を持つ方がおかしいのであります。

ただ、一点注意すべきは、「親しき仲にも礼儀あり」と謂われるように、年長者に対する礼を失してはならないことは当然であります。

2.『ロータリーにおけるリーダーシップ』その2

昨年に引き続きリーダーシップの話を致します。そこで先ず、noblesse oblige ノーブレス・オブリージという言葉について一言申し添えておきます。

これは、御存知のようにイギリスの貴族階級の根本精神を表した言葉でありまして、自分達の持っている貴族としての特権、財産などを国民や国家のために役立てる義務と責任があるということを意味する言葉であります。現に、あの第二次世界大戦におけるイギリスの将校達の戦死者の中には、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の出身者が圧倒的に多かったといわれています。このように、この言葉の根底に流れる思想は、非常に崇高なものなのであります。この故に、イギリスの貴族は、素晴らしいリーダーシップを発揮しているのであります。

しかし、イギリスは階層社会でありますが、ロータリーは、万民平等の世界であります。したがって、noblesse oblige の思想は、ロータリーにはそのままには当て嵌らないと思います。

ところが、日本ロータリーの精神伝統の中には、この noblesse oblige の思想が流れているようにも見受けられるのであります。これは、恐らく、戦前のロータリーが大実業家のみによって組織されたクラブであるという特殊な事情によるものであろうかと思うのであります。しかし、ロータリーの世界は、生まれながらの身分や特権とは無関係の世界であります。

確かに私達ロータリアンは、自分達はエリート即ち、選ばれた人であるという意識を持っているようであります。しかし、ロータリアンは、noblesse oblige のように生まれながらにして選ばれた人ではありません。同業者の中から、ロータリーが良質な人であると認めて、ロータリーが一方的に選び出した人なのであります。同業者が選んだのではなく、ロータリーが同業者の承諾も得ないで一方的に選び出した人なのであります。したがって、選ばれた人とは言ってもその意味は、noblesse oblige とは全く違うのであります。昔の日本のロータリーは、確かに超一流の実業家で組織されていましたから、所謂エリート即ち、選ばれた人と地域社会からも思われていたようであります。しかし、その選ばれた人という意味は、昔と今とでは全く異なるものであることを理解しなければなりません。

今のロータリーは、現象的にも、原理的にも、上流階級だけの組織ではありません。したがって、ロータリーは、noblesse oblige のように身分や特権があるから国家や国民に奉仕するというものではなく、あくまでもアメリカ的な万民平等の思想のもとに一人の人間として、個人として世のため人のために奉仕しようとするものなのであります。

3.『永遠の課題・職業倫理』その１

今回から暫くの間、「永遠の課題・職業倫理」というテーマでお話を致します。

実は、このテーマは、伊丹クラブの創立５０周年記念誌を出版するに際し、東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーが私に対し、『この記念誌の最後を締めくくる論文は、深川さん貴方が書きなさい、そして、そのテーマは「永遠の課題・職業倫理」がいいでしょう』と言って決めてくださったものなのであります。

さて、職業倫理の問題は、ロータリー職業奉仕の中核にある問題であり、これなくしてロータリーの職業奉仕は語れないのであります。したがって、これはロータリーの思想に関わる問題でありますので、職業倫理を論ずるときには、先ずロータリーの歴史の原点から考察しなければなりません。そこで、先ず、ロータリー発展の軌跡を簡単に振り返ってみたいと思うのであります。

先ず、１９０５年、ロータリーは、「一業一会員制の原則」と「規則的例会出席の原則」という二つの基本原則を確立しました。そして、その１０年後の１９１５年にはサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」を採択してロータリアンの個人倫理を確立致しました。これは、今日のテーマと重大な関係があります。

更に、その７年後の１９２２年、ロサンゼルスの国際大会において「国際ロータリー定款・細則及び標準ロータリークラブ定款」を採択してロータリーの組織原理を確立しています。

そして、その翌年の１９２３年、セントルイスの国際大会において「決議２３－３４号」を採択してロータリーの実践原理を確立しました。

更に、その４年後の１９２７年、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕という四大奉仕部門を確立して原理探求のロータリーから実践のロータリーへ邁進して行ったのであります。

これを要約致しすと、先ずロータリーの基本原理の確立に始まって、個人倫理の確立、組織原理の確立、実践原理の確立そして４大奉仕部門の確立。これらは全てロータリー創立後２５年間、即ち、４分の１世紀の間に実現された素晴らしい魅力に満ちたロータリーでありました。

ところが、今はどうでしょうか。ここ僅か百年のロータリーの歴史を顧みても、ロータリーは衰退の一途を辿っているのであります。あの二十世紀初頭の高々と理想を掲げ、それに燃えて行動した素晴らしいロータリーは、一体何処へ行ってしまったのでしょうか。今、影も形もありません。そこで、何故そうなったのかについてこれから検討していきたいと思うのであります。

4.『永遠の課題・職業倫理』その２

前回は、２０世紀初頭に私達の先輩達が築き上げた素晴らしいロータリーが消え失せてしまったと申し上げました。では、あの素晴らしいロータリーは復活するのでしょうか。復活するとすれば、それは一体何時のことなのでしょうか。

１０年後か１００年後かそれは判りません。ただ、しかし、一つだけはっきりしていることは、あのロータリーがもっていた優秀な思想や原理・原則のように目に見えないものは、一旦私達の現象の世界即ち、目に見える世界から消え失せても、本質の世界即ち、目に見えない世界において存在し続けます。そしてそれは時代を超越して、やがてその思想とか原理･原則を受け入れる人が現れた時、目に見えるものとして現象の世界に復活するのであります。

一つの例え話をします。二人のお坊さんが刀をもって喧嘩をしました。一方のお坊さんが刀で他方のお坊さんの首を刎ねました。その首が中空に飛び上がって中空に止まり、やがてて２０００年後の他のお坊さんの首にスポッとおさまったと謂います。この公案を何と説くか、という禅問答のような問題であります。

回答は色々あるでしょうが、私の回答を申し上げましょう。

中空に飛び上がった首を思想・原理と考えて下さい。首を切り取られて倒れた胴体を組織・制度と考えて下さい。胴体は倒れて、目に見える組織や制度は消滅しますが、目に見えない優秀な思想とか原理は本質的なものでありますから時代を超越して、やがてその思想とか原理･原則を受け入れる人が現れると、再び現象の世界に復活してこの世の中に蔓延していくという例え話であります。

そんなことが現実にあるのか。

実は、紀元前３世紀から紀元後３世紀に亘って隆々と栄えた古代ローマ帝国は、人間の倫理の頽廃によって、紀元後３世紀に突如として滅亡しました。しかし、ローマ人は、その滅亡の直前に素晴らしい法律を作っていました。「ローマ法」であります。そのローマ法の中に籠められている所有権の原理は、目に見えない良質なものであったが故に、目に見えるローマ帝国が崩壊しても消滅せず、１７００年の時代を超越して現代の日本の民法第２０６条にそのままの形で復活しているのであります。恰も、イエスキリストの教えが２０００年の歳月を超越して今の世に蔓延り、道元禅師の正法眼蔵の提唱が６５０年の歳月を閲して未だに私達の心の糧になっているのと全く同じことなのであります。

したがって、今失われてしまった２０世紀初頭の素晴らしいロータリー。その中でも職業奉仕の中核にある職業倫理もまた何時かは必ず復活するのであります。したがって、それはまさに永遠の課題なのであります。だからこそ、佐藤千壽先生は、「永遠の課題・職業倫理」と言われたのであります。

5.『永遠の課題・職業倫理』その３

今、ロータリーは、２０世紀初頭に形成された素晴らしい原理・原則の殆どを失ってしまったと謂えるのであります。昔、文豪バーナードショウが皮肉ったように、まさに「ロータリーよ、何処へ行く」という感じであります。このままに推移すればロータリーは滅亡します。

何年か前に或るパストガバナーが言いました。"Rotary rest in Peace" 平和の中に横たわるロータリー即ち、死せるロータリー、と。このように致しまして、ロータリーは、今、衰退の一途を辿っていると思うのであります。

では、このロータリーに起死回生の策はあるのでしょうか。

昨今のロータリーは、職業人の集まりであるにも拘わらず、現在の職業社会は職業の倫理が頽廃しています。したがって、先ず緊急の課題は、職業奉仕の中核にある職業倫理を高めることであります。

そこで、そのための基本前提となる原則があります。それは、１９０５年に立てられた「一業一会員制」と「規則的例会出席」という二つの原則であります。

実は、この二つの基本原則は、職業奉仕の実践、更により根源的には職業奉仕の中核にある職業倫理の実践の基本前提なのであります。したがって、「職業倫理」を語るには、この二つの基本原則から検証しなければなりません。

先ず、１９０５年、初期ロータリーには、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もなかったのであります。そこには、クラブ会員が皆で仲良くして助け合う「親睦だけの世界」がありました。この助け合うということの具体的な意味は何か、と申しますと、ロータリアンは、皆職業人でありますから、自分の企業経営上の悩みをクラブに持ち寄って智慧を出し合ったのであります。「うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ。何かいい考えはないかな」と言いますと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆それぞれの所属する業界が違います。したがって、それぞれの業界の発想も違います。

そこで、「そのことならうちの業界ではもう解決済みだ。こうして御覧」と言って教えてくれます。「有り難う」といって早速そのアイディア（ノウハウ）を企業経営に役立てます。

また或る問題については、皆未解決であった場合には、三人寄れば文珠の知恵と謂いますから、皆で衆知を集めて解決して行ったのであります。

このようにして皆が知恵を出し合い、アイディアを交換して助け合ったのであります。したがって、当時は、恰も、クラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、会員達はこの助け合い運動によって次第に豊かになって行ったのであります。

6.『永遠の課題・職業倫理』その４

前回は、会員達の助け合い運動によって恰もクラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、皆が次第に豊かになって行ったということを話しました。そして更に，この助け合いの心から他人に対する思いやりの心が生まれ、自分達が豊かになるためには、自分のことだけを考えるのではなく、人のことも考えなければならないことに気付き、更に、地域社会の人達も豊かになるにはどうすればよいかを考えるようになりました。そして、そこから「世のため人のための奉仕の考え方」、即ち、倫理の問題を考えるようになったのであります。

このように致しまして、企業経営上の発想の交換及び世のため人のための奉仕のアイディアの交換などの「発想の交換機能」Exchange of Ideaの機能によって、やがてロータリーは、１９２７年、職業奉仕という類い希なる概念を生み出すに至ったのであります。

このクラブ例会における「アイディアの交換機能」「発想の交換機能」こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた「本質的な機能」でありまして、このことは当時のクラブの定款にも「発想の交換」Exchange of Ideaという言葉が記されていたのであります。

我が国でも、昔、私が入会した頃のロータリークラブには、未だこの発想交換機能が残っていました。私は、弁護士のほかに学校の理事長をしていますが、当時、労働運動華やかなりし頃でありましたから、団交のノウハウを実業家の先輩によく教えられたものであります。

しかし、今のクラブにはこのような情景は全く見当たりません。したがって、今日の日本のロータリアンは、この発想の交換による例会出席の重要性をどれほど認識しているでしょうか。答えは著しくネガティヴであります。

多くのロータリアンが、例会では、食事をとり、報告を聞き、卓話を聞いて帰って行きます。ただ、それだけであります。中には卓話も聞かずに食事だけして帰って行く人達も沢山居ます。例会における企業経営上の知恵の交換・発想の交換（Exchange of idea）は全くありません。それどころかロータリアンに自己研鑽・切磋琢磨の意識すらないようであります。このような状態では職業奉仕は中々理解出来なかろうと思うのであります。

翻って、２０世紀初頭のロータリアン達はどうであったか。例会の重要性を強く認識して、自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上の発想の交換やをしていたのであります。そして、そのような例会活動の中からロータリー的企業管理論とでもいうべき原理を開発し、１９２７年、遂にその実践原理を職業奉仕と名付けたのであります。そしてその中核にあるのが職業倫理なのであります。

7.『永遠の課題・職業倫理』その５

前回は、２０世紀初頭のロータリアン達は例会の重要性を強く認識して自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上の発想の交換をしていた結果、そのような例会活動の中から職業奉仕の原理を開発し、その中核にある職業倫理を実践したと申し上げました。その結果、その２年後の１９２９年、アメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックの時にはロータリアンは一人も倒産しなかったのであります。このため職業奉仕は不況期に強い哲学だと謂われているのであります。これはまさにクラブ例会における発想の交換によって職業奉仕の原理を開発し、その職業倫理を自らの企業に実践していった功徳なのであります。だからこそ、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕、したがってまた職業倫理実践の基本前提なのであり、職業奉仕の実践は、先ず例会出席から始まるのであります。

さて、国際ロータリーがロータリアン個人の職業倫理を確立したのは、１９１５年のサンフランシスコ国際大会の決議であります。ということは、クラブレベルにおいては、既にそれ以前から個人倫理の提唱は始まっていたのであります。

では何故、ロータリーは「職業の倫理」を提唱したのでしょうか。

実は、職業倫理の提唱については、既にロータリークラブの創立された翌年即ち、１９０６年春のドナルド・カーターの物語にまで遡ることになります。

Donald Carter という人の職業分類はアメリカ流に言えば特許専門の弁護士、日本流に言えば弁理士であります。１９０６年４月、シカゴクラブの二代目会長 Albert White の時、Frederic Tweed が Donald Carter にクラブへの入会を勧誘しました。Donald Carter はクラブの「互恵主義」即ち、助け合い運動の説明を聞いて、

『君達は、お互いに助け合って、豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制の原則であれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持たない一般地域社会の人達は一体どうなるのか。

私達は、この地域社会に生まれ、地域社会に育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に何らの恩返しもしない。何らの足跡もの残さないで、自分達だけが助け合って、隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は永続性がないだろう。私は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことは出来ない。』

と言って、きっぱりと入会を断ったのであります。

これを聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。

『Carter の言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう』と言って、職業人の親睦のエネルギーを世のため人のために使おうと考えるに至ったのであります。

実は、この Donald Carter の刺激から出てくるポール・ハリスの反省から、ロータリーにおける奉仕という考え方が生まれたのであり、これが、ロータリーにおける「倫理性の萌芽」でもありました。と同時に、それは、ロータリー拡大の系譜の始まりでもありました。何故なら、奉仕を考える倫理的なクラブであれば、シカゴだけにあるべきものでなく世界中にあって然るべきものだからであります。

8.『永遠の課題・職業倫理』その６

前回は、Donald Carter の警告によるポール・ハリスの反省の中からロータリーにおける奉仕という考え方が生まれたのであり、これがロータリーにおける倫理性の芽生えであり、同時にそれはロータリー拡大の系譜の始まりでもあったと謂うことを申し上げました。

要するに、１９０６年以前にはロータリーに世のため人のためという考え方即ち、奉仕とか職業倫理という考え方は全くなく、したがってまたロータリー拡大の理念もなかったのであります。ただ、職業人の淋しさ、心の渇きを癒すためにロータリークラブを作ったに過ぎなかったのであります。このことに就きましは、後年、昭和１０年にフィリピンのマニラにおいて第３回太平洋 Regional Conference が開催されましたが、それに出席するために、途中で日本に立ち寄ったポール・ハリスが、『自分が１９０５年にロータリークラブを作ったのは格別の意味があったのではなく、ただ淋しかったからだ』と言っていることから明らかであります。

例え話をしますと、「蕾」という字は草冠りに雷と書きます。即ち、大自然の雷のエネルギーが花を咲かせるのであります。したがって、雷は地上に花を咲かせる空からの使者であります。これと同じように、Donald Carter の警告による刺激が、まさに雷のように、それまで親睦だけの世界に閉じこもっていたロータリーに世のため人のための奉仕の花を咲かせたのであります。

要するに、１９０６年以前にはロータリーに世のため人のための奉仕という考え方は全く存在しなかったのであります。ただ、職業人の淋しさ、心の渇きを癒すためにロータリークラブを作ったに過ぎなかったのであります。それはまさに親睦と相互扶助だけの世界でありました。

ところが、１９０６年春に至って、Donald Carter の外部的な刺激によってロータリーの世界に我らの親睦のエネルギーを世のため人のためにという奉仕の考え方、即ち倫理性が出てきたわけでありまして、これは、それまでのロータリーから見ると全く異質の要素でありました。

しかし、このことが実はロータリー発展の起爆剤的機能を果たすことになります。即ち、クラブ例会で企業経営上のアイディアを交換することによって企業経営上のノウハウを開発し、それを交換すると共に１９０８年には世のため人のための奉仕のアイディアも交換するようになったのであります。つまり、親睦だけの単なる仲良しクラブではなく、世のため人のために役立つ人を育てようと謂う所謂倫理的色彩が出てきたわけであります。そこで、企業経営について、職業人として為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合うという所謂職業倫理の提唱をするようになり、この精神的な機能が経営相談所的機能と相俟って、会員達の企業は益々栄えていったのであります。

要するに、当初親睦だけの集まりであったロータリークラブに世のため人のための奉仕の考え方が入って来て、企業経営が世のため人のためという倫理性を帯びるようになり、倫理的な企業経営を実践するようになったのであります。

9.『永遠の課題・職業倫理』その７

前回は、当初親睦だけの集まりであったロータリークラブに世のため人のための奉仕の考え方が入って来て、企業経営が世のため人のためという倫理性を帯びるようになり、倫理的な企業経営を実践するようになったということを申し上げました。まさに、ロータリー運動が倫理運動になったわけであります。

そして、このクラブレベルにおけるロータリアンの個人倫理の集大成として１９１５年のサンフランシスコの国際大会におきまして『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』所謂『ロータリー道徳律』１１ヶ条を採択するに至ったのであります。これがロータリーにおける職業倫理の確立の問題であり、それ以後、ロータリーは、その運動の核として誠に高潔な職業倫理を提唱してきたのであります。

この職業倫理訓の思想が日本に継承されたのは１９２８年即ち、昭和３年のことでありました。昭和３年に創立された大連ロータリークラブ(満州)の古沢丈作氏がロータリー思想の源流を探求して、この職業倫理訓を発見し、これを日夜お経の如く熟読玩味して完全に自家薬籠中のものとなし、この１１ヶ条の英文を５ヶ条の日本文に書き改めたのであります。これが日本ロータリー史上有名な「大連クラブのロータリー宣言」であります。そして、この『大連クラブのロータリー宣言』が戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。参考までにその全文を記します。

１．須く事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し、事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に予せず。

２．成否を曰うに先たち退いて義務を尽さんことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う。最も能く奉仕する者最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず。

３．或は特殊の関係を以て機会を壟断し、或は世人の潔しとせざるに乗じて巨利を博す。これ吾人の最も忌む所なり。吾人の精神に反してその信条を紊るは利のために義を失うより甚だしきは無し。

４．義を以て集り、信を以て結び、切磋し、琢磨し、相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。然れども党を以て厚くすることなく、他を以て拒むことなく、私を以て党する者にあらざるなり。

５．徒爾なる角逐と闘争とは世に行わるべからず、協力以て博愛平等の理想を実現せざるべからず、然り吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す、吾がロータリーの崇高なる使命茲に在り。その存在の意義亦茲に存す。　　以上、戦後の日本のロータリーでは、東京浅草ロータリークラブの『玩具職業人倫理宣言』があり、最近では、１９８３年、兵庫の第２６８０地区が地区大会特別決議として採択した「ロータリー職業訓」という倫理宣言があり、最も近くは１９９５年６月２８日仙台青葉ロータリークラブの『職業倫理宣言』があります。これらは、いずれも職業奉仕の原理に基づいた素晴らしい提唱であります。

10.『永遠の課題・職業倫理』その８

前回は、アメリカで確立された職業倫理訓の思想が１９２８年に日本へ継承され、その心が古澤丈作氏によって「大連クラブのロータリー宣言」となって実を結んだことを申し上げました。そこで、再び初期ロータリーの職業倫理に話を戻します。

今、人類文化史をグローバルな視点から眺めてみますと、人類が地球上に現れてから何万年か経っていますが、神様は、それぞれの時代に一つの民族に対して全人類の幸せに貢献する使命を与えて下さっているようにも思うのであります。

例えば、紀元前５世紀までの古代バビロニア文明。これは紀元前５世紀に突如として崩壊して、バビロニア文明の人類支配はこの時をもって終わっています。

次に、紀元前３世紀から紀元後３世紀にかけての古代ローマ帝国による人類文化史の支配とその指導性。これはエンジニアリングを中心とするものでありましたが、これも紀元後３世紀にローマの貴族が或る原因によって滅亡すると、それ以来ローマ人は人類文化史に二度と指導性を発揮したことはなかったのであります。

また、インド人も紀元後１０世紀頃の歴史書を見ると、この地球上で一番正直で高潔な生活を送っているのはインド人をもって最高とするという記述があり、インド人もその頃、歴史的に指導性を発揮した時期があったのであります。

近世に至っては、スペイン、ポルトガル、イギリス、フランス、イタリア等の指導性がありますが、しかし、この時代には、５０年以上に亘って指導性を発揮した民族はなかったのであります。

ただ一つの例外はイギリスでありました。イギリスは、１８世紀から２０世紀にかけて２００年に亘ってその指導性を発揮してきました。これは１９世紀に提唱されたグラスゴー大学のアダム・スミスの国富論によって、イギリスが自由貿易主義をとったことが大きな原因であると謂われているのであります。

今、ロンドンの至る所に素晴らしい建築物が残っています。バッキンガムパレス、ウエストミンスター寺院その他沢山の素晴らしい建築物が残っています。これは、彼らが如何に偉大なものを造ってきたかということを物語るものであります。

しかし、これらは、全て過去のイギリス人の栄光の残骸でありまして、現在及び未来のイギリス人を語るものではありません。

日本も今や偉大なるものを造ろうとしています。そして、今の状態を出来るだけ長続きさせなければなりません。しかし、我が国も戦後３０年にして世界第二の経済大国を築き上げたのではありますが、アメリカの例に洩れず、その物質的繁栄に伴って既に職業倫理の衰退が始まっていることは御承知の通りであります。

最近、職業倫理に違反する事件、企業の不祥事が頻発しています。例えば、少し古いところでは牛肉の産地・品質を偽装した雪印食品事件に始まり、姉歯建築設計事務所の構造計算偽造事件、そしてミート・ホープの牛肉偽装事件など職業倫理に違反した事件は、誠に枚挙に暇がないのであります。このような状態では、やがて日本も経済的指導性を失ってしまうと思うのであります。もしそうなれば、日本は二度と国際社会に指導性を発揮することは出来ないと思うのであります。

11.『永遠の課題・職業倫理』その９

前回は、職業人が職業倫理を失えば、やがて日本も経済的指導性を失ってしまうであろうということを申し上げました。

では、過去を顧みて日本が経済的に今日の大をなした原因は一体何か。

それは、正直、勤勉、学ぶ心即ち、教育熱心であるということであります。そのためにも日本人が今日の大をなした元である、正直であることを忘れてはならないのであります。正直こそ、人間関係を信頼感によって結びつける原点であります。そして、勤勉であること、学ぶ心を持つこと即ち教育熱心であること、この三つが日本が経済的に今日の大をなした重要な原因なのであります。そうだとすれば、日本の若い世代の人達がこれを失ったときに日本は国際競争力を失うに至ることになります。額に汗して働かない民族に繁栄はありません。豊かになって驕り高ぶった大人達が職業倫理を忘れて、バブルの崩壊によって目が覚めたことは、まだ私達の記憶に新しいところであります。

昔、明治政府が教育を重視したことは、日本の近代化の原動力となったと謂えるのであります。曾て、アジアが近代化を急いで失敗したのは、デモクラシーという精神的なバックボーンがない上に、工業化するための技術の知識もなかったからだと思われるのであります。アジアは、再び基礎から近代化を進めて来ましたが、その第一は、先ず教育に取り組むことでありました。その見事な成功例がリー・クワンユー首相のリーダーシップによるシンガポールでありました。シンガポールは、今もアジアで素晴らしい指導性を発揮している数少ない国の一つであります。

教育が如何に大事か。曾て日本が戦後３０年にして世界第二の経済大国を築き上げた時、アメリカ人やイギリス人は日本人の勤勉な働きぶりを評して、「アルコール中毒 Alcoholic」を捩って「働き中毒 Worker holic」だと皮肉りました。

しかし、これについては、May be or May be not. そうかも知れないし、そうでないかも知れない、と言わなければなりません。全ての事柄については、その原因を探ってみなければならないのであります。

確かに、日本人は働きすぎるかも知れません。しかし、その働きすぎることの原因、即ちその種は一体誰が蒔いたのか。

今から１００年余り前の日本が近代化される明治維新の頃、日本の近代化に指導性を発揮したのはイギリス・アメリカの先輩達であります。彼らは、日本の先輩達に対して、何を教えたかというと、

第１に、勤勉であれ。第２に、正直であれ。そして、

第３に、学ぶ心を持て。つまり教育熱心であれ。ということでありました。

勤勉で、正直であるためには、人に対する思いやりの心がなければなりません。
日本は、これを１００年に亘って続けて来て、世界第二の経済大国を築き上げたのであります。この点はよく覚えておかなければなりません。

これに対して現在のアメリカはどうでしょうか。確かに大国ではありますが国家の経済力としては、もう往年の力を持っていないのであります。

「職業奉仕の一断面」（1）　伊丹ロータリークラブ卓話

2008.12.25

深　川　純　一

今日は、今年度上半期の最終例会であります。実は、私達の伊丹クラブには、昔から色々とよい伝統がありました。その一つに、年の暮の最終例会には、職業奉仕のフォーラムをするという慣例がありました。それはどういう意味かと申しますと、ロータリーは職業人の集まりであり、したがって、「ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり」と謂われていますように、一年の締めくくりとして、職業人としての生き様を振り返り、お互いに職業奉仕の心を確認し合って、また来春から頑張ろうと心を新たにする意味があったのであります。

そして、その晩は、忘年会をして親睦の一夜を過ごしたのであります。このようにして、親睦と奉仕の調和を図ってきたのであります。

ところが、何時知らずこの古きよき伝統が消えてしまったのであります。勿論、これは、クラブ理事会の決定するところでありまして、標準クラブ定款第９条には「このクラブの管理主体は、これを理事会とする」という大黒柱の規定があり、クラブ管理の全てのことは理事会が取り仕切っていくことになっていますから、理事会が決めた以上、已むを得ないことではあります。しかし、古きよき伝統が失われていくのは淋しいことであります。これも、ロータリーは、世代の交代に失敗すると謂われていることの一例であろうかと思います。

そこで私は、先々週、卓話を頼まれましたときに一応お請けしましたが、この伊丹クラブの伝統を思い出し、今日は最終例会だから職業奉仕の話をしようと思った次第であります。

先ず、一首の都々逸から話に入っていきたいと思うのであります。

「お酒飲む人、花なら蕾、今日も酒、酒（咲け、咲け）、明日も酒（咲け）」

今から丁度２ヶ月前の１０月２３日、今春伊丹クラブの創立５０周年記念祝賀会に来て下さった東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーがお亡くなりになりました。満９０歳、まだまだお元気であられたので残念なことでありましたが、この佐藤さんは、終生、酒を愛した人でありました。

酒が好きなら道楽もしただろうと人は言うかも知れません。「明けの鐘、ゴンと鳴るとき三日月型の櫛が落ちてる四畳半」なんてことは、酒飲みの私には何のことだかさっぱり判りませんが、佐藤さんもこの方の道楽は全くなかったのであります。

ひたすら酒を愛し、美術を愛し、そして自らの職業を愛した人でありました。そして、一介の中小企業の社長から一代にして世界的な企業に育て上げたのであります。その成功の物語に一貫して流れる佐藤さんの経営の理念は、ロータリーの職業奉仕の哲学でありました。したがって、それを語るには、先ず、企業の中核である佐藤さんの「経営理念」を見なければなりません。ロータリーの綱領と同じく、そこには佐藤さんの経営者としての基本的な考え方が見事に集約されているからであります。

佐藤さんは、今から４８年前の１９６０年、千住金属工業の社長に就任しましたが、その時自ら宣言した「経営の理念」として「会社は、人間完成の道場である」と謳っています。これはロータリーの始祖米山梅吉翁が「ロータリーの例会は人生の道場である」と喝破された境地と見事に合致するのであります。

この経営理念が、１９６０年当時は未だ売上高１０億円にも満たない中小企業であった千住金属工業を２００７年期末には売上高５７９億円、経常利益９３億円の世界的企業に育て上げたのであります。この経営理念が示すように佐藤さんは理想主義者でありました。しかもその実践者でありました。そして、佐藤さんは、常々、ロータリーに哲学があるように、事業には哲学がなければならないと謂っておられたのであります。この経営理念が具体的にどのような形で実現されているのか、今日はその実践の軌跡を辿ってみたいと思うのであります。

そして、この経営理念の集約として、「私は、最大の会社となることを望まず、最良の会社となることを祈りにも似た心をもって切望する」と謂っておられるのであります。これは、ロータリーの職業奉仕の根底に流れる質の探求の思想であります。そしてまた、これは思想家エマーソンの言葉「文明の価値は何によって測られるか。都市の大きさや人口、収入の多寡ではない。その文明が如何なる人を作ったかによって文明の価値は測られる」という言葉と共通の境地に立つものであります。

実は、この言葉は、１９７４年、佐藤さんが東京第２５８０地区のガバナーに就任された年の国際ロータリー会長ウイリアム・ロビンスの言葉に通じるものなのであります。即ち、「ロータリーの価値は何によって測られるか。ＲＩやクラブの規模の大小や会員数の多寡ではない。そのクラブが如何なる人を育てたかによってロータリーの価値は測られる」とロビンスは断言しているのであります。したがって、ここに、エマーソン、ウイリアム・ロビンス、佐藤千壽という思想の系譜を見取ることが出来るのであります。

佐藤さんの経営理念の実践については、到底短い紙面に語り尽くすことは出来ませんので、今日は、その内の幾つかのことだけを申し述べたいと思います。

先ず、佐藤さんは、一昨昨年、ライブドアの敵対的企業買収の事件が起きた時、ＲＩ第２５８０地区（東京）の職業奉仕特別研修会で講演され、「会社は誰のものか」という視点からアメリカ型資本主義を批判され、ロータリーの職業奉仕のあるべき姿を熱っぽく説かれたのであります。この講演には、私にも意見を出すようにと求められましたので、書面をもってかなり長文の意見を申し上げましたところ、佐藤さんも大変賛同して下さり、これが契機となって職業奉仕についての意見交換を纏めた『双鯉雁信帖』を共著で発刊することになったのであります。

ご存知のとおり、市場原理に委せたアメリカ型資本主義の結末が、昨今のサブプライムローン始まる今日の世界的不況となっていることは明らかであります。これは、人間が徒に金を求めた結果であります。フィンランドの金融危機も全く同じ、職業倫理の頽廃の結果であります。

佐藤さんは、「会社は誰のものか」という問いかけについて、会社の「経営理念」の冒頭において、「会社は、社員共同の生活の源泉であり、社会は会社が有用な製品を供給す

ることを期待している」と述べ、それなるが故に、会社は第一にそこで働く社員のものであり、その会社の製品を利用する顧客のものであると考えているのであります。

しかし、佐藤さんは、企業が儲けることは否定しません。企業は儲けなくして生きていくことは出来ませんから、これは当然のことであります。企業の目的は第１に利潤の追求であります。

企業活動には社会インフラが必要であります。適正な利潤を上げ、インフラ整備の原資となる税金を納めなければなりません。また、納税以外の社会貢献にも資金が必要であります。このような企業活動の結果として生まれた利潤から資金提供者である株主に配当するべきだというのが佐藤さんの考え方であります。これは正にロータリーの職業奉仕の企業管理論の原理そのものであります。

もっとも、佐藤さんは、アメリカ型資本主義には賛成できないとしながらも、アメリカの企業を全面的に否定はしていないのであります。寧ろ、アメリカの企業にも学ぶべき点は多いと考えているのであります。

佐藤さんが特に模範としている企業は、医薬品・健康用品の巨大企業ジョンソン・アンド・ジョンソン（Ｊ＆Ｊ）であります。この会社が１９３４年に発表した「我が信条」と題する「経営理念」には、会社が負うべき責任として、

第１に消費者に対する責任。

第２に社員に対する責任。

第３に地域社会に対する責任。そして

第４に株主に対する責任の四つを挙げています。

この「株主に対する責任」を第４番目においていることは特筆に値すると思うのであります。何故なら、株主至上主義のアメリカ型資本主義から言えば、株主に対する責任が第一であるべきだからであります。

実は、１９８２年、このジョンソン・アンド・ジョンソンが「消費者に対する責任」を第一においていることを示す事件が起こりました。それは、この会社の製造・販売した鎮痛剤「タイレノール」に何者かが毒物を混入したため７人の死者が出たのであります。しかし、ジョンソン・アンド・ジョンソンには、毒物混入に対する過失は一切なかったのでありますが、経営理念の第１の「消費者に対する責任」を果たすため、当時の経営者は、全商品を回収し廃棄したのであります。

もしも第４番目の「株主に対する責任」を優先していたならば、莫大な損失を発生させる商品の回収・廃棄など実行できなかったと思われるのであります。

兎に角、ジョンソン・アンド・ジョンソンには、過失責任はなかったのであります。しかし、当時の経営陣は、自社の「経営理念」に照らし合わせて、迷うことなく商品の回収・廃棄に踏み切ったのであります。アメリカにもこのような職業倫理に徹した企業があることを忘れてはならないと思うのであります。

佐藤さんは、このジョンソン・アンド・ジョンソンを模範としていましたから、「顧客が喜ぶことの結果として利益があるのであって、顧客が喜ばない形での利益は本来あり得ないし、長続きもしない」と考えているのであります。この顧客第一の考え方がありますから、社員が「こうすれば儲かりますよ」と言って来ても真剣に取り合うことをせず、「こうすればお客さんのためになりますよ」と言って来れば真剣に耳を傾けるといった具合なのであります。

実は、これは、まさにロータリーの職業奉仕の説くところであります。即ち、企業というものを如何に管理するかのポイントは、企業を権限論的に見ないで機能論的に見ることであります。即ち、企業というものは、それを構成する人達が、それぞれの役割を十分に果たす事によって円滑に運営されます。したがって、そのうちの一人が欠けても、その限りにおいて企業運営の円滑さが阻害されます。この意味では、社長職、課長職、タイピスト職、工員職その他諸々の職務を機能論的に見る限り、すべて平等対等な『役割の配分』に過ぎないのであります。

そして、企業の構成員各自が自分の役割を十分に果たすことによって、初めて企業は発展するのであり、企業が発展することによって、企業で働く人達も潤うことになるのであります。

このような考え方からすれば、企業の利益の配分方法も、通常は企業の総売上高から、先ず公租公課と人件費その他の諸経費を控除した残りを三つの分野に配分します。即ち、

第１に会社の内部留保として準備金の積立。第２に役員報酬。第３に株主への配当金を支払います。これが従来の利益の分類法であります。ところが、ロータリーは、先程の企業を機能的に見る機能論的視点から、第４に、従業員にも特別賞与を支払うべしと説くのであります。その理由は、企業を機能論的に見れば、皆が役割を果たすことによって、初めて利益を生み出すことが出来たのでありますから、利益を生み出した原因となった全てのところへ利益を還元しよう、と謂うのであります。これは、まさに仏教の因縁論に基礎をおいた東洋的発想であります。そうだとすれば、この考え方の延長線上に、場合によっては、『顧客』にも利益を還元する場合があってもよいことになります。

この考え方を基本として、ジョンソン・アンド・ジョンソンや佐藤さんは、企業は顧客あってのものだから信用と謂うことを最も重要な要素だと考えて、顧客第一主義をとっているのであります。そうでなければ、企業の社会的責任なども果たされないと考えるのであります。

これに比べると最近の日本の業界における一部の職業人の企業管理は如何なものでありましょうか。職業倫理の頽廃は誠に目に余るものがあります。恥ずかしい限りであります。一々会社名を挙げる気にもならないほど次から次へと顧客を騙す各種の偽装事件が頻発しています。これは正に人間が倫理を忘れ、徒に金を求めるようになった結果であります。

職業倫理に関して、もう一つのエピソードを紹介しておきます。１９５０年代のこと、佐藤さんの千住金属工業の兄弟会社である佐藤金属が電電公社にハンダを納入していました。佐藤金属は商社でありますから、ハンダを作っているのではなく、ハンダ自体は他のメーカーから仕入れたものであります。

ところで或る日、電電公社からそのハンダの成分を分析して欲しいという依頼がありました。実は、当時民間企業でハンダの分析が正しくできるのは千住金属工業くらいであったからであります。

電電公社に納められていたハンダの成分は、仕様書通りであれば錫が６０％、鉛４０％でありました。ところが、当時のハンダは、仕様書通りの成分になっていない方が寧ろ一般的でありました。即ち、錫と鉛の価格を比較すると錫の方が圧倒的に高くて、現在で６，７倍、当時は１０倍程度の価格差が

あったのであります。したがって、錫の含有量を仕様書より少なくすればそれだけ利益が増えるのであります。実際、錫の含有量を５０％と表示しながら４０％しか含まれていないハンダが市場に出回っていたという事例があるのであります。当時は、ハンダ職人の技術が如何に錫の含有量を多く見せるかで評価された時代でありました。

そこで、千住金属工業がハンダの成分を分析した結果、錫の含有量が仕様書より１～２％少なかったのであります。当時の感覚であれば、この程度は誤差の範囲であり、不正行為とまでは謂えないものであります。ただ、正確な数字が電電公社に伝わると佐藤金属は指名停止になりかねません。

そこで、佐藤金属は千住金属工業に対し、「この程度であれば品質面で問題はないから、分析結果を仕様書に合わせて欲しい」と頼んだのであります。佐藤金属としては、兄弟会社の誼で頼めば何とかなると思ったのでありましょう。

ところが、佐藤さんは「絶対に数字を変えてはならない。何のための分析だ」と言って佐藤金属の要望を却下したのであります。驚いた佐藤金属は、佐藤さんに何度も頼み込みましたが、佐藤さんは断固として拒否したのであります。

このことに一番驚いたのは寧ろ電電公社であったかも知れないのであります。何故かと言いますと、千住金属工業と佐藤金属との関係は電電公社にも周知の事実でありましたから、まさか佐藤金属がペナルティーを受けるような分析結果を千住金属工業が提出するとは思わなかった筈だからであります。

ここにも佐藤さんの自分の職業を愛するが故の職業奉仕の考え方の厳しさを観ることが出来るのであります。

次に、「会社は誰のものか」という問いかけについては、佐藤さんの考え方を示す事例をもう一つ紹介しておきます。

佐藤さんは、昨年、自ら筆頭株主として保有する全株式６１３，０００株を全て従業員持株会に贈与され、社員に対して次のコメントを出しておられます。

「千住金属がハンダ業界で世界一の生産量を誇る会社に成長したことは、社員の永年の努力の賜であり、感謝している。そこで、会社の発展に貢献した社員に持株を無償で贈与して、その労に報いることにした。これから後も末永く、社員一同心を一つにして私が唱導する『経営の理念』を堅持し、持株会を通じて会社経営に参画する意欲を強く持ち、物心両面での成長と千住金属の発展に更なる努力をして頂きたい」と。

社員が発憤しない筈はないのであります。そして、社員の役員に対する信頼も揺るぎないものとなるのであります。この贈与によって、持株会は、千住金属工業の最大株主となりました。正に社員の利益と株主の利益が一致したわけであります。これは職業奉仕の正鵠を射た考え方であります。

要するに、『会社は誰のものか』という問いかけについて佐藤さんは、結論として『会社は社員のためにある』と考えているのであります。そして、このことについて次のようなコメントを残しておられます。

「私が持株会に株を譲ったのは、会社というものは社員のためにあるからです。株が資産価値を持ったのは社員の努力によるものです。だから社員に返すんです。墓場まで持って行けないからというような安易な発想ではなく、『経営の理念』で唱えた私の美学を貫

いたのです」というのであります。

さて、自分の全持株を社員に贈与して自分の美学を貫いた佐藤さんは、当然のことながら配当収入がなくなります。そこで、「食うだけの給料は支払ってくれ」と会社に頼んであるそうであります。

因みに、会長である佐藤さんの給料は、社長と同額でありますが、賞与は一銭も受け取っていないのであります。その理由は、

「役員の賞与を最後に査定するのは私ですからね。お手盛りになるのが嫌だから、賞与は貰わないようにしています。結果、私の年俸が役員の中では一番少ないんですよ。」

と言って微笑まれるのであります。今の経済界にこのような経営者が果たして何人居るでしょうか。このような生真面目なところは、佐藤さんの自らエリートを持って任ずる気概なのであろうかと思います。それはまさにノーブレス・オブリージ Noblesse oblige に通じるものがあると思うのであります。

今、物質的な豊かさのみを追い求め、自分のことしか考えない人間の多い世の中で、佐藤さんのように自分以外の人のことを考える経営者が本当に少なくなったと思うのであります。

なお、序でながら謂えば、佐藤さんは、千住金属工業の株式を公開・上場するつもりは全くなかったのであります。何故かと言いますと、株式を公開・上場して他人の資本が入ってくれば、経営の自由度が失われると謂うのであります。今のところ、期間損益と減価償却で十分なキャッシュフローを確保し、適切に投資が出来ているため、敢えて資金を集める必要はないという考え方であります。

たとえ資金調達のニーズがなくても、株式を上場させて創業者利益を得ようとする経営者もある中で、このような合理的な考え方が出来るのは誠に素晴らしいことであると思うのであります。

以上を要するに、佐藤さんは、身を以て職業奉仕の理念を実践された人であり、正に「職業奉仕真骨頂漢」とも謂うべき人であったと思うのであります。

御静聴有り難うございました。

「心無罣礙」伊丹ロータリークラブ卓話

2009.5.7

深　川　純　一

今日は「心無罣礙」という言葉についてお話致します。この言葉は般若心経の一節にある言葉であります。一寸難しい言葉でありますが、別にお経の話をするわけではありません。私はロータリアンでありますから、この言葉についてロータリーの話を致します。私はロータリーの話をするときは、いつもどんなテーマであってもロータリーに関わった話をします。例えば、魚釣りの話を頼まれても、それとロータリーとの関わりを話します。したがって、今日の話は、ロータリーと仏教とが関わった話であります。

さて、「心無罣礙」とは「心に罣礙無し」。

礙とは、「こだわり」のことであります。したがって、これは「こだわりの無い心を持つ」ということであります。私は、五十数年間を俳句の世界に、そして三十数年間をロータリーの世界に身をおいてきましたが、最近この「心無罣礙」という言葉に限りなき共感を覚えるのであります。

では、私達ロータリアンにとって「こだわりの無い心を持つ」とは具体的には一体どのようなことなのでしょうか。

先ず、私達は、所謂常識というものにこだわらないで、自由なものの考え方を身につけることが大切だと思うのであります。

昔、中国に首山省念という禅僧がいました。或る時、修行僧が省念禅師に、

「仏とは什麼生？」（仏とは何でしょうか？）

と尋ねました。すると省念禅師は、

「新婦、驢に騎れば阿家これを牽く」と答えました。

新婦は「嫁」、驢は「驢馬」、阿家は「姑」のことであります。したがって、これは、嫁が驢馬に乗り、姑が手綱をとっているという情景であります。あたかも、社長が自ら運転して、平社員が後の座席に座っているのと同じ情景であります。

常識的に見ますと、嫁が驢馬に乗り、姑に手綱をとらせるとは怪しからん嫁だということになるのでありましょう。しかし、そのように考えるのは、本来は姑が驢馬に乗り嫁が手綱をとるべきだという常識にとらわれているのであります。即ち、そうでなければならない、という常識にとらわれているのであります。

人間は、本来、生まれながらにして自由で平等対等であるべきである、にも拘わらず、世間では「嫁」だとか「姑」だとか、「社長」だとか「平社員」だとか謂うレッテルを貼って窮屈な生き方をしているのであります。

省念禅師は、「嫁が疲れたら嫁が驢馬に乗って姑が歩いてもよいではないか、常識にとらわれないで、もっと心を広く、自由に伸び伸びと生きればよいのだ、それが仏教の教えだよ」と説いているのであります。

ロータリーの世界もこれと全く同じでありまして、今から約７年前の話でありますが、安平ガバナーが運転して、三木地区幹事が助手席にふんぞり返っていたという話を聞いたことがあります。これは如何にも平等対等を旨とするロータリーらしいと思ったことでした。ロータリーでは、このような情景は何ら異とすることではなく至極当然のことなので

あります。怪しからんことでもなく、また、微笑ましいことでもない、至極当然のことなのであります。社長が偉くて平社員が偉くないのではありません。同様にして、ガバナーが偉くて地区幹事が偉くないのではありません。ロータリーの世界は、万人平等の世界であります。人間は、本来自由平等であるべきでありますから、ガバナーだとか、社長だとか謂う詰まらぬレッテルを剥がして、「こだわりのない心」で自由闊達に伸び伸びと生きる、即ち「心無罣礙」、「これが般若心経の教えであり、ロータリーの心なのであります。これは、ロータリアンたるべき者の心構えとして肝に銘ずべきことだと思うのであります。

ただ一点、注意すべきは、「親しき仲にも礼儀あり」目上の人は勿論のこと、同僚や後輩であっても礼儀に欠けるような言動は慎むべきであります。これは、人間が社会生活を営むに際して本質的なことであり、目に見える現象的なことではないのであります。礼儀を欠くとその人の品位を下げてしまいます。

もう一つ、こだわりのない心について、風外本高禅師の話を紹介しておきます。風外禅師が三十余年の放浪生活をやめて大阪の円通院に住むようになったのは、文政元年、四十歳の時でありました。ところが、この寺はお化け屋敷のように恐ろしく荒れていまして、雨が降るとあちこちで雨漏りがしましたので、風外禅師は寺の中を転々と居場所を替えながら、こんな貧しい生活にも一向に頓着しませんでした。

このように風外禅師は、大修理の念願を立てて浄財を集めようとする様子もありませんでしたので、人々は「今度の和尚さんは、ほんまにおかしな人や」と噂をしていたのであります。その噂を聞いて、風変わりな人間がボツボツ円通院を訪れるようになりましたが、その中に一代の豪商川勝太兵衛が居ました。

風外禅師は、一見、女のように柔和な人でありましたから、川勝は、この和尚どれほどの人物か一つ試してやろうという気もあって、禅師に質問をしました。風外禅師は川勝の質問に対して淡々と答えますが、よく見ると、禅師は方丈に迷い込んで来た一匹の虻に気をとられている様子であります。虻は外に出ようと何度も障子にぶつかって、もがき苦しんでいます。そこで、川勝は、風外禅師に、「和尚さんは、先程から虻を見て何かお考えごとをしておられるようですが何か意味でもございますか」

すると、風外禅師はその声で我に返ったように話し出しました。

「いや、つい虻に気をとられていました。あんたはどう思われるかな。この虻は、後に引き返して飛びさえすれば、何処へでも逃げ道はある。戸には隙間があるし、障子には破れ目もある。ところがこの虻は、あとに退こうとはせず、ぶつかったその場所で外に逃れ出ようとして何度も何度も頭をぶっつけて七転八倒しておる。今に錯乱して倒れ落ちるであろう。……つくづく思うと、これは虻だけの話ではない。我々もどうかすると虻の真似をする。かたくなに一つのことにこだわって、何処までもとばかりに突き進んで、我と我が身を動きのとれぬように縛り上げてしまうものだ」

殆ど独り言のような和尚の言葉でありましたが、それが一代の豪商川勝太兵衛の魂にしみ通ったのであります。それからというもの川勝は、暇さえあれば風外禅師の門を叩いて

親しく教えを乞うたのであります。

私達ロータリアンも職業社会や地域社会の日常生活において、この虻と同じような「こだわりの心」で行動していないでしょうか。殊に、昨今、世界的な不況の業界を生き抜いていくとき、少し視点を変えて冷静に考えれば、極限状況も含めて色々と対策を立てることが出来るにも拘わらず、目前の状況にばかりこだわって自らの出処進退を見失ってはいないでしょうか。即ち、目に見える現象にこだわって、物事の本質を見失ってはいないでしょうか。困難な時こそ「こだわりのない心」で自由奔放に生きること、発想を転換することも大切であろうかと思うであります。

ところで、文政二年の春の或る日、突然、この円通寺に槌や鑿の音が響き渡りました。夥しい材木が次々に運び込まれます。人々は、「流石の和尚も雨漏りに負けて普請を始めはった」と噂したのでありますが、実は、檀信徒が驚いて駆けつけて聞いてみると、これは和尚も弟子も知らず、川勝が自分の一存で大々的な修理の起工にかかったものでありました。

以上が風外本高禅師の話であります。禅師は、徳川後期に出た曹洞門の古仏で、安永八年、伊勢に生まれ、弘化４年（１８４７）６９歳で浪花に没しました。この風外禅師の門からは、原坦山というずば抜けた古仏が打ち出されたのであります。

そこで序でに、風外禅師の法脈を継いだ原坦山禅師の話を紹介しておきます。

禅師が三人の弟子を連れて旅をしたときの話であります。或る時、川岸にさしかかると、一人の妙齢の女性が川を渡れないで困っていました。その川には橋がなく、川向こうへ渡してくれることを頼める人もなく、途方に暮れていたのであります。そこへ坦山禅師達がやって来たので、女性はここぞとばかり「私を向こう岸まで渡して頂けませんでしょうか」と頼みました。

すると、坦山禅師は「よし、よし」と言って女性を抱き上げて川を渡りました。
女性は、禅師に礼を言って、そのまま立ち去って行きました。

これを見ていた弟子達は、しばらくは何も言わずに禅師の後について歩いていましたが、遂に一人の弟子が非難めいた口調で禅師に言いました。

「何故あの女を抱いたりしたのですか」

この一言が口火になって他の弟子達も禅師を咎め始めました。

「仏教では、女性に触れてはならないことになっています。女犯は罪でしょう」

「あの程度であれば女犯というほどではないかも知れませんが、それでも僧侶は女性を抱くような行為を慎むべきではないでしょうか」

「確かにあの行為は日頃の老師の言動に反しています」

弟子達は、堰を切ったように禅師に詰め寄りました。おそらく弟子達は、禅師の行動を見てあれこれ悩んで居たと思います。

ところが、禅師は、大声で笑い飛ばしました。

「ハッハッハッ。なんだ、お前達は未だ女を抱いているのか。私はとっくに女を降ろしてきたぞ」

女を意識していたのは禅師ではなく、何時までもこだわっていた弟子達だったのであります。つまり、弟子達が女性を意識したことは、禅師が女性を抱いている幻影にこだわっていることなのであります。弟子達が見てい

る女性は色欲の対象として見ている女、俗世間の目で見ている女であります。これは現象の世界で見ている女性であります。

これに対して、禅師の見ている女性は一人の人間として見ている女であります。これは本質の世界で見ている女性であります。本質の世界とは、般若心経に所謂「色即是空」の「空」の世界であります。「色」の世界とは、目に見える現象の世界であります。したがって、本質の世界に生きている禅師にとっては、女など居ない、すべては「空」なのであります。したがって、「私はとっくに女を降ろしてきたぞ」という、こだわりのない禅師の心が「空」の心なのであります。即ち、「心無罣礙」なのであります。

一つ卑近な例を出しましょう。私達ロータリアンは、よくビールで乾杯します。今、例えば、綺麗に洗った溲瓶（尿瓶）にビールを注いで、さあ乾杯しよう、と言ったら皆さんこのビールが飲めるでしょうか。おそらく殆どの人は飲まないだろうと思います。もし、飲む人がおれば、その人は余程のへそ曲がりであります。

何故飲めないのでしょうか。溲瓶は汚いからだという人がいるかも知れません。しかし、きれいに洗ってあるのであります。溲瓶そのものは少しも汚くありません。したがって、溲瓶そのものに綺麗とか汚いとかはないのであります。したがって、溲瓶を綺麗と見るか汚いと見るかは、あくまでもその人の心の在りようでありまして、溲瓶そのものは、綺麗とか汚いとかを超越したものなのであります。したがって、問題は、私達の心の方にあるようであります。これが「こだわり」であります。「こだわり」があるからものをあるがままに見ることが出来ないのであります。溲瓶が綺麗だとか汚いとかの「こだわり」がどうしても抜けないので溲瓶ではどうしてもビールが飲めないのであります。仮に飲んだとしてもビールを本当に美味しいとは感じないのであります。

さて、このこだわりということについて、ロータリーの世界で具体的な問題を考えてみます。例えば、「四つのテスト」について誤解をしている人もいるようであります。「四つのテスト」の真実かどうか。という言葉についてよく聞く話でありますが、例えば、お医者さんが癌患者に真実を告知しなかったことについて悩まれるという話であります。今は場合によっては告知することも多いようでありますが、昔は絶対に告知しなかったようであります。その時代に、お医者さんが、自分はロータリアンであるにも拘わらず、患者に対して真実を告げなかったといって悩むということを聞いたことがあります。

しかし、そもそもこの問題は「四つのテスト」を適用すべき場面の問題ではないのであります。ロータリアンの中には、全てのことは「四つのテスト」で解決できると言って、これを金科玉条のように言う人がいますが、物事はそんなに単純なものではありません。このことは「四つのテスト」の出来た由来を考えれば明らかであります。即ち、この「四つのテスト」は、１９３２年に倒産したアルミ食器会社の再建を頼まれた１９５４年の国際ロータリー会長ハーバート・テイラーが、みんなで協力して頑張るために考え出した一つのノウハウでありまして、みんなが会社再建という共通の目標に向かって努力するための共同作業の指針であります。したがって、みんなの心もエネルギーも同じ方向に向かってます。

ところが、癌患者は死に直面している人であるのに対して、お医者さんはこれを救おうとしている人でありまして、両者は全く立場が違うのであります。したがって、癌患者に真実を告げることが、みんなに公平にはならないし、好意と友情を深めることにもならないし、みんなのためにもならないのであります。

したがって、このような場面は、本来「四つのテスト」を適用すべき場面ではないのであります。むしろ、このような場面では、嘘も方便という仏教の法華経の「方便論」の方が適切なのであります。

このように、「四つのテスト」という一つの原則に拘束されてはなりません。原則に拘束されることを「教条主義」と謂いますが、このように現象に惑わされていては。到底、物事の本質を見抜くことは出来ないと思うのであります。

「四つのテスト」についても、これに拘束されてしまって、それの根底にある本質は何かということを見抜かなければ物事の処理を誤ると思うのであります。

ロータリーは、現象にこだわらずに本質を見抜く思考であります。このことについて少し補足しておきます。

骨隠す皮には誰も迷いけん
　　美人と謂うも皮のわざなり

これは足利六代将軍に仕えた文武両道の武士、蜷川新左衛門の作品であります。

これに乗って、その師である一休禅師(1481年、８８歳寂）が詠んだ一首は、

皮にこそ男おんなのへだてあれ
　　骨には変わる跡形もなし

二つとも大した作品ではありませんが、昨今の滔々たるエロティシズム文化に対するレジスタンスとしては意味があろうかと思います。

私達は、日常生活では、美人だとか、イケメンだとか、目に見える現象に惑わされて、一皮むいたその奥にある骸骨を想像することは出来ません。更に、目に見えない心の状態を見抜くことは出来ません。この二首の歌は、この楽しい憂き世も所詮は男と女、その本質は美人も美人でない人も一皮むけば皆同じ骸骨だよ、このような目で見れば、人間は皆同じく平等対等、火葬場で焼かれれば皆同じ骨に変わってしまう。これが人間の本質であることを心に留めておけ、と言っているのであります。

要するに、この世の中で生活する以上は、目に見える現象的なことにこだわらずに、本質をみながら自由闊達に生きることが大切だと思うのであります。

昔、始祖達磨大師から始まって第二祖慧可、第三祖僧燦、第四祖道信、第五祖弘忍と代々印可が授けられて、その法脈を継いだ第六代目の禅僧六祖慧能が中国の広州にある法性寺に暫く滞在していた時の話であります。この時、法性寺には『涅槃経』の講義に長けた印宗法師という禅の学僧がいて、慧能禅師は、この印宗の講義を聴こうと思っていました。

その講義の当日、寺の門前には印宗の講義があることを知らせる旗が立てられたのですが、この旗が風に揺らめいているのを見て、印宗の講義を聴きに来た二人の僧侶が議論を始めました。

「あれは、旗が動いているのだ」と一人が言うと、もう一人のお坊さんが、

「いや、旗ではなく、風が動いているのだ」と反論しました。

二人とも自分の主張を譲らずに議論をしているところへ慧能禅師がやって来て

「動いているのは、旗でもない、風でもない、お前達二人の心なのだ！」

この言葉に、二人の坊さんは忽ちシュンとなって議論を止めてしまいました。これを聞いていた印宗法師は、慧能禅師に感服して、すぐに禅師の弟子になったという話であります。

風に揺れる旗を見て議論するお坊さんのように、私達は、日常生活で近視眼的に目に見える現象即ち、対象にばかりにこだわっていると物の本質を観る平常心を失ってしまいます。このようなことは、私達ロータリアンの日常生活でも随所に見られるところであります。

しかし、常に自分の心を見つめ、統一安定させることに努めれば、対象にこだわることがなくなる筈であります。このような心のバランスのとり方が大切だと思うのであります。

以上を要するに、「心無罣礙」、こだわりのない心で、あるがままにものを見る、これは、私の俳句生活、ロータリー生活の根底にある考え方であります。

ただ、心にこだわりを持つな、とは言ってみても、これは、そう簡単に出来るものではありません。したがって、この言葉は、私にとっては未だ実現の世界にあるものではなく、何時もそのようにありたい、という念願の世界にあるものなのであります。御静聴ありがとうございました。

以上

参考文献；田中忠雄先生
及びひろ さちや先生の御著書。

『佐藤千壽さんを偲んで』～永遠の課題・職業倫理～

2009.5.18 東京 RI.2580 地区セミナー

深 川 純 一

今日は、「佐藤千壽さんを偲んで」～永遠の課題・職業倫理～というテーマを頂いてます。実は、このテーマは、昨年秋亡くなられた東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーから頂いたものであります。したがって、先ず、その経緯から話に入って行きたいと思います。

私は、佐藤先生とは一回り違いの午年でありましたので、ウマがあったのか、ロータリーのことその他人生万般のことについて色々と教えて頂きました。殊に先生の晩年は職業倫理についてよく話し合ったものであります。そして、先生は、２０世紀初頭の素晴らしいロータリーが最近は段々おかしくなって来たと言って嘆いておられました。

時には、ロータリーを見捨てたかのような話もなさいましたが、しかし、私は、そのような言葉とは裏腹に先生がこよなくロータリーを愛しておられることがよく判っていました。先生は、ロータリーを心から愛し、且つロータリーの行く末を本当に心配しておられたのであります。それは先生のその後の言動や講演からも明らかであります。そして先生は、ロータリーのみならず、実業の世界、美術の世界においても八面六臂の大活躍をされ、更に福祉にも強い関心を持たれて、弱者に涙する温かい心の持ち主でありました。

そして、一昨年の秋、高松西ロータリークラブ創立５０周年の記念講演をされましたが、その帰途神戸に一泊された時、色々とお話を伺うことが出来ました。

その時、先生は、『来春は、貴方の所属する伊丹クラブも創立５０周年だから、その記念品として二人で記念誌を出版したら如何ですか。そして、その記念誌の最後を締めくくる論文は貴方がお書きなさい。そのテーマは「永遠の課題・職業倫理」がよいでしょう。そしてそれをこの記念誌の題名にしましょう。この本の装幀は全て私がしてあげましょう』と言われて出来上がったのが伊丹ロータリークラブ創立５０周年の記念誌でありました。したがって、この永遠の課題・職業倫理というテーマは、佐藤先生からいただいたものなのであります。

そこで、今日は、佐藤千壽先生への追悼の思いをこめてお話させて頂きたいと思うのであります。

さて、前回は、ロータリーの世界で職業倫理がどのように芽生えてきたのか、そしてそれが、現在どのようになっているのか、ということをお話致しました。

実は、今日は、その職業倫理について佐藤先生と対談をすることになっていたのでありますが、先生が急に亡くなられましたので、今日は予定を変更して佐藤先生の在りし日を偲び、先生の考えておられた職業倫理とその実践についてお話申し上げたいと思うのであります。

今日の講演時間は１時間３０分しか頂いておりませんので、職業倫理の全てについてお話しすることは出来ません。そこで、職業倫理の肝心要のところ、即ち職業倫理は「目に見えないもの」でありますから、ロータリーでは目に見える現象よりも、目に見えない本

質的なものが最も大切だということだけにポイントを絞ってお話申し上げたいと思いますので、その点どうかお許しいただきたいのであります。

さて、今日のテーマの「永遠の課題・職業倫理」でありますが、単に職業倫理だけでも、とても２時間や３時間では述べ足りないほど大きなテーマであります。ところが、佐藤先生は、更に大きく敢えて「永遠の課題』と問いかけられました。その心は一体何だったのでしょうか。

これは、先生が最近のロータリーがおかしくなったと嘆かれたこととも関わることでもありますが、実は、職業倫理の問題はロータリー職業奉仕の中核にある問題であり、これなくしてロータリーの職業奉仕は語れないのであります。

したがって、これはロータリーの思想に関わる問題でありますので、職業倫理を論ずるときには先ずロータリーの歴史の視点を振り返って見なければならないと思うのであります。

先ず、１９０５年、ロータリーは、「一業一会員制」と「規則的例会出席」というロータリーの基本原則を確立しました。そして、その１０年後の１９１５年にはサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」を採択してロータリアンの個人倫理を確立致しました。これは、今日のテーマと重要な関係があります。

更に、その７年後の１９２２年、ロサンゼルスの国際大会において「国際ロータリー定款・細則及び標準ロータリークラブ定款」を採択してロータリーの組織原理を確立しています。

そして、その翌年の１９２３年、セントルイスの国際大会において「決議２３－３４号」を採択してロータリーの実践原理を確立しました。

更に、その４年後の１９２７年、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕という四大奉仕部門を確立して原理探求のロータリーから実践のロータリーへ邁進していったのであります。

以上を要約致しますと、ロータリーの基本原理の確立に始まって、個人倫理の確立、組織原理の確立、実践原理の確立そして４大奉仕部門の確立。これらは全てロータリー創立後２２年間、即ち、約４分の１世紀の間に築き上げた素晴らしい誠に魅力に満ちたロータリーでありました。

ところが、一業一会員制の原則は２００１年の規定審議会で廃止となり、規則的例会出席の原則は１９６８年以降の度重なる規制緩和で骨抜きになってしまいました。そして今日のテーマで最も重要な倫理についての１９１５年のロータリー道徳律は１９８０年の規定審議会で廃止、１９２２年の組織原理の確立を前提とするクラブ自治権はクラブの自覚喪失のために揺らいでいます。

さらに１９２３年の決議２３－３４号は、一旦は歴史的意義ある文書としてのみ存在することになってしまいましたが、今年１月のＲＩ理事会に於いて日本の理事の提案により何とか復活することになりました。

このように、ここ僅か百年のロータリーの歴史を顧みても、ロータリーは衰退の一途を辿っているのであります。あの二十世紀初頭の高々と理想を掲げ、それに燃えて行動した素晴らしいロータリーは、一体何処へ行ってしまったのでしょうか。今、影も形もありま

せん。２０世紀初頭の私達の先輩達が築き上げたあの素晴らしいロータリーが消えてしまったのですから、佐藤先生がロータリーの行く末を憂えられたのも無理はないのであります。

では、あの２０世紀初頭に築き上げられた素晴らしいロータリーは復活するのでしょうか。復活するとすれば、それは一体何時のことなのでしょうか。

１０年後か１００年後かそれは判りません。ただ、しかし、一つだけ言えることは、優秀な思想や原理・原則のように目に見えないものは、一旦私達の現象の世界即ち目に見える世界から消え失せても、本質の世界即ち、目に見えない世界において存在し続けます。そして、それは時代を超越して、やがてその思想とか原理・原則を受け入れる人が現れた時、目に見えるものとして現象の世界に復活するのであります。

一つの例え話をします。二人のお坊さんが刀をもって喧嘩をしました。一方のお坊さんが刀で他方のお坊さんの首を刎ねました。その首が中空に飛び上がって中空に止まり、やがて２０００年後の他のお坊さんの首にスポッとおさまったと謂います。この公案を何と説くか、という禅問答のような問題であります。

回答は色々あるでしょうが、私の回答を申し上げましょう。

中空に飛び上がった首を思想・原理と考えて下さい。首を切り取られて倒れた胴体を組織・制度と考えて下さい。胴体は倒れて、目に見える組織や制度は消滅しますが、目に見えない優秀な思想とか原理は本質的なものでありますから時代を超越して、やがてその思想とか原理・原則を受け入れる人が現れると、再び現象の世界に復活してこの世の中に蔓延していくという例え話であります。

そんなことが現実にあるのか。

実は、紀元前３世紀から紀元後３世紀に亘って隆々と栄えた古代ローマ帝国は、人間の倫理の頽廃によって、紀元後３世紀に突如として滅亡しました。そして中世の暗黒時代が始まったという説があります。

しかし、ローマ人は、その滅亡の直前に素晴らしい法律を作っていました。それが「ローマ法」であります。そのローマ法の中に籠められている所有権の原理は、目に見えない良質なものであったが故に、目に見えるローマ帝国が崩壊しても消滅せず、１７００年の時代を超越して現代の日本の民法第２０６条にそのままの形で「所有権とは自分の物を自由に使用、収益及び処分する権能をいう」と謂う規定となって復活しているのであります。したがって、これは恰も、イエスキリストの教えが２０００年の歳月を超越して今の世に蔓延り、道元禅師の正法眼蔵の提唱が６５０年の歳月を閲して未だに私達の心の糧になっているのと全く同じことなのであります。

したがって、ロータリーの一業一会員制の原則も規定審議会の決議により目に見える現象の世界からは消滅しましたが、それがロータリーの本質に根ざした優秀な原理であるが故に何時かは目に見える現象の世界に復活するのであります。しかし、それが何時かは判らないのであります。

したがって、一旦失われた素晴らしいロータリー。その中でもロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にありと謂われた職業奉仕の中核にある職業倫理もまた何時かは必ず復活するのであります。したがって、それはまさに永遠の課題なのであります。だ

からこそ、佐藤先生は、「永遠の課題・職業倫理」と言われたのであります。これが私なりの解釈であります。

なお、佐藤先生が１９６０年に正式に社長に就任された時、特別にデザインした銀のスプーンを、その都度心をこめて自ら執筆したお祝いの言葉に添えて贈ることを始められました。海外へ出かけられたときは、外国から航空便で原稿を届けることもあったといいます。そしてこれが１９７８年（昭和５３年）社長職を退く最後の月まで、正味１８年間続いたのであります。

そしてそこに繰り返し繰り返し述べられている言葉は、人は如何にあるべきか、如何に生きるかという生涯をかけた永遠の課題でありました。したがって、人間の生き様に関わる職業倫理もまた永遠の課題でありました。

実は、それが後に「最大となることを望まず、最良となることを望む」という先生の経営理念に繋がることにもなるのであります。

さて、ここで皆さんよくご存じの一首の都々逸を引用致します。

「お酒飲む人、花なら蕾、今日も酒、酒（咲け、咲け）、明日も酒（咲け）」

佐藤先生は、満９０歳、まだまだお元気であられたので残念なことでありましたが、先生は、生涯、酒を愛した人でありました。酒が好きなら道楽もしただろうと人は言うかも知れません。「明けの鐘、ゴンと鳴るとき三日月型の櫛が落ちてる四畳半」なんてことは、酒飲みの私には何のことだかさっぱり判りませんが、先生もこの方の道楽は全くなかったようであります。ひたすら酒を愛し、美術を愛し、そして自らの職業を愛した人でありました。

そして、中小企業の社長から一代にして世界的な企業に育て上げたのであります。その成功の物語に一貫して流れる先生の経営の理念は、ロータリーの職業奉仕の哲学でありました。したがって、それを語るには、先ず、企業の中核である先生の「経営理念」を見なければなりません。ロータリーの綱領と同じく、そこには先生の経営者としての基本的な考え方が見事に集約されているからであります。

先生は、今から４８年前の１９６０年、千住金属工業の社長に就任されましたが、その時自ら宣言した「経営の理念」として「会社は、人間完成の道場である」と謳っています。これは、ロータリーの始祖米山梅吉先生が「ロータリーの例会は人生の道場である」と喝破された境地と見事に合致するのであります。

この経営理念が示すように、先生は誠に理想主義者でありました。しかもその実践者でありました。その結果、１９６０年当時は未だ売上高１０億円にも満たない中小企業であった千住金属工業を２００７年期末には売上高５７９億円、経常利益９３億円の世界的企業に育て上げたのであります。

そして、先生は常々、ロータリーに哲学があるように事業にも哲学がなければならないと謂っておられたのであります。

そこで、この経営理念が具体的にどのような形で実現されているのか、今日はその実践の軌跡を辿ってみたいと思うのであります。

そして、この経営理念の集約として、「私は、最大の会社となることを望まず、最良の会社となることを祈りにも似た心をもって切望する」と謂っておられるのであります。これは、ロータリーの職業倫理の根底に流れる「質の探求の思想」であります。そしてまた、これは思想家エマーソンの言葉「文明の価値

は何によって測られるか。都市の大きさや人口、収入の多寡ではない。その文明が如何なる人を作ったかによって文明の価値は測られる」という言葉と共通の境地に立つものであります。

実は、この言葉は、１９７４年、先生が東京第２５８０地区のガバナーに就任された年の国際ロータリー会長ウイリアム・ロビンスの言葉に通じるものなのであります。即ち、「ロータリーの価値は何によって測られるか。ＲＩやクラブの規模の大小や会員数の多寡ではない。そのクラブが如何なる人を育てたかによってロータリーの価値は測られる」とロビンス会長は断言しているのであります。したがって、ここに、エマーソン、ウイリアム・ロビンス、佐藤千壽という思想の系譜を見取ることが出来るのであります。

先生の経営理念の実践については、到底短い紙面に語り尽くすことは出来ませんので、今日はその内の幾つかのことだけを申し述べるにとどめたいと思います。

先ず、佐藤先生は、一昨昨年、ライブドアの敵対的企業買収の事件が起きた時、御当地２５８０地区の職業奉仕特別研修会で講演され、「会社は誰のものか」という視点からアメリカ型資本主義を批判され、ロータリーの職業奉仕のあるべき姿を熱っぽく説かれたのであります。

ご存知のとおり、市場原理に委せたアメリカ型資本主義の結末が、昨今のサブプライムローン始まる今日の世界的不況となっていることは明らかであります。これは、一言で言えば、人間が徒に金を求めた結果であります。まさに職業倫理の頽廃の結果であります。

先生は、「会社は誰のものか」という問いかけについて、会社の「経営理念」の冒頭において、「会社は、社員共同の生活の源泉であり、社会は会社が有用な製品を供給することを期待している」と述べられ、それなるが故に、会社は第一にそこで働く社員のものであり、その会社の製品を利用する顧客のものであると断言しておられるのであります。

しかし、佐藤先生は、企業が儲けることは否定しません。資本制経済社会では企業は儲けなくして生きていくことは出来ませんから、これは当然のことであります。企業の目的は第１に利潤の追求であります。

そこで、企業活動には社会インフラが必要であります。適正な利潤を上げて、インフラ整備の原資となる税金を納めなければなりません。また納税以外の社会貢献にも資金が必要であります。このような企業活動の結果として生まれた利潤から資金提供者である株主に配当するべきだというのが佐藤先生の考え方であります。これは正にロータリーの職業奉仕の企業管理論の原理そのものであります。もっとも、佐藤先生は、アメリカ型資本主義には賛成できないとしながらも、アメリカの企業を全面的に否定はしていないのであります。むしろ、アメリカの企業にも学ぶべき点は多いと考えておられたのであります。

先生が特に模範としておられた企業は、医薬品・健康用品の巨大企業ジョンソン・アンド・ジョンソン（Ｊ＆Ｊ）であります。この会社が１９３４年に発表した「我が信条」と題する「経営理念」には、会社が負うべき責任として、

第１に消費者に対する責任。

第２に社員に対する責任。

第３に地域社会に対する責任。そして

第４に株主に対する責任。この四つを挙げています。

この「株主に対する責任」を最後の第４番目においていることは特筆に値すると思うのであります。何故なら、株主至上主義のアメリカ型資本主義から言えば、株主に対する責任が第一であるべきだからであります。

実は、１９８２年、このジョンソン・アンド・ジョンソンが「消費者に対する責任」を第一においているということを示す事件が起こりました。それは、この会社の製造販売した鎮痛剤「タイレノール」に何者かが毒物を混入したため７人の死者が出たのであります。

しかし、ジョンソン・アンド・ジョンソンには、毒物混入に対する過失は一切なかったのであります。したがって、会社に損害賠償責任はなかったのでありますが、経営理念の第１の「消費者に対する責任」を果たすため、当時の経営者は、全商品を回収し廃棄したのであります。もしも、会社は株主のものだと謂うアメリカ型市場原理主義によって第４番目の「株主に対する責任」を最優先していたならば、莫大な損失を発生させる商品の回収・廃棄など到底実行できなかったと思われるのであります。

兎に角、ジョンソン・アンド・ジョンソンには、過失責任は一切なかったのであります。しかし、当時の経営陣は、自社の「経営理念」に照らし合わせて迷うことなく商品の回収・廃棄に踏み切ったのであります。したがってアメリカにもこのような職業倫理に徹した企業があることを忘れてはならないと思うのであります。佐藤先生の洞察力は誠に素晴らしいの一語に尽きます。

先生は、このジョンソン・アンド・ジョンソンを模範としておられましたから、「顧客が喜ぶことの結果として利益があるのであって、顧客が喜ばない形での利益は本来あり得ないし、長続きもしない」と考えておられたのであります。

先生は、この顧客第一の考え方をしておられましたから、社員が「こうすれば儲かりますよ」と言って来ても真剣に取り合わず、「こうすればお客さんのためになりますよ」と言って来れば真剣に耳を傾けるといった具合なのであります。

実は、これは、まさにロータリーの職業奉仕の説くところであります。即ち、

企業というものを如何に管理するかのポイントは、企業を権限論的に見ないで機能論的に見ることであります。即ち、

企業というものは、それを構成する人達がそれぞれ自分の役割を十分に果たすことによって円滑に運営されます。したがって、そのうちの一人が欠けても、その限りにおいて企業運営の円滑さが阻害されます。この意味では、社長職、課長職、タイピスト職、工員職その他諸々の職務を機能論的に見る限り、すべて平等対等な『役割の配分』に過ぎないのであります。

そして、企業の構成員各自が自分の役割を十分に果たすことによって、初めて企業は発展するのであり、企業が発展することによって、企業で働く人達も潤うことになるのであります。

このような考え方からすれば、企業の利益の配分方法も、通常は企業の総売上高から、先ず公租公課と人件費その他の諸経費を控除した残りを通常三つの分野に配分します。即ち、

第１に会社の内部留保として準備金の積立。

第２に役員報酬。

第３に株主への配当金を支払います。これ

が従来の利益の分類法であります。

ところが、ロータリーは、企業を機能的に見る機能論的視点から、

第４に、従業員にも特別賞与を支払うべしと説くのであります。

その理由は、企業を機能論的に見れば、皆が役割を果たすことによって、初めて利益を生み出すことが出来たのでありますから、利益を生み出した原因となった全てのところへ利益を還元しよう、と謂うのであります。

これは、まさに仏教の因縁論に基礎をおいた東洋的発想であります。そうだとすれば、この考え方の延長線上に、場合によっては、『顧客』にも利益を還元する場合があってもよいことになります。

この考え方を基本として、先生やジョンソン・アンド・ジョンソンは、企業は顧客あってのものだから信用と謂うことを最も重要な要素だと考えて、顧客第一主義をとっているのであります。そうでなければ、企業の社会的責任なども果たされないと考えるのであります。

これに比べると最近の日本の業界における一部の職業人の企業管理は如何なものでありましょうか。職業倫理の頽廃は誠に目に余るものがあります。恥ずかしい限りであります。一々会社名を挙げる気にもならないほど次から次へと顧客を騙す各種の偽装事件が頻発しています。これは正に人間が倫理を忘れ、徒に金を求めるようになった結果であります。私達は、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」というロータリーの格言を忘れてはならないと思います。

次に、「会社は誰のものか」という企業経営観・職業倫理の問いかけについての佐藤先生の考え方を如実に示す事例を一つ紹介しておきます。

先生は、昨年、自ら筆頭株主として保有する全株式６１３，０００株をすべて従業員持株会に贈与され、社員に対して次のようなコメントを出しています。

「千住金属がハンダ業界で世界一の生産量を誇る会社に成長したことは、社員の永年の努力の賜であり、感謝している。そこで、会社の発展に貢献した社員に持株を無償で贈与してその労に報いることにした。これから後も末永く、社員一同心を一つにして私が唱導する『経営の理念』を堅持し、持株会を通じて会社経営に参画する意欲を強く持ち、物心両面での成長と千住金属の発展に更なる努力をして頂きたい」と。

社員が発憤しない筈はないのであります。同時に、社員の役員に対する信頼も揺るぎないものとなるのであります。この贈与によって、持株会は千住金属工業の最大株主となりました。正に社員の利益と株主の利益が一致したわけであります。これは職業倫理の正鵠を射た考え方であります。

要するに、『会社は誰のものか』という問いかけについて、佐藤先生は、結論として、『会社は社員のためにある』と考えておられたのであります。そして、このことについて次のようなコメントを残しておられます。

「私が持株会に株を譲ったのは、会社というものは社員のためにあるからです。株が資産価値を持ったのは社員の努力によるものです。だから社員に返すんです。墓場まで持って行けないからというような安易な発想ではなく、『経営の理念』で唱えた私の美学を貫いたのです」というのであります。

さて、自分の全持株を社員に贈与して自分の美学を貫いた佐藤先生は、当然のことなが

ら配当収入がなくなります。そこで、「食うだけの給料は支払ってくれ」と会社に頼んであったそうであります。

因みに、会長である佐藤先生の給料は、社長と同額でありました。しかし役員賞与は一銭も受け取っていないのであります。その理由は、「役員の賞与を最後に査定するのは私ですからね。お手盛りになるのが嫌だから、賞与は貰わないことにしています。結果、私の年俸が役員の中では一番少ないんですよ」

と言って微笑まれるのであります。今の実業界にこのような経営者が果たして何人居るでしょうか。このような生真面目なところは、佐藤先生の自らエリートをもって任ずる気概なのであろうかと思います。それはまさにノーブレス・オブリージ Noblesse oblige に通じるものであろうかと思うのであります。

この Noblesse oblige については、一言申し添えておきたいと思います。

この言葉は、御存知のようにイギリスの貴族階級の根本精神を表した言葉でありまして、自分達の持っている貴族としての特権、財産などを国民や国家のために役立てる義務と責任があるということを意味する言葉であります。現に、あの第二次世界大戦におけるイギリスの将校達の戦死者の中には、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の出身者が圧倒的に多かったといわれています。このように、この言葉の根底に流れる思想は誠に崇高なものなのであります。この故に、イギリスの貴族は、素晴らしいリーダーシップを発揮しているのであります。

しかし、イギリスは階層社会でありますが、ロータリーは、万民平等の世界であります。したがって、本来の意味での noblesse oblige の思想は、ロータリーにはそのままには当て嵌らないと思います。

ところが、日本ロータリーの精神伝統の中には、この noblesse oblige の思想が流れているようにも見受けられるのであります。これは、恐らく、戦前のロータリーが大実業家のみによって組織されたクラブであるという特殊な事情によるものであろうかと思うのであります。しかし、ロータリーは、生まれながらの身分や特権とは無関係の世界であります。

確かに私達ロータリアンは、自分達はエリート (elite) 選ばれた人であるという意識を持っています。そのこと自体はそれでよいと思います。しかし、ロータリアンは、noblesse oblige のように生まれながらにして選ばれた人ではありません。同業者の中から、ロータリーが良質な人であると認めて、ロータリーが一方的に選び出した人なのであります。同業者が選んだのではなく、ロータリーが同業者の承諾も得ないで一方的に選び出した人なのであります。

したがって、選ばれた人とは言ってもその意味は noblesse oblige とは全く違うのであります。昔の日本のロータリーは、確かに超一流の実業家で組織されていましたから、所謂エリート即ち、選ばれた人と地域社会からも思われていました。しかし、その選ばれた人という意味は、昔と今とでは全く異なるものであることを理解しなければなりません。

昨今のロータリーは、現象的にも、原理的にも、上流階級だけの組織ではありません。したがって、ロータリーは、noblesse oblige のように身分や特権があるから国家や国民に奉仕するというものではなく、あくまでもアメリカ的な万民平等の思想のもとに一人の人間として、個人として世のため人のために奉

仕しようとするものなのであります。

さらに謂えば、noblesse oblige の世界は階層社会・縦型社会でありますが、ロータリーの世界は完全な平等社会・横型社会なのであります。

では、横型社会におけるリーダーシップは原理的に如何にあるべきでしょうか。

先ず、その基本前提として、ロータリアンの意識構造を申し述べておきたいと思います。それは、「茶席の論理」を考えれば判りやすいと思います。

茶席には、社会のあらゆる階層の人達が入ってきます。昔流に謂えば士農工商、大名も武士も町の人も農家の人も入ってきます。しかし、大名も武士も茶席に入るときは、腰の刀をはずして丸腰で入ります。そして、完全対等平等の立場で静かに茶を喫して去るのであります。これを「喫茶去」と謂います。

ロータリーの世界もこれと同じでありまして、例会には、大会社の社長も、中小企業の社長も、大病院の院長も町のお医者さんも、八百屋さんも魚屋さんもロータリアンとして入ってきます。しかし、一旦ロータリーの世界に入りますと、皆、平等対等の立場で交わり、心を通わせ合うのであります。そこには、一切上下の関係はないのであります。これがロータリーの論理であります。したがって、ロータリーの世界には、noblesse oblige のような階層社会を前提とする縦型社会の論理はないのでありまして、ロータリーの世界は、万民平等の横型社会の論理の支配する世界なのであります。

但し、ロータリーは万民平等の世界ではありますが、ロータリアンは、やはりその中から「選ばれた人」なのであります。一つの職種から一人だけ選ばれた人なのであります。しかも、それは、良質であるが故に「選ばれた人」なのであります。万民平等だからと謂って誰でもロータリアンになれるものではありません。

したがって、「選ばれた人」と謂う意味を誤解してはなりません。地域社会には沢山の職種があります。それらは皆、職種の異なった異業種であります。正に地域社会は異業種の集まりであります。

しかし、ロータリーは、それぞれの異業種の中からそれぞれ一人だけ良質な人を選ぶのであります。したがって、ロータリアンは謙虚でなければなりません。　今、物質的な豊かさのみを追い求め、自分のことしか考えない人達の多い世の中で、先生のように自分以外の人のことを考える経営者が本当に少なくなったと思うのであります。

なお、序でながら謂えば、佐藤先生は、千住金属工業の株式を公開・上場するつもりは全くなかったのであります。それは一体何故か。株式を公開・上場して他人の資本が入ってくれば、経営の自由度が失われると謂うのであります。これは、期間損益と減価償却で十分なキャッシュフローを確保して適切に投資が出来ているのであれば敢えて資金を集める必要はないという考え方であります。

昨今、たとえ資金調達のニーズがなくても、株式を上場させて創業者利益を得ようとする経営者もある中で、このような合理的な考え方が出来るのは誠に素晴らしいことであると思うのであります。

職業倫理に関して、もう一つのエピソードを紹介しておきます。１９５０年代のこと、佐藤先生の千住金属工業の兄弟会社である佐藤金属が電電公社にハンダを納入していました。佐藤金属は商社でありますから、ハンダ

を作っているのではなく、ハンダ自体は他のメーカーから仕入れたものであります。

ところで或る日、電電公社、今のＮＴＴからそのハンダの成分を分析してほしいという依頼がありました。実は、当時民間企業でハンダの分析が正しくできるのは千住金属工業くらいしかなかったからであります。

電電公社に納められていたハンダの成分は、仕様書通りであれば錫が６０％、鉛４０％でありました。ところが、当時のハンダは、仕様書通りの成分になっていない方が寧ろ一般的でありました。即ち、

錫と鉛の価格を比較すると錫の方が圧倒的に高くて、現在で６，７倍、当時は１０倍程度の価格差があったのであります。したがって、錫の含有量を仕様書より少なくすれば、その分だけ利益が増えるのであります。

現実に、錫の含有量を５０％と表示しながらも実は４０％しか含まれていないハンダが市場に出回っていたという事例があるのであります。当時はハンダ職人の技術が如何に錫の含有量を多く見せるかで評価された時代でありました。

そこで、千住金属工業がハンダの成分を分析した結果、錫の含有量が仕様書より１～２％少なかったのであります。当時の感覚であれば、この程度は誤差の範囲であり、不正行為とまでは謂えないものであります。ただ、正確な数字が電電公社に伝わると佐藤金属は指名停止になりかねません。

そこで、佐藤金属は千住金属工業に対し、「この程度であれば品質面で問題はないから、分析結果を仕様書に合わせて欲しい」と頼んだのであります。佐藤金属としては、兄弟会社の誼で頼めば何とかなると思ったのでありましょう。

ところが、佐藤先生は「絶対に数字を変えてはならない。何のための分析だ」と言って佐藤金属の要望を却下したのであります。驚いた佐藤金属は、佐藤先生に何度も頼み込みましたが、先生は断固としてこれを拒否したのであります。

このことに一番驚いたのは寧ろ電電公社であったかも知れないのであります。何故かと言いますと、千住金属工業と佐藤金属との関係は電電公社にも周知の事実でありましたから、まさか佐藤金属がペナルティーを受けるような分析結果を千住金属工業が提出するとは思わなかった筈だからであります。

ここにも佐藤さんの自分の職業を愛するが故の職業倫理の厳しさを観ることが出来るのであります。

実は、この話の根底には、ロータリーの職業倫理の中核にある賄賂禁止の思想が流れているのであります。

親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起ります。これは、自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、もとより同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。

そこで、ロータリーは、古来、倫理運動の視点から、賄賂の授受を厳に戒めているのであり、これは職業奉仕の核にある大きな柱であります。

昭和六年の日本の２代目のガバナー井坂孝のガバナー月信第１号(S.6.8.10)は、夙に有名であります。彼は、国際ロータリー第７０地区のガバナーに就任して、全国のロータリアンが挙々服膺すべき職業倫理の三ケ条を提

唱しました。

即ち、第一に曰ク、ロータリアンたる者は約束を守るべし。
第二に曰ク、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ。
第三に曰ク、ロータリアンたる者は徒に慈善事業に憂き身をやつすことなかれ。　第一の約束を守るというのは、ロータリアンは職業人でありますから、契約を守ること即ち、契約的正義の実現を説くものであります。

更に、約束を守ると言うことの中には、時間を守るということが当然含まれています。時間は万人の共有物であります。時間を守らないということは、全ての人に迷惑をかけ、信用を失うことになるのであります。したがって、時間を守るということは、古来、ロータリーの精神伝統となっているのであります。

第二は、賄賂を贈ることなかれ。これは、言うまでもなく、賄賂の横行しない健全な取引社会・公正な自由競争社会の実現をめざすものであります。

第三は、慈善事業の実践を否定するものではありませんが、それに憂き身をやつしてはならない、即ち、慈善事業はロータリアンでなくてもできることであります。ロータリーの第一義はロータリアンの心の開発であり、それに基づく職業倫理の実践によって自分の職業を安定させて、然る後に余裕があれば、慈善事業を実践してもよいと言うのであります。

要するに、井坂ガバナーの提唱は、職業奉仕を中心とするロータリー観の提唱であり、ロータリーの神通力は、実業の世界においてのみ発揮せらるべきであると言い切っているのであります。これは、思想の系譜としては、ロータリーの哲学者アーサー・フレデリック・シェルドンの系譜に属するものであり、井坂ガバナーの提唱に深い感銘を受け、これに共鳴されたのが神戸ロータリークラブの直木太一郎パストガバナーでありました。したがって、ここにシェルドン、井坂孝、直木太一郎と続くシェルドンの思想の日本における系譜を見取ることができるのであります。

ところで、この３ヶ条の中で職業倫理との関係で特に重要なのは、勿論第二の『ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ』であります。これは、言うまでもなく、賄賂の授受が健全な取引社会と公正な自由競争社会の実現を阻害することを説くものでありますが、それは同時に、賄賂の授受が、結果的には当事者自身の信用を失墜し、企業の発展を阻害することを説いているのであります。このことは、先般の雪印食品事件に始まる一連の偽装事件を見れば明らかであります。

実は、私が３年前に御当地２５８０地区の地区大会にＲＩ会長代理として出席したとき、職業倫理について賄賂禁止の話を致しました。

ご存じのように、現代の職業社会には、賄賂を使わなければ生きていけない業界があります。しかし、ロータリーは厳然として賄賂を禁止しています。すると、そのような業界にいるロータリアンは生きていけません。どうすればよいのか。

自分はロータリアンだから絶対に賄賂を使わないといって自分の会社を倒産させてしまっては何にもなりません。私は、ロータリーは不可能を強いるものではないのだから、そのような業界にいる人は、賄賂を使えばよろしい。但し、堂々と使うのではなく、賄賂を使わなければ生きていけない業界は、四つの

テストに照らしても不純極まるものだからどうしても改革しなければならないと思い定めて、そのための努力をして、しかも自分の世代でそれが成し遂げられなければ、孫子の代まで申し送っていくという信念を持って、やむを得ず使う賄賂でなければならない、という趣旨の話を致しました。

会場の雰囲気からして、この話はパンチが聞いていたようでありました。ところが、夜の懇親会の席で佐藤先生から『深川さん、今日の賄賂の話は頂けないよ。私は絶対に賄賂を使いませんよ』と諭されました。私は、脳天に鉄槌を食らったようなショックを受けました。後で先生から御自分の体験談を伺い、身にしみてロータリーの職業倫理の厳しさを思い知った次第であります。

この賄賂につきましては、企業の社会的責任とも関連がありますので、少し長くなりますが申し添えておきます。

佐藤先生は、企業の社会的責任という言うものを早くから自覚されておられました。それは、先生の「経営理念」にある「公器としての使命を果たす」という言葉に表れています。したがって、スプリンクラーの製造を始めたこともその一つの表れでありました。

このことについて先生から伺ったところでは、旧制第二高等学校の先生の先輩が『今度、消防法の改正で一定の規模の建築物にはスプリンクラーの設置が義務づけられる見込みだが、スプリンクラーヘッドの製造は現在アメリカが独占している。消防庁はメーカーに設置を促しているが、残念ながら何処も開発できないでいる』といったそうであります。

そこで先生は、この情報に飛びついたわけであります。ただ、先生は、儲かるから決断したのではなく、この仕事が社会的に重要な仕事であり、しかも，他社が何処も開発できていないからこそこの仕事をやろうと決断されたのであります。しかも、これは従来の先生の企業と根本のところで繋がっているからやる価値があると判断されたのであります。

スプリンクラーヘッドというものは、その品質が悪ければ人命にかかわるものでありますから、その社会的意義は大変大きいのであります。しかも、千住金属の基本事業であるハンダの製造と関連があります。そして、国内では未だ何処も開発に成功していなかったのであります。だからこそ先生はこの事業に着手したのであります。

ただ、千住金属のハンダの技術だけでは、スプリンクラーヘッドは開発できません。そこで、先生は、機械工学の専門家である高橋栄吉先生を迎え入れたのであります。そして、高橋先生を中心とした開発グループがスプリンクラーヘッドの国産化に成功したのであります。

ところが、やがて、これを真似する企業が出てきました。しかも、スプリンクラーに欠かすことのできない給排水工事の業者までがやり出しますと、スプリンクラーヘッド自体はそんなに高価なものではありませんから、設備全体の販売と工事請負事業で設ける会社が沢山出てきました。その結果、千住金属の仕事のシェアーが狭くなり、赤字を計上するようになりました。

しかも、スプリンクラーヘッドが誤作動を起こすと計り知れない損害賠償責任が発生します。したがって、千住金属の社内には、このことを知りながら敢えてスプリンクラー製造を続けるのであれば、給排水工事も合わせて事業を営むか、或いは、当時の土木建築業界の慣例によって賄賂を使うべきだと言う声

がありました。

しかし、先生は、「品質で勝負するのがメーカーの本文」だとしてそのどちらの提案も受け入れなかったのであります。そして、やがてその声は全社的になり、遂に会社を挙げてスプリンクラー事業からの撤退を要求するようになりましたが、佐藤先生は断乎として拒否し続けたのであります。

このことについて先生は、「私は、皆が反対することを無理矢理押し切ったことは殆どない。しかし、スプリンクラーについてだけは譲れなかった。これは、生涯でただ一度、正に乾坤一擲の勝負だった」と言っておられました。

先生の計算では、ハンダ事業の利益によって、スプリンクラー事業の赤字はカバーできていたのであるから、この赤字は、事業育成のためのむしろ健全名赤字であり、しかも、この赤字は税務処理上は、損金で落とせるという判断をしておられたのであります。

やがて、他社製のスプリンクラーの誤作動による事件が発生し、結局、品質を重視する千住金属が殆どのシェアーを独占することになったのであります。

したがって、もし、佐藤先生が社内の反対の声を聞き入れて、千住金属がスプリンクラー事業から撤退いたら、我が国におけるスプリンクラーの普及が遅れてしまったと思うのであります。この意味で佐藤先生の果たした社会的責任は大きいと謂わなければならないのであります。加えて、スプリンクラーの品質の向上に努め、ひたすら良質なものにこだわり続ける職業倫理に徹した先生の信念には驚嘆するほかはないのであります。

また、企業の社会的責任については、先生は、環境問題にも深い関心を持っておられました。私は、曾て千住金属の栃木の事業所を見せていただきましたが、先生はこの事業所を開設する際、その辺り一面の松林をできるだけ残そうとされたのであります。

実は、この頃は、日本の高度成長期でありましたから、環境保護よりも寧ろ開発一辺倒の時代でありました。しかし、先生には、緑に囲まれた事業所を造りたいという思いがあったのであります。そしてこれは、先生の職業倫理の根底には、仏教徒として、山川草木に至るまで生きとし生けるものの命を慈しむ心が流れていたのであろうかと思うのであります。

因みに、この栃木の事業所は、昔の奥州街道が通っていた場所であり、この松林はその一部でありました。結局、先生の意向によって、この事業所の一角には今も松林が残っており、そこには旧奥州街道の碑が立てられているのであります。

そろそろ纏めに入ります。２００２年の国際協議会で、RIBI副会長のマイク・ウエブさんは、「倫理と指導者」というテーマで幾つかを話しておられます。

このことは、元ＲＩ会長ビチャイ・ラタクルさんと同じくロータリーの職業倫理に強い関心を持っておられることを示しているのであります。

マイク・ウエブ副会長は、『ロータリーというこの素晴らしい運動には、今、様々な変化が起こっている。ロータリーは、地域社会や世界全体の考え方や習慣の変化を大きく反映させてきた。しかし、ロータリー創立当初の理念は、未だ真実であり、特に、倫理についてのロータリーの綱領の第２「事業及び専門職務の道徳的水準を高めること」の奨励の文言は、今も真実である』と言っています。

これは大事なところであります。

『英語では、倫理と指導者は、非常に似た二つの言葉によって、表裏一体に絡み合っています。それは、Principle と Principal であります。そして、倫理 Principle は羅針盤のようなものであります。それは、何時も向かうべき方向を示しています。したがって、羅針盤の読み方さえ知っていれば、私達は迷ったり、混乱したり、相反する意見や価値に惑わされることはありません』と言っているのであります。

『ロータリアンが倫理的に行動することの責任は誰にあるのでしょうか。それは、私達全員であり、単に地区ガバナーやクラブ会長にあるのではありません。ロータリアンの一人ひとりが、各自の行動に責任があるのであります』

このように、ロータリアンには、自分の行動の最終責任があります。倫理的に行動するか否かを決めるのはロータリアン自身であります。自己反省・自己研鑽は、倫理の非常に重要な構成要素なのであります。したがって、ロータリアンは、私生活や職場、そしてロータリーの活動において、倫理的に行動することの必要性を説かなければなりません。ロータリアンは、人生のあらゆる側面において確固とした倫理的行動の提唱者でなければならないのであります。

そのためには佐藤先生の説かれるように、人を育てなければなりません。問題は、どのような人を育てたかが問題であります。私は、人を育てるとは、情理兼ね備えた人間を育てることだと思っています。そこで最後に、情理兼ね備えるということの「情」についての話を一つ紹介しておきます。

この話は、今から約２０年前、評論家の草柳大蔵さんが一燈園という修養団体で話されたことであります。

昭和６２年、映画俳優のユル・ブリンナーが肺癌で亡くなりました。彼は、その８年前から肺癌になったということが判っていましたので、その４年前に京都に来て、お忍びで大徳寺の和尚さんに会いました。この和尚さんは鈴木大拙先生を凌ぐほど英語の出来る人でありましたが、ユル・ブリンナーは、和尚さんに向かって真剣な眼差しで２時間に亘って話を聞きました。

「死ぬということはどういうことですか」「生きるということはどういうことですか」と一生懸命に聞いたのであります。凄い切込みであります。

後で聞いたところ、彼は、曹洞宗の道元を実によく読んでいたのであります。ニューヨークの本屋へ行きますと、道元禅師の翻訳本が沢山あるそうであります。
そして、道元禅師の教えを基にして和尚さんに聞いていたのであります。そして２時間。そして、終った後で、畳に手をついて、「本日は、誠にありがとうございました」と言って丁寧にお辞儀をしています。

そして、「就いては、もう一つ質問があります。貴方の着ていらっしゃる白い着物と白い帯が実によろしいので、それを我々が着てもよろしいものでしょうか」

和尚さんが、「貴方の頭は、我々と同じだから大丈夫です」と言うと、すぐ西陣へ行って、着物を２着作って帰りました。彼は、肺癌になってからの８年間に死生観を実に突き詰めて考えていたのであります。

そして、寿司が大好きで、ニューヨークの「竹寿司」と謂う店によく行って、劇場が跳ねるとスタッフを連れて行って一緒に御飯

を食べる。『寿司を食べたいだけ食べなさい。日本酒を飲みたいだけ飲みなさい』と言って御馳走をするのであります。

ところが、その連れてくる人はというと、切符もぎりの女の子、掃除係のおばさん、照明係のように、人生で一回も脚光を浴びたことのない、ライムライト（lime light）を浴びたことのない裏方さんばかりであります。そのような人達を連れてきて、

「さあ、食べたいだけ召し上がれ」と言って食べさせる。この辺が大変魅力的なんでありますが、彼の周辺の人達と話合ってみると、彼は、蒙古人とハンガリーのジプシーの間に生まれた子でありました。

実は、ヨーロッパやアメリカの社会では、ジプシーだと判った途端に、そのことだけで社会的存在を抹殺されてしまします。

あの「第三の男」のチターの名曲を作ったアントン・カラスは、世界中にあの曲が流れて、遂にホワイトハウスの大統領の前で演奏会を開いたり、フランスの大統領の官邸で演奏会を３日間続けたという、その位、世界中のハイライトが当たって、そして、沢山お金を儲けて、ハンガリーの首都ブタペストに「カラス」というレストランを開きました。２ヶ月前からでないと予約できない位流行ったのでありますが、或る時、アントン・カラスはジプシーの子だという新聞記事が僅か１００行くらい載ったために、サアッとレストランから客が退いて、その店は潰れてしまいました。

そして、カラス自身は、遂に昭和６１年、落魄の内にこの世を去ったのであります。ハンガリーの本当にうら寂しい、雨漏りのするアパートのベッドの上で、誰にも看取られず、ただ一人で死んでいたのであります。そのくらい厳しいのであります。

ユル・ブリンナーは、このような環境の中を耐えに耐えてきたからこそ下っ端の涙が判るのであります。社会の底辺で支えている下積みの人の気苦労が判るのであります。だからこそ、その人達をお寿司屋さんに呼んで御馳走をするのであります。このようなエピソードは沢山ある筈ですが、彼はそういうことは自分では一切謂わないのであります。これはまさに日本流に謂えば、「陰徳陽報」の心であります。下積みの人達も居て、更に使い捨ての物もあって始めて世の中は成り立っているのであります。したがって、私達は、下積みのものや陰の力に感謝する心を忘れてはならないと思うのであります。

この世の中には、一方に noblesse oblige のような身分や特権のある豊かな社会があると共に他方には、差別された貧しい社会があります。どちらの社会に生きる人達も温かい赤い血の通った人間なのであります。したがって、リーダーたる者は、常に弱者に涙する心を失ってはならないと思うのであります。

会社でも、病院でもその他あらゆる団体の組織の頂点に立ってリーダーシップを発揮する者は、常に社会的弱者に対する思いやりの心がなければならないと思うのであります。

これを要するに、私は、ロータリーのリーダーは、情理兼ね備えた者でなければならないと思うのであります。したがって、「理に走って情を忘れたる者、これをリーダーと謂うことを得ない。また、情に溺れて理を失いたる者、これまたリーダーと謂うことを得ない」と集約できると思うであります。

以上、職業倫理というテーマについて、佐藤先生の実践された倫理を私なりに解釈して

申し述べましたが、これを総括して一言で言えば、佐藤先生は身をもって職業倫理を実践された人であり、正に「職業奉仕真骨頂漢」とも謂うべき人であったと思うのであります。御静聴有難うございました。

あとがき

我が伊丹ロータリークラブの代名詞ともいえる、例会での深川先生の「ロータリー３分間情報」としての「純ちゃんのコーナー」も８年を経過しました。新人からベテランのロータリアンの手引書としての役割を担っているといっても過言ではないでしょう。毎回の３分間に凝縮されたロータリー精神を聞くことで、更なる充実したロータリーライフに役立てていただければと思います。

今回で８冊目となる冊子が発刊の運びとなりました。我がクラブ５０周年の節目を迎え、これからのますますの発展のためにも「純ちゃんコーナー」にて毎回ロータリーの真髄について聞かせていただくことによって、ロータリーの世界の真髄に近づけると信じております。

最後になりましたが、冊子の発刊につきまして献身的なご尽力をいただきました深川先生、田中(孝)会長、大森幹事をはじめとする会員の皆様、そして事務局のご協力に感謝いたします。

伊丹ロータリークラブ　　2008～2009年度　　雑誌・ロータリー情報委員会